
Home Sweet Home

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Home Sweet Home

【ZPDF】

N8501Y

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

妻を亡くした直輝と、その家にハウスキーパとして働きに行く女子高生有衣。寂しさを抱えるふたりは、やがて……？

目の前に聳え立つ、一見してすぐにそれとわかる高級マンション。18年と少しのこれまでの人生では、あまりに無縁だったそんな建物に、有衣（ゆい）はかなり気後れしていた。

エレガントなその建物とは対照的に、有衣は腕がもげそうなほど重い買い物袋を下げていたからだ。

今日は月曜日。その袋には、6日分の食料品が詰められるだけ詰まっている。

人手不足で清香（さやか）さんの会社に駆り出されて、のこのじと来てはしまったけれど、本当によかつたのだろうか。こんなマンションに住んでいるなんて、一体どんな人が待っているのか。

柄にもなく不安になっていたが、ガードマンの寄こした視線に慌てて、エントランスへ入っていく。

震える手で3301号室のボタンを押し、インターフォンで呼び出すとすぐに応答があった。

「はい」

やわらかな声だった。

有衣は少しだけ、緊張が和らぐのがわかった。

「あの、KSスタッフの川名（かわな）と申しますが」

「ああ、どうぞ。エレベータの脇でもう一度呼び出してくださいね」「わかりました」

インターフォンが切れ、代わりにロックが外されたドアが開く。

恐る恐る中へ進むと、エレベータホールがあり、エレベータは6基設置されていた。

下層階、中層階、上層階用、そして上り下りの専用にそれぞれ分かれているらしい。

31階から上層階用と表示されており、ドアの脇には何かを読み取

るよつなパネルと、インターフォン。

そつこえぱもう一度呼び出して、と言われたのだと思いだして、呼び出す。

「ドアが開いたら乗つて、33階へびづれ。着いたら一番左のドアです」

「わかりました」

少し待つていると、音もなくHレベータのドアが開く。
厳重なセキュリティの様子に、また少し緊張がぶり返し、不安な気持ちで乗り込んだ。

ゆづくりと上昇する箱の中で有衣は、今から向かう家について頭の中でおわらこしていた。

今まで担当していた坂井（さかい）さんによると、家の主は西岡直輝さん、30歳、3歳の息子晴基くんがいる。

医師で日曜日以外にはほとんど休みがなく、ハウスキーピングが必要なのは平日と土曜日。

主に必要とされているのは食事と晴基くんの世話、掃除と洗濯はついでで良いらしい。

有衣がこの家に来たのは、その坂井さんが産休を取ることになつたからだ。

人手不足に困つた清香さんが、ちょうど受験も一区切りついて暇だろうと有衣に話を持ち込んだのである。
夏休みも終盤、確かに暇を持て余していたため、断る理由もなく結局行くことに決まつてしまつた。

我が母親ながらまったく押しの強い人だ、と思い出して小さく溜息をこぼす。
ちょうどそこで目的の階に着いたらしく、上昇が止まつて少しだけ浮遊感がした。

Hレベータを降つると、ドアは4つしかなかつた。

そのドアとドアの間隔は、庶民の有衣からすれば、果てしなく遠かつた。

一番左のドアへとかく向かい、今日3度目のインタフォンを鳴らす。

応答はなく、少しの間のあと、代わりにドアが開けられた。

出でたのは、男性にしては色の白い、優しそうな田の人だった。

「川名さん？」

「はい。はじめまして」

「こんにちば！」

有衣の声にかぶるよつて、大きな声が下のほうから聞こえた。

「あ、こんにちば」

挨拶を返すと、元気と満面の笑みを浮かべた小さなかわいい男の子。

その顔を見て一気に緊張が解けた有衣は、つられて「ひろみさん」と笑顔を返した。

その様子を、直輝が少しだけ驚いたように、眩しそうに見たことは、気づかなかった。

玄関に入るとすぐに、さりげなく重たい荷物が引き受けられ、一瞬戸惑つたが促されるまま中へ入った。

広いリビングに通されてソファを勧められ、落ち着かない気持ちで腰を下ろすと、横に晴基が来る。

「ひろみさんよりも、とした？」

「ひろみさん？」

「こないだまで、きててくれたの」

「ああ、坂井さん。よりも、年下だよ」

「じゃあ、なにちやん？」

年下だと、ちゃんと付けになるのか。

くりくりとした目で期待を込められて見つめられるといいながら、氣分になつた。

「有衣つていつの
ガチャンッ。

食器が激しくぶつかる音に、キッチンへ目を向けると、信じられない物を見るような目がこちらを向いていた。

何だろう。何かしただろうか。

急に不安な気持ちに襲われて見つめ返していると、やがてぎこちな
く視線は外された。

「ゆいちゃん」

小さな声に、有衣ははつとして晴基に視線を戻す。

「かわいいなまえだね」

「ありがとう」

「うん。あのね、おんなのこになまえをきいたらね、そういうんだ
つて」

そんなかわいい言葉に、不安も忘れて思わず吹き出してしまった。
こんな小さい子に、そんな言葉を教えるなんて、と思うとおかしく
てたまらない。

「誰が教えてくれたの？」

「ほいくえんの、たけせんせい」

秘密を教えるように、ひそひそ声で話す晴基はかわいい。

有衣は一人っ子で小さな子どもと接したことがあまりなかつたが、
子ども独特の温かさが好きだつた。

「じゃあ、今度は私に名前を教えてくれるかなあ」

「うん。ぼくね、ハルだよ」

「ハルくん？」

「うん。はるきつていうの。みんなハルつてよぶよ」

頷いたところで、お茶を入れたトレイを持った直輝がこちらへ来る。
有衣を見る顔は、最初よりもやや強張つて見えた。

「ハル、こっちにおいで」

向かい側のソファに腰を下ろした父親に呼ばれ、晴基は素直に従つ
たが、その表情には不満が表れている。

晴基は有衣をじっと見ながら、しょんぼりとソファに座った。

黙つてお茶を勧め、言いにくそうに直輝は切り出した。

「君は、名前が…」

少しだけ苦しげにも聞こえた声に、有衣は内心首を傾げていた。先ほどの派手な食器の音を思い出し、そろいえば名前を言つていた時ではなかつたか、と思い当たる。

「あの、川名 有衣ですが。それが何か…」

「唯一のゆい？」

「いえ。有り無しの有に、衣です」

「…そう」

名前が一体どうしたのだろう。漢字まで聞かれるとは。固く強張つた声の調子と、聞かれていることの不自然さに、有衣はもう少しで取り乱しそうだつた。

有衣は、顔を俯けてソファに押しつけていた体をもぞもぞと動かし、寸でのところで思いとどまつたのだ。

しばらくの沈黙のあと聞こえた声は、最初に聞いたやわらかな声に戻つていた。

そつと窺い見た感じからすれば、表情の強張りも解けたように見え、有衣はほつとする。

それから、一週間のスケジュールややるべきことのリストなどを見せてもらひ、大まかな内容を頭に入れる。

その後一通り部屋の中を案内された。

書斎として使つてゐる部屋は、掃除もしなくてよい代わりに、入らないでほしいと言われた。

ベッドルームには、大きなベッドと子供もよつのかなベッドが並べられていた。

ベッドルームといつ場所に、有衣は奇妙な緊張を覚え、そんな自分が不思議だった。

最後に、出入りが自由にできるようになると、鍵が渡される。

それは見慣れていた銀色のものではなく、ICカードキーで、使い方を説明してもらわねばならなかつた。

エントランス、Hレベータ、玄関で、それぞれパネルに彌せばよい
ということらしい。

いつたんドアが閉るとロックされるため、いつでも持ち歩く必要
があるということだつた。

なんだか別の世界の出来事のような、不思議な感覚を有衣は味わつ
ていた。

「取り急ぎとこう感じで悪いんだけど。大体の説明はわかつてくれ
たかな」

「あ、はい」

「多分言ふ忘れないと思つんだけど」

「なまえ！」

晴基の言葉で、思い出したように笑つた直輝は、説明を付け加える。
「苗字で呼ぶのはダメなんだ」

「え？」

「君のことを、有衣ちゃんと呼んでもかまわないかな。苗字で呼ぶ
と、ハルに直されるんだ」

「…もしかして、坂井さんのこともずっと名前で呼んでたんですか
？」

「ううなんだよ。ハルはこうこう頑固で困つてゐる」

情けなれやうに眉を少しあげた顔に、有衣は思わず笑つた。

晴基と同じように、ひろみさん、と呼ぶ姿を想像してしまつたから
だ。

それと同時に自分が、有衣ちゃん、と呼ばれる「ことを考へると、ど
こかふわふわとした気分になつた。

「それと、呼びづらいだろうから申し訳ないんだけど。俺のことも、
苗字では呼ばないでくれるかな」

「えつ？」

「でも…」

「苗字で呼ばれるとハルも反応してしまって、いちいち面倒なんだ。いくら言い聞かせても、ぼくも西園さんだよ、なんて言つてちつとも聞かないし」

苦いものを嘔んだような顔で話す直輝のそばで、晴基はそれを気にも留めずにこにこと笑っている。

有衣はなんだかおかしくなつてしまつたが、その要求を飲むことにする。

「わかりました。じゃあ、晴基くんはハルくんで、西園さんは直輝さんで、いいですか？」

「それでいいよ。これからよろしく頼む」

頭を下げられて、有衣も慌てて頭を下げて返した。

新しいハウスキーパーのために、無理に半休を取つたらしい直輝は、説明を終えた後慌てて病院へ出て行つた。

別世界みたいなマンションも、妙な質問も、一瞬の強張つた表情も、気にはなつたが、

このふたりと、特に晴基と過ごすのは楽しそうだ、と思つた有衣は、ここに来てよかつたと早くも思つた。

0-1 (後書き)

このお話を、あたたかい雰囲気を田描したいと願っています。
どうぞよろしくお付き合くださいませ。

仕事は夕方から始まる。

まず最初にすることは晴基を保育園に迎えに行くこと。
カメラ付きのインタフォンで到着を告げると、先生が晴基を外に連れてきてくれる。

ここまでしないといけないとは、本当に物騒な世の中になつたものだと、初めて来たときには驚いた。

有衣を見つけた晴基の顔は本当にうれしそうで、その笑顔を見ると有衣も嬉しくなる。

それから、手をつないで一緒にマンションへ歩いて帰る。

そして、夕食の準備をして一緒に食事し、後片付けも一緒にする。
最初はひとりで片づけていたのだが、一度お皿を運んでもらつたら、お手伝いが嬉しいらしいとわかつたので、

以来ずっと、運べるものはずべて晴基に運んでもらいつことにしている。

お皿一枚、コップ一個、と効率は悪いが、一生懸命運ぶ姿は実に微笑ましい。

「上手に運べたね

「ありがとうね」

運んでくれるたびにそんな言葉をかけてあげると、晴基は嬉しそうにしてますます一生懸命働いた。

食器を洗っている間、晴基は有衣の足もとで本を広げている。
後片付けが終わると、しばらくはお遊びタイムだ。

晴基がはまっているのは、積み木遊びと、レールの上で電車を走らせる遊びだ。

ひととおり気が済むまで遊んだら、晴基が片づけている間に有衣も手早く掃除し、今度は入浴。

さすがに有衣は入らないが、浴室と一緒に行ってあげてお手伝い。

浴槽に入つたら100まで数えるのが、お風呂でのルールらしい。途中つかえながらも数え上げると、どうだーとばかりの誇らしげな顔で有衣を見上げる。

そんなひとつひとつの仕草や表情が、有衣にはかわいくてたまらなかつた。

髪にドライヤをかけてあげて、歯磨きを終えた晴基をベッドルームへ連れていく。

晴基の寝つきの良さには、毎回驚かされる。

ベッドに入つて、掛け布団をかけてあげると、ものの2、3分で寝息を立て始めるのだ。

眠る前はぐずつぐず子も多いと聞くが、晴基がそうしたことは一度もなかつた。

有衣はいつも、晴基が眠るとすぐにベッドルームを出ていく。

最初に感じた奇妙な緊張感が、いつまでも抜けないせいだ。

晴基の小さなベッドの隣の、大きなサイズのベッドが否応なしに田に入るせいで、意識せずにはいられなくなる。

このマンションで直輝に会つたのは、最初の1回だけなのに、なぜか気になる。

やわらかな声が耳から離れないし、情けなさそうに笑つた顔も、なぜか強張つた顔も、脳裏に焼き付いている。

それらを振り払つようこ、部屋の中を点検し、玄関以外の電気を消して部屋を出る。

そうすると、だいたい夜の8時半を過ぎる頃だ。

家に着くのは9時10分過ぎ頃で、まだ会社にいる清香さんに軽い夜食を作つてあげてから、2階に上がる。

清香さんは忙しい人だったから、家事をするのは慣れている。

それにオプションで晴基が付いてきた、といつくらいのイメージで、西岡家の仕事をは楽しいものだった。

通い始めて2週間、無味だった夏休みが、気づけば充実していた。

いつも通り帰るつもりした時、携帯を持っていないことに気がついた。どこに置いただろうか、とキッチンやリビングを探し回るついで、ふと写真が目に入る。

たくさんの写真たちの中で、ひと際目を引いた2枚の写真。直輝と、嬉げに笑った綺麗なひとの写真、それからそのひとつまだ生まれたばかりと思しき晴基の写真だった。

「ハルくんのママだ…」

どうして今まで気づかなかつたのだろう、と不思議なくらい際立つて見えた。

有衣はなぜだか、目が離せなくなつていた。

と、急に大音量の着うたが流れた。
まるで悪いことをしていたときのように、有衣の体はびくりと揺れる。

音が聞こえたのは、ベッドルームのほうからだつた。
これでは眠つた晴基が起きてしまう、と慌ててベッドルームへ向かう。

急いで携帯を床から拾い上げ、ボタンを押して音を止める。

晴基は起きていよいよに見えた。

けれど、不自然なまでに息を詰めている様子が有衣に伝わる。

「ハルくん」

声をかけると、ぴくりと小さく肩が揺れる。

その様子を見て、有衣は自分が小さなことなどを急に思い出した。
父親が亡くなつた直後、清香さんを心配させまいと、毎晩よく眠れるふりをしたことがある。

本当はショックで眠れなかつたのに、寝ないと清香さんが心配するから、だから必死で寝たふりをしていた。

晴基ももしかしたら、そうだったのではないか、と思つた。

「ハルくん。音で起きたやつたかな。それとも、さつきからずっと

起きてたかな」

怒っている、と思われないよう、優しく静かに話しかけてみる」とした。

晴基は反応を返さなかつたが、有衣は辛抱強く待つことにする。やがて晴基は、もぞもぞと動き出し、寝返りを打つて有衣のほうを向いた。

「ゆいちゃん」

「なあに？」

「ぼぐ、ねでなかつたの」

「うん。そつか…」

「おこらなーい？」

「怒らないよ」

有衣が晴基の頭を撫でてあげると、晴基は照れたように笑つた。それから、不思議そうに有衣の顔を見上げる。

「ゆいちゃん、ぼぐがねでなかつたの、どうしてしつてたの？
ひろみさんもしらなかつたんだよ。ゆいちゃん、すごいねえ」

「うーん…ハルくんと、おんなじだつたから、かな」

「おんなじ？」

意味がわからずとも、『おんなじ』といつ言葉には惹かれるらしく。晴基は少しだけ、嬉しそうな顔をした。

「ハルくんにはママがいないんだよね」

「うん。ママはしゃしんだけなの」

「私にはね、パパがないんだ。パパが、写真だけなの」

「パパがないの？ ぼぐ、パパはいるよ。

ゆいちゃんは、パパがいなくて、かわいそうね…」

晴基の無垢な言葉が、有衣の心に染みた。

片親がいないという事実は同じなのに、自分にはいる父親が有衣にはいないことがかわいそうだと言つ晴基。

「ハルくんは、優しいね」

「やれしこと、うれしい？」

「うん。嬉しいよ」

「じゃあ、いつぱこやさしくなる！」

あのね、ゆいちゃんパパがいなくてかわいそつだからね、ぼくがゆいちゃんのパパになつてあげるよ」

「ふふ、ありがとう」

とつてもいいことを思ついた！と言わんばかりの口調で、有衣は思わず笑顔になつた。

小さい子どもの考へことは、とてももなく大きい。でも優しさが嬉しくて、かわいくて、こんな小さなパパができるのもいいかもしない。

有衣は幸せそうにほほ笑んだ。

「それでね。ゆいちゃんは、ぼくのママになるの

「えっ？」

そのとんでもない言葉に、有衣の表情は一瞬強張つた。

晴基が有衣のパパになる、という言葉とは、持つ意味も重要度も、次元のまったく違つものだつたからだ。

「いつもじやなくていいの。ぼくがおねがいしたら、そのときだけママになつて」

それでもけな気に言ひ募る晴基に、有衣はどうしても頷かざるをえなかつた。

多分、晴基は母親がいないといつ、自分の特異性を、保育園といつ小さな世界だけでも十分に感じているだろう。

その疎外感を、たとえその場しのぎだとしても、少しでも軽くしてあげたいと有衣は思つた。

「じゃあ、ハルくん。ひとつだけ約束できるかな

「なあに？」

「今のお話はね、パパには内緒にするの」

「どうして？」

「うん。パパが悲しくなるかもしないから。

ハルくんがパパに秘密にできるなら、それならハルくんがなつてほしいとき、ママになつてあげる」

晴基は、しづらひぐーん、と悩んでいたが、やがて笑顔になつて頷いた。

なぜ直輝が悲しくなるのかわからない様子だったが、有衣が承諾したことの嬉しさのほうが勝つたらしかった。

安心したところで眠気が襲ってきたようで、晴基は小さなおぐびを何度もする。

それでも、目を閉じたらすぐに有衣がいなくなつてしまふと思いつくにあつた有衣の左手をぎゅっと掴んだ。

「ハルくん。ここにいてあげるから、眠くなつたら寝てもいいんだよ」

「…うん。いてね。やくそくだよ」「約束」

すぐにもでも眠つてしまいそうだが、それでも晴基の小さな手は有衣の左手を掴んで離さない。

有衣はその小さな手に、余つていた右の手をそつと載せてあげた。ゆつたりとあやすよつて、その手を撫でてあげるつひり、晴基はやがて本当に眠りに落ちた。

晴基が眠つて、10分ほど経つた。

いつもならすぐ帰るところだが、今日は帰れないでいた。

晴基の優しさと、内にある寂しさに触れて、しかもここにいてあげる、と約束してしまつたから。

せめて直輝が帰つてくるまでは、いてあげなければいけない気がしたのだ。

そういうえば、直輝がいつ頃帰つてくるのか、有衣は知らなかつた。いつも晴基がどれほどの時間この部屋でひとりきりで過ごしていたのか、知らなかつた。

そして、晴基のことを考えるその片隅で、直輝に会いたいと思つて

いの自分がいる」とも、否定はできなかつた。

02（後書き）

今回は、“有衣とハル、心の絆ができる”の巻でした。ハルは大まじめに言つてましたが、実際ハルがパパだといろいろ大変そうです：（笑）。

まだひとり蚊帳の外の直輝。

この人が何を考えているのか、早く書きたいな、ということで、次回へ続く！です。

時刻は午後9時半を回っていた。

直輝はタクシーを急いで降り、足早にマンションに入つていいく。
晴基が寝た後は、ハウスキーパは帰ることになつている。

そのため晴基が寝てから直輝が帰るまでの間、必然的に晴基はある部屋にひとりということになる。

自分で出している条件ではあるが、実のところ直輝はそれが心苦しかつた。

今はそんなことはなくなつたが、最初の頃の晴基は、直輝が帰ると部屋で泣いていたものだ。
それでも今までさえ晴基はたつた3歳であり、辛い思いをさせているに違いないのだ。

ただ、あまり遅くまで拘束するとハウスキーパ自体が派遣されないことが多いため、我慢させてしまっている。

ロックを外して玄関のドアを開けると、明るかつた。
いつもは玄関の小さな明かりだけがついているのだが、今日は廊下モリビングの照明もついている。

消し忘れていたのだろうか、珍しい。

そんなことを思いながら脱いだ靴を仕舞おうと目線を下げると、小さなミュールが目にに入った。

ということは、まだ帰っていないのか。それこそ珍しいことだ。

直輝は、一度だけ会つた新しいハウスキーパを思い浮かべた。

初めて部屋に来た時の緊張のかたまり、そして晴基の顔を見て一気にほころばせたその表情。

その劇的な変化の瞬間は、とても眩しく感じた。

年齢を聞いたことはないが、少なくとも自分よりは5つ以上は下だ

るつと予想している。

若さうに見えるのに、料理はつまく 実のところひみをよつ
まかったし、仕事はしっかりしている。
あまり重きを置かなくてよいと言った掃除も洗濯も、一通りこなし
てくれている。

そして何より、晴基の懐きようが普通でない。
ひろみさんのことも大好きだったようだが、今回はそれ以上、いや
比にならないほどだ。

朝食のときも、日曜の休みのときも、ずっととて言つてよいほど一緒に
に過ごした時間の話をしている。

そのせいで、一度しか会つていないので、もう何度も会つたような
気分になるほどだった。

それにも、名前には驚いた。

ユイというのは、直輝の亡くなつた妻と同じ名前だった。
初めて有衣の名前を聞いた時には思わず動搖してしまつたが、今は
そのことを少し後悔していた。

よくよく考えてみれば、べつに特別珍しい名前でもないのだから、
同じ名前の人気がいてもおかしくはない。

それに、あの時有衣が見せた不安な表情が、直輝の脳裏に焼き付いていた。

幼ささえ感じるような痛々しさのようなものが見えた気がして、自分
分がひどく悪いことをしたような気になつた。
胸が痛んだ、といつてもいい。

唯が亡くなつた後の直輝の心の動きとしては、それは非常に珍しい
ことだった。

しかし直輝はまだ、その事實を自覚してはいなかつた。

目に入る範囲に有衣の姿はなく、かわりにテーブルの上に盛りつけ
られたから揚げの皿が載つている。

書斎は入らないよつてあるから、有衣がいそな場所で残りはベッドルームだけだ。

直輝は、自分のベッドルームであるにもかかわらず、なぜか若干の緊張を覚えてうろたえた。

そつとドアを開けると、晴基のベッドのそばに人影。

晴基の手を握りながら、ベッドにもたれかかっているのは

「ゆ…」

唯、と言いうになつたといひ、眩暈に似た感覚に襲われ、直輝は一度目をつぶつた。

閉じた瞼の裏で、なぜ唯だと思ったのだろう、と思ったがわからなかつた。

もう一度目を開いて同じ光景を見ると、そこには、確かに有衣だつた。

びつしてか起こすのは躊躇われた。

良識的に考えて、帰すべき時間だといひとはわかっていたが、直輝はそうしなかつた。

晴基の寝顔が、安心しきつているように見えたせいもある。

晴基と、一緒になつて眠つてしまつた有衣、ふたりの姿にどこか胸が詰まつた気がしたせいもある。

それがどうしてか、直輝はわからなかつたし、分析しようとも思わなかつた。

とにかく有衣をそのままに、ベッドルームの扉をそつと閉め、直輝はバスルームへ向かつた。

かすかに水の音が聞こえ、有衣は身動きした。

はつと意識が覚醒を促し自分がどこにいるのかを理解すると、心と血の気が引いた。

そのまま晴基と一緒につて眠つてしまつたのだ。

しかも聞こえてくるこの音は、つまり家の主が帰つてきていくこと

を示してこるに他ならない。

「ばか…！」

小声で自分を罵り、慌てて立ち上がりつつとするが、晴基の手がまだしがみついたままだった。

少しかわいそうに思いながらもさつと小さな手を少しずつ剥がしたが、晴基は起きなかつた。

ふりではないその眠る様子に安心して、リビングへ向かう。

時計を見ると、もう10時近くだった。

本来ならとうに家にいる時間と、思いの外長く眠つていたらしいことに気づき有衣はぎょっとした。

直輝がいつ帰つてきたのかはわからないが、玄関にあるノルマールに気づかないはずはない。

それに、帰つてきてまず晴基を確認しないわけがない。

ということは、一緒になつて寝こけていた自分の姿も一緒に見ただらう。

そんな風に簡単に推察できることを思ひ浮かべ、有衣はつい大きく溜息をついた。

帰らなければと思つたが、勝手に帰るわけにもいかない。

かといって、何もせずにただここで直輝を待つといつのもおかしなことだ。

とりあえず清香さんに遅くなりそうだ、ヒメールを打ちながら考える。

直輝は食事をしてきたのだらうか。

晴基がひとりで待つていると思えば、仕事の後外で食事はしてこないだらう。

そう思い、ひとまず直輝の食事の準備をすることにする。

器に盛つてあつた直輝の分をテーブルから手に取ると、当たり前だが冷めきつている。

今まではずつとレンジで温め直して食べていたのだらう、と思つと

なぜか切ない気持ちになった。

この広い部屋で、ひとりで食事をすることを考えると、寂しい。

どうせなのでもう一度揚げ直してしまつ。

夜遅いことを考えて大根をおろし、調味料を混ぜてタレを作つてあつさりめに仕上げたところで直輝が戻つた。

バスルームから出た直輝は、キッチンから聞こえてくる物音に目を瞬いた。

有衣が起きたらしい、と思いながらリビングへ戻ると、キッチンで料理をしている有衣が目に入る。

いつもは自分で温め直している料理を、今日は有衣が温め直していくれているらしい。

キッチンで自分以外の誰かが働く姿を見るのは、かなり久しぶりのことだつた。

しかも自分のために、と思うと直輝は素直につれしかつた。

「ありがとう」

カウンタ越しに声をかけると、有衣は少し気まずそうな、はにかんだ顔で振り返つた。

「あの、すみません。うつかり寝ちゃつて…」

「いや、いいよ。疲れてたんだろう。それより、時間大丈夫かな」

「あ、大丈夫です。メールしたので…」

そこで直輝はふと、誰にメールしたのだろう、と思つた。

帰りを心配する誰かが、いるのだということが、引っかかったのだ。

そんな自分の反応を初めて認めた直輝は、しばし呆然としてしまつた。

テーブルに着いた直輝は、皿の上にあるものがさきほどまでのものと違うのに気付いた。

ただのから揚げだったものの上に、大根おろしと何やらタレが載つている。

この短時間の間に、自分のためにまたアレンジしたのだ、とわかり

直輝は驚いた。

「いただきます」

お茶を入れてくれている有衣に向かって言つて、嬉しそうに笑う。そんな有衣の表情に、あたかなものを感じながら、直輝は箸を進めた。

直輝が食べ終わるのを待つてから、有衣は少しだけ緊張しながら切り出した。

「あの、ハルくんのことなんですけど」

「ハル？ 何か、悪さしたとか…？」

「いえ違います。やっぱり、少しの時間でもひとりにはできないと思つたんです。

あの、つまり何が言いたいか、といいますと。

ハルくんが寝付いて、直輝さんが帰つてくるまで、ここで待つてもいいですか？ ということなんですけど

直輝は、その言葉に驚いて有衣を見つめた。

ずっとそうしてほしかつたが言えなかつた条件を、有衣のほうから口に出したことが俄かには信じ難かつた。

「どうして、そう思うの？」

「実は、今日初めて気づいたんですけど。…ハルくん、寝たふりをしてたんですね。

寝つきがよすぎるな、とは前から思つてたんですけど、ずっと気を遣つてそうしてきたみたいなんですね」

それは初めて知つた事実だつた。

いつからかぱつたりと、泣かずにベッドで眠つてゐるようになった晴基。

“ふり”だつたのかと思つと、なんてかわいそなことをしていたのだろう、と胸が潰れそうに痛かつた。

そして、それに気づいてくれた有衣のことがとてもありがたく、そ

の温かさが心に染みた。

「ああ…それで、今日はハルと一緒にいてくれたんだね」「はい、あの…寝てしまつつもりはなかつたんですけど」しゅん、としてしまつた有衣を見て、直輝は吹き出してしまっこうになつた。

それでも晴基のことをこんな風に思つてくれてゐるのがわかつて、嬉しい気持ちになる。

「それはいいんだ。むしろそんな風に、ハルのことを思つてくれてありがと。」

有衣ちゃんの提案は、俺としては願つてもないことだけど、決めるのは会社を通してからにしよう

受け入れてくれそつたな雰囲気で、有衣はほつとした。

時刻はかなり遅くなつていたが、晴基がいるため直輝が有衣を送ることはできない。

直輝が電話でタクシーをマンションの下に呼び出すのを、有衣は断ろうとしたが直輝は聞かなかつた。

有衣はタクシーのお礼を言つて、玄関から出でていく。

「それじゃあ…おやすみなさい」

ドアが閉まる間際、“さよなら”の代りに有衣の口を衝いて出た挨拶。

その言葉が、直輝の中には温かい衝撃としてひびがつた。

誰かに、そう言つてもうつたのは…もづれくらうぶりかわからなかつた。

「…おやすみ」

ドアが閉まつた後の玄関に、有衣の耳には届かなかつた直輝の小さな声が響いた。

03（後書き）

視点がいろいろ変わるので、読みにくい方いらっしゃるかもしだせん。ごめんなさい。

ハルを軸に、だんだん直輝と有衣が無意識下で近づいてきました。やつぱり、さみしいときには、あたたかいぬくもりが一番効くのですよね。

ちなみに有衣が作ったから揚げにのつけたおろしダレは、大根おろしに、お酢と醤油とみりんと一味とネギが入ったものです。揚げものでもやつぱりいただけてお勧めです。

夏休みも終わり学校が始まると、一曰はものすゝめせしくなつた。朝から学校、終わると一度家に戻つて制服を脱ぎ、晴基を迎えて行つて、一緒にスーパーへ買い物に行く。そして夜まで西岡家で過ごし、遅い時間に家に戻つて、翌日もその繰り返し。

清香さんも心配するハードな生活だが、有衣は楽しんでいた。むしろのめりこんでいる、と言つてもいいほどだ。

学校のない土曜日でさえ、家にいられず午前中から会社でそわそわしだすという筋金入り。

土日だけ清香さんの会社でバイトをしている幼馴染みのみどりにも、それを見られてしまつた。

「あんまり深入りしないようこね」

そんなふうに釘を刺されるくらには、呆れられている。

有衣の提案と直輝のお願いに、清香さんはあつさりうなづいた。実は自分も昔有衣をひとりにしていたことを、かなり気にしてきたからだ。

有衣がそういう言ひのなら、とすぐ口承したのを受け、直輝は何度も頭を下げた。

直輝は料金も上乗せすると言つたが、有衣があまりに固辞するので清香さんがやんわりと断つた。

ただ、そのかわり、直輝は有衣に月曜日のまとめ買いをやめてほしいと注文した。

一番最初に会つた時の、重い荷物を両手からぶら下げるふうにしていた有衣を覚えていたからだ。

月曜日に一気に増える冷蔵庫の中身が、土曜日までじぶん消えていくのは不思議な楽しみがあつたが、

それでもあの重ねつた姿を考えると、ずっと気の毒で仕方がなかつた。

どうせ必要経費は直輝がすべて出すことになつていいのだから、とそれだけ頼んだのだ。

一回一回買つと割高になると思ったが、あの重さから解放されるのは素直にありがたい、と有衣も了承した。

そんなわけで、今日も晴基と一緒にお買い物だ。

「ゆいちゃん、きょうは、なにかう？」

「今日はねえ、かぼちゃが安売りなんだよ」

「かぼちゃ。ぼく、すき」

「ハルくん、チーズも好きだつたよね？」

「うん。のびるの」

「じゃ、今日はかぼちゃのグラタンにしよう」

手をつないで店の入口まで歩き、カートに晴基を載せて中へ入つた。晴基と一緒にマンションの近くのスーパーに買い物に行くようになつて早3週間。

自然と顔なじみになる店員も増えてくるわけ。

入つすぐの場所にある野菜コーナーへ行くと、よく顔を合わせる店員が近づいてくる。

晴基をかわいがつてくれて、よく晴基に声をかけてくれるのだ。

「いらっしゃい。今日の『はんは何かな』

「きょうは、かぼちゃのぐらたん！」

「そうかー。ママがお料理上手だといいねえ」

「うん！ なんでもつくれるの」

すっかり親子として認識されていて、有衣はいつもながら困惑を感じる。

いいのだろうか、と思いつつも、晴基が嬉しそうに受け答えするので、つい何も言えずにいた。

店員が晴基と話をしてくれている間に、有衣は特売のかぼちゃと、

ほうれんそうを手に取る。

カートに放り込むと、店員に挨拶してその場を離れた。

とりあえず、今日必要なものだけだ、とレジへ向かおひとすると、晴基が手をぽんと叩く。

「ゆいちゃん、おかし」

「あ、そっか。今日は土曜だもんね」

嬉しそうにする晴基をかわいいと思いながら、お菓子のパートナーにカートを進める。

保育園のお友達から、買い物に行くたびに一つだけ好きなものを買つてもらえる、という話を聞いたらしい。

お願いされた有衣は、毎日はよくないかなと思い、用木土と間を開けながら買ってあげることにしたのだ。

といつても、晴基はいつも100円もしないものばかりを選ぶ。また遠慮しているのかと思い聞いてみたが、そうではないといふ。どうやら“母親に買つてもらえる”といふ気分を味わえればそれでいいらしい。

つまり、スーパーにいるときは、晴基が有衣に“ママになつてほしいとき”なのだ。

だから有衣はいつでも、内心の疑惑を晴基の前ではひた隠しにして買い物をした。

戸惑いの理由には別の面もある。

直輝が会社から帰った後、清香さんは意味ありげに有衣を見た。

「有衣もそんな年頃かあ」

「…どんな年頃よ」

意味わかんないんですけど、と小さな声で付け足す。

「え？ わかんないならしいわよ」

軽く清香さんは言つたが、本当は有衣にも少しほわかっていた。西岡家の仕事が楽しいのは、純粋に晴基だけを気にかけているからではないのだ。

それに加えて、夜の遅い時間帯に、直輝と過ごす時間がある。

直輝が帰ってきてから食事の用意をし、直輝が食べるのを見ながら他愛もない話をする。

その時間は、あたたかく、有衣の心にすりつゝと入り込んでくる。そんな状態で、外で晴基の“ママ”を演じるのは、自分にとってよいこととは思えなかつた。みどりに言われたことと、ほぼ大差ないことを清香さんにも言われていた。

「ああいう人は、難しいところあるから。気をつけなさいね」けれど、気をつけていてもしなくとも、結局心の動きには既に抗えなくなつていてる気がした。

いつかカンチガイな行動に走つてしまいそうで、今の有衣は戸惑いと同時に少しの恐怖を抱えている。

物思いにふけりながら晴基の体の水滴をぬぐつていると、晴基がバスタオルから逃げ出した。

「あっ、こり！ ハルくん！！」

追いかけると、きやーきやー言いながら晴基が走つて逃げる。

お風呂に入れてあげた後、晴基と追いかけっこになるのはいつものことだ。

拭き終わらないうちに逃げるせいで、床にはまばたぼたと落ちた雪で道しるべができる。

ソファの上に行こうとした晴基を、寸でのところで抱きとめた。

「濡れたままソファはダメ！ これ皮なんだから

「かわってなに？」

「水に濡れちゃいけないもの。もうダメだよ、ハルくん。ちゃんと拭いて服着なきゃ

「はーい」

捕まればおとなしくなり、それからは逃げようとはしない。

晴基にとっておそらくゲームの一種なのだが、有衣はほとほと困つ

ていた。

「床の濡れたところ、ハルくんが拭くんだよー」

「わかったー」

でも素直に言つことを聞く晴基には、思わず笑顔が浮かぶ。ちよつとのわがままくらい、許してあげやつ氣になるのだから、晴基の威力は大きい。

今田は園で遊び疲れていたのか、いつもより早く眠氣が襲っていたようだった。

ベッドに入つて、晴基の手を握つてあげるとすぐに晴基が眠ったのを見て、有衣は満足げに息をついた。

かわいくて、あたたかくて、いとしい存在だ。

寝顔を見てなごんでいると、聞きなれた電子音とドアの開閉音が聞こえた。

晴基から手を離し、起きないことを確認してから、有衣は直輝を迎えて行った。

「おかえりなさい」

有衣の姿を認めた直輝は、やさしい笑みをこぼした。

「…ただいま。ハルはもう寝ちゃつた？」

「はい。なんだか、遊び疲れちゃつてたみたいですね」

「そつか」

土曜日は、直輝の帰りが少しだけ早い。

だからいつもなら、晴基も有衣と一緒に直輝を出迎えるのだ。

直輝の少しだけ残念そうな顔を見て、有衣の心は痛んだ。

それをごまかすように、お風呂を促した。

ちょうどビグラタンが焼きあがつたところ、直輝がバスルームから戻ってきた。

その濡れた髪から雫が時折ぽたぽたと垂れているのが見えて、有衣はこつそり笑つた。

晴基と同じだ、父子ってこんなところまで似るのか、と思つたのだ。
そんなことを思われているとは露知らず、直輝はキッチンに入り、
冷蔵庫からビールを取りだす。

すると、冷蔵庫の中にジョッキが冷やされているのを見つけて、直輝は驚いた。

「…これ、有衣ちゃんが？」

「あ、今日は土曜日だから…飲むかなと、思つて」

直輝の驚いたような顔が目に入り、有衣はなんとなく「んぱゅい」気分になつた。

一緒に過ごしたこれまでで、土曜だけは直輝がビールを飲むことに気づいて、今日は準備してみたのだ。

気づいてもらえたことが、嬉しかつた。

「お料理、運びますね」

なんだか恥ずかしさに居たたまれない気持ちになり、有衣は直輝のそばをすり抜けていく。

「どこかふわふわした心地で、直輝はテーブルに着いた。
冷蔵庫の中のジョッキを目にした時に感じた何かが、まだじわじわと直輝の中に息づいていた。

そこに、「どこかへ行つたと思つた有衣が、タオルを手にして戻つてくる。

「あの、髪まだ濡れています…」

タオルを差し出されて、直輝は自分の顔に熱が上るのがわかつた。
週に一度、日曜日にだけお風呂に一緒にに入る晴基のことを思い出した。

晴基も自分も、大してきちんと拭きもせずに歩きまわつている。
晴基を毎日のようにお風呂に入れている有衣には、さつと似ている
と思われた、と思うと恥ずかしかつた。
タオルを掴むと、お互いの指先が一瞬触れた。

直輝は内心ぎくしとし、有衣も内心ぎょつとしたが、ふたりとも表

には出さない。

ぎこちなく手が離れて、直輝はタオルで頭を覆つた。

触れ合つた指先が、熱かつた。

04（後書き）

これぞ、“疑似家族”な感じになつてきました。
直輝よりも一足先に、有衣の中では恋愛感情が育つてきてる模様です。

ちなみに直輝はまだ無自覚。
しかもそのうえ臆病と鈍感のダブルパンチ＾＾；
どうなることやら、です。

さて、今回のかぼちゃグラタン。

普通のホワイトソースに、味噌をちょびっと入れるのがコツです。
具はかぼちゃと玉ねぎと彩りのためにほつれん草。
チーズはたっぷりめで、ぱっちりです。

晴基を迎えて行くと、今日は笑顔が一倍だった。
武先生に手をつながれて、小走りに近づいてくる。

「こんにちは」

「ゆいちゃん！」

武先生と晴基の声がかぶり、有衣は笑って挨拶を返した。
ちなみに武先生とは、例の、女の子に名前を聞いたら云々を晴基に
教えた、あの“たけせんせい”だ。

最初会つた時はかなり若く見えて驚いたが、逆にこの若さならあの
レクチャーもあり得る、と有衣は思った。

晴基は、左手を武先生とつなぎ、右手に何か紙を持っている。
先生と挨拶を交わし、晴基を引き受けると、晴基は有衣に右手の紙
を差し出してきた。

「はい、ゆいちゃん。あのね、おつかのひとにみせてね、つていわ
れたの」「

「ありがとうね」

おつかの人は、厳密には直輝のことなのだが、まあいか、と有衣
は受け取る。

それは運動会のお知らせだった。そういうえば、そんな時期か。
歩きながらお知らせをめぐると、晴基の組のお遊戯の部についても
書かれている。

「ゆいちゃんもくるでしょ？」

「うーん…パパに聞いてみないとね」

きっと、一生懸命でかわいいんだろうなあ、と見に行きたく思つた
が、勝手に返事をするわけにはいかない。

今日は金曜日で、直輝の帰りはいつもと変わらず遅い。

晴基が寝た後では言ひ出しこへこし、明日まで待とう、と有衣は算
段した。

相変わらず、夜の時間はあたたかい。

晴基の世話ををして、晴基が眠るときにはベッドのそばで座っている。手に触れる晴基の体温は、有衣よりも少し高く、心地よい温かさだ。その穏やかな時間は、直輝が帰つてくるまで続く。

直輝が帰ると、今度は直輝がお風呂に入つている間に食事を用意し、一緒にテーブルに着く。

晴基の話をするときもあれば、直輝の病院の話をすることがあった。そうして、晴基と過ごすのとは少し違つ、べつの穏やかな時間が流れれる。

今日の直輝は、テーブルの上にあつた運動会のお知らせを見ている。

「土曜日なんですね。お休み取れそうですか？」

「ああ、なんとかするよ」

「お遊戯とか、きつとかわいいですよね。楽しみですねえ」
想像してみて笑顔で話す有衣を見ていると、直輝は思わず言つてしまつた。

「よかつたら、有衣ちゃんも行く?」

「え?」

驚いた有衣の顔を見て、直輝ははつと我に返つた。

こうして一緒に時間を過ごしていくと、つい忘れてしまうのだ。
有衣は、お金を払つて家に来てもらつて、単なるハウスキーパーなのだとこうことを。

「あ、いや、「ごめん…。俺が休みの日まで来てられないよね」
言い出しつぶかつたことを直輝から言つてもうえて驚いただけだった有衣は、慌ててしまった。

「ち、違います! 行きたいなあつて思つてたところに誘つていた
だいて驚いたんです。」

ハルくんも来てつて言つてくれたんですけど、直輝さんの考え方次第だと思ってたので、あの…嬉しいです」「

凄い勢いで直輝の言葉を否定し、最後に遠慮がちに嬉しいと言つた。有衣を、直輝は素直にかわいいと思った。

決して変な意味ではない、と思つたが、それでも胸が軽く締め付けられたような妙な痛みを感じていた。

「ありがとう。じゃあ、一緒に行つてくれるかな」

「はい」

笑顔で返事をした有衣を見ながら、直輝は自分の胸の痛みに内心首を傾げた。

有衣が運動会に行けると聞いて、晴基の機嫌は底抜けによかつた。ずっとうきつきして、お風呂に入るにも食事を取らせるにも、落ち着かせるのが大変なほどだつた。

直輝が帰つたら、有衣の運動会行きを確かめるのだと、ずっと玄関を気にしていたが、

テンションが高すぎて体は疲れいたらしく、満腹になるとうつらうつらしだしてしまつた。

「ハルくん、ベッド行く?」

「いかない。パパ、かえつてくるの、まつてる」

言いながらも、夢と現実の世界を行つたり来たりの晴基に、有衣は苦笑した。

「じゃあ、ソファでひと眠りしようか。パパが帰つてきたら起こしてあげるから」

「うん。やくそくな。おこしてね」

「約束」

有衣が約束すると、ようやく何も言わずに目を閉じた。

脱力してかなり重く感じる晴基を抱きかかえて、有衣はソファへ移動して自分も座つて晴基を横にならせる。

落ち着かない晴基の世話には、有衣も少し疲れを感じていた。

どうせ後片付けも部屋の掃除も一通り終わっている。

直輝が帰つてくるまで自分も休ませてもらおう、と有衣も目を瞑つ

た。

水の音が聞こえた気がして、有衣ははっと目を覚ました。聞こえていたのは、シャワーの水音と、窓に吹き付ける雨の音だつたようだ。

「雨降つてゐるんだ…。あ、っていうか、また…！」
シャワーの音が聞こえるところには、直輝が帰ってきていたことうことだ。

晴基と一緒になつてまたしても眠つてしまつて気づかなかつた、といつことに有衣は慌てた。

晴基を起こさないようになるとソファから立ち上がり、急いで直輝の夕食の支度にとりかかる。

フライパンを火にかけていると、晴基が起きてきてキッチンの入口に立つた。

「ゆいちゃん」

「あ、起きた？ パパお風呂入つてるから、もづじし待つてよしづね」

「うん」

返事をしながら、晴基は有衣の近くに寄つてきて、そばにある椅子に座る。

本当は危ないからキッチンには入らせたくないが、離れているのが寂しいらしく、仕方なくそのままにしている。

「あれ？ ぼくがたべたのと、ちがうの？ あかいね！」

「そうだねえ。パパの分は辛いのが入つてるんだよ」

こんな風に有衣が料理をするのを、不思議そうに面白がり見ている晴基が、かわいくもあつた。

バスルームのドアが開く音に、晴基は飛び上がるように反応した。

「パパ！」

「お、起きたかあ？ ただいま」

「おかげり」

「おかえりなさい。すみません、また…」

「ははっ、いいよいよ」

笑いながら、直輝は冷蔵庫を開け、ビールと有衣の冷やしたジヨックを取り出す。

当然のように冷やされたジヨックと、当然のように取り出す動作が、直輝にも有衣にも温かいものを感じさせた。

有衣は直輝の濡れた髪を思わず盗み見るが、今日も零れる雫はなかった。

前にタオルを渡した時以来、直輝はよく拭いて出でてくるよいつになつた。

それを少し残念に思つたりしてしまつこと、有衣は少なからず苦いものを感じた。

直輝が帰つて、晴基のハイテンションぶりは復活していた。
運動会のお知らせを持つてきて、食事をする直輝に纏わりついている。

嬉しそうな晴基に、直輝も有衣も目を細めていたが、晴基の話はだんだんよくない方向へ行き始めていた。

「ゆいちゃん、あのね

「なあ」「

「みんなね、ママがあべんとつくるんだって

有衣は、この晴基の言葉にぎくじとした。

スーパーで買い物の時に好きなものを買つてもうつ、といつ話をしたときと同じ語り口だつたからだ。

あのとき晴基は有衣に、だからママになつて、と言つたのだ。

直輝の前ではまずい、と慌てて晴基の名前を呼ぼうとしたが、間に合わなかつた。

「だからね。ゆいちゃん、ママになつて。それで、おべんとつくるて?」

有衣は、ひゅつ、と息を吸い込んだ。

直後、直輝がテーブルに箸を置く、無機質な音が響いた。

しん、と静まり返ったとき、晴基ははつとなつた。

ママになる話は直輝の前では内緒だ、と約束したのを思い出したのだ。

凍りついた有衣の表情を見て、晴基は急に不安になつて、有衣のスカートをぎゅっと握りしめた。

「どういう意味だ？」

聞いたことのないような、直輝の低く硬い声に、晴基はびくんと体を揺らした。

有衣も、晴基と一緒にになつてびくんとしたが、晴基がかわいそうで、スカートを握る手をそつと握つてあげる。

「ハル、どういう意味だ、今の」

晴基は、恐ろしくなつてしまい、何も言えなかつた。

晴基と有衣の手をちらりと見て、直輝は今度は有衣に向き直る。

「君の様子だと、ハルがこうこうことを言つるのは、初めてじゃないんだね」「…何を？」

君、と言われたところに、他人行儀な雰囲気を感じて、有衣は心まで凍りそうになつた。

けれど、すっかり怯えてしまつている晴基を矢面に立たすまいとして、有衣は事実を少しづか伝えなかつた。

「わ、私が言つたんです」

「…何を？」

「ハルくんの、ママになつてあげる、つて…」

言つた途端、直輝は派手な音を立てて椅子から立ち上がつた。

晴基は、おひおろと目をさまよわせながら、ますます強く有衣のスカートを握りしめる。

直輝は有衣の目の前に立ち、晴基の手から乱暴に有衣の手を剥がし、晴基の手を有衣のスカートから外した。

その態度に、有衣は目のが暗くなつていいくのを感じた。

「君は自分が一体何を言ったのか、わかつてたのか？」

ハルの母親だつて？ ハルの母親はひとりしかいないし、誰も代わりになんかなれないんだ。

君がそんなことを考えてハルに接していたのかと思つと、怖くなつたよ。

悪いが、帰つてくれないか。今後のことば、会社を通して相談させてもらひことにする

一気に突き刺さつてきた言葉は、圧し掛かるような重さを伴つていた。

有衣は俯いて、涙をこらえるだけで必死だつた。

「すみませんでした」

やつとのことでそれだけ口に出すと、立ちあがつてお辞儀し、鞄を掴んで玄関へ足早に向かつ。

「ゆ、ゆいちゃん！ ゆいちゃん！！」

悲鳴に近い声が何度も有衣を呼んだが、直輝が抑えつけていたため、晴基は追いかけられない。

靴をはく頃には、有衣はすでに涙をこらえてはいられなかつた。

玄関に、ぼたぼたと、零れた涙が染みを作る。

心の中で晴基に謝りながら、ドアを閉めると、晴基の呼ぶ声も聞こえなくなつた。

05（後書き）

ちょっと波が立つて、直輝と有衣の間に溝ができてしまいました。
といふか、直輝が勝手にキレちゃったんですけど…。

これだから、無自覚と臆病と鈍感のトリニティ男はへへ；

さて、今回お料理名は出しませんでしたが、チヂミでした。
ハル用には普通ので、直輝用にはキムチを入れて辛めに。
有衣は土曜日はビールに合うものを基本に作ってるんです。
なのに直輝はちっとも気づかず、こんな風にキレてしまつて…びつ
しうもないですね。

ドアが閉まつた瞬間、張りつめていた気持ちが途切れた。直輝は半ば茫然となり、晴基を抑えつけていた手から力を抜く。その途端、晴基は玄関へ走り出しが、有衣はもう行つてしまつたのだ。

「ぎやああん！…」

部屋に響いたのは、およそ晴基のものとは思えない、今までに聞いたことのないような泣き声だった。

泣き声よりも、叫び声に近い。

その声に現実に引き戻された直輝は、晴基を連れ戻しに玄関に行つた。

「ハル」

晴基はドアに向かつて立つて、泣いていた。

名前を呼ぶと、ひくり、と肩が揺れる。

晴基を抱き上げようとしゃがみこむと、下がつた視線が玄関の床を捉えた。

点々とついた黒い染みが、何かを悟つた時、直輝の心臓は揺られたような痛みを感じた。

その痛みがあまりにも強かつたので、直輝は思わず自分の左胸を押さえ込んでしまつたほどだ。

けれど、自分が言ったことは間違つてはいない、と直輝は思い直す。痛みを忘れようと、頑なに頭を振る。

「ハル、戻ろ!」

さきほどまでの、怯えた晴基を思い出した直輝は、意識して優しい声を出そうとした。

晴基は涙に濡れた目で、だが強く直輝を睨みつける。

「きりー」

その小さな口から発せられた言葉に、直輝は一瞬固まつた。

今まで、一度も聞いたことのない言葉だつた。

「ぼくが、パパ…。ゆいちゃんは…」

泣きながら話す晴基の言葉に、要領を得ない直輝は溜息をつく。落ち着いてからまた話を聞こうと直輝は抵抗する晴基を抱え込んで、リビングへ連れ戻した。

夜遅くにチャイムが鳴り、ドアを開けたみどりは驚いた。

頭のてっぺんから靴まで、ずぶ濡れになつた有衣が立っていたのだ。

「今日、泊めて」

「いいけど…」

みどりは慌てて有衣を中に引き入れ、バスタオルを渡す。濡れていたのは外見だけではない、赤い目に盛りあがる水を見て、みどりは内心溜息をついた。

「清香さんに連絡した？」

「携帯、置いてきちゃつた…」

今日はハウスキー家の仕事の日だったはずだ、今の有衣に、ビックリ、とは聞けなかつた。

「連絡しとくから、とりあえずお風呂入りなよ」

「ありがと」

しばらくしてお風呂場から聞こえてきた、有衣のすすり泣く声に、みどりは今度こそ溜息をもらす。

何かある度に、以前から有衣はみどりの家に泊まりに来ていた。

清香さんに心配をかけたくないのだ。

心配そうに顔を出した両親に、大丈夫だと伝えてから、みどりは清香さんに電話をした。

何かあつたらしくことに清香さんも気づき、溜息をついたのが感じられたが、ひとまず外泊の承諾を得る。

父親が早くに亡くなつたせいか、有衣が年上の男性に憧れることが多いのは、みどりも知っていた。

けれど、子供までいる人を本氣で好きになるとは、みじんも思つていなかつたのだ。

泣きながら雨に濡れて帰ってきた有衣のことを思つて、みじんは言いつのない気持ちになつた。

温かいお湯につかりながら、有衣は止め処なく落ちる涙に、途方に暮れていた。

直輝が捲し立てた言葉が、もうずつと何度も頭の中で繰り返されてゐる。

有衣は、直輝の言い分が正しかることを知つていた。

確かに自分は、“母親”にならうとしていたことなどを、認めている。

晴基に頼まれて、晴基を気遣つて、そなうとしていた面は確かにある。

けれど、晴基だけを思つてやっていたのでないこと、今日より前に既に気づいていた。

それはつまり、晴基の本当の母親に代るものになりたいと思つていた、ということだ。

晴基にとつてだけでなく、直輝にとつてのそれにも、なりたいと思っていたのだ。

だからこそ、直輝の言葉が、こんなにも痛いのだ。

まるで無数の剣で突き刺されたかのように、有衣の心は夥しい血を流している。

それが、涙になつて流れているような気がした。

今の有衣は、それをどめるすべを知らない。

ようやく涙が止まつてきたら、浴槽のお湯は、ビリかぬく感じられた。

お風呂から出てみじんの部屋に行くと、心配そうな顔が有衣へ向けられる。

「「」めんね

「…いいから

軽く溜息をつきながら、みどりは有衣をドレッサーの前に座らせる。そしてドライヤを取り出し、有衣の髪にかけてやった。

有衣は気持ちよさそうにみどりにまかせていたが、そのうちまた新たな涙が盛り上がる。

「深入りするな、つて言われてたのにね」

ドライヤの風の音で、有衣の声はみどりにはっきりとは聞こえない。だが唇の動きは、ばかだよね、と言つたように見えた。

有衣の気持ちを想つて、みどりの胸は痛んだ。

直輝は、リビングでひとりソファに背を預けて、遅々として進まい時計の針を眺めていた。

その後ろの窓に、雨が叩きつける音が聞こえている。

直輝が帰ってきたときに既に降り始めていた雨は、有衣が出て行つた頃にはひどくなつていただけだった。

いつも直輝が呼ぶタクシーも、今日はないし、有衣は傘も持つていなかつた。

帰る頃には、全身がずぶ濡れになつてしまつたに違いない。

晴基はとうに泣き疲れて眠つたが、直輝はとても眠る気にはなれないでいる。

テーブルの上には、有衣が作つた料理が冷めた食べかけのまま載つていた。

有衣が冷やしたジョッキに入つたビールも、半分以上残つたままだ。きつと気が抜けて、ぬるくなつているだろつ。

それを横目で見ながら、直輝は自分の言動を思い返した。

なぜ、あんな言い方をしてしまつたのだろつ。

腹が立つたから？ だが、自分は何にそんなに腹が立つたのか。

唯の代りに晴基の母親になると書いたことが、だろうか。

そう考えたところで、直輝は思わず呻くような声を漏らした。

唯の代りにだつて？ 有衣は、そんなことは一言も言わなかつた。

有衣はただ、晴基の母親代わりになる、と言つただけだつた。

つまり、有衣を唯の代りにするといふのは、自分が考えていたことなのだ。

自分が無意識に思つていたことを言われて、図星を指されたような気がなつて、怒りを感じたのだ。

直輝は、思い当たつたその理由に、心臓が押しつぶされたような衝撃を受けた。

「…ばかな」

口を衝いて出た言葉が、空々しく聞こえて、直輝は頭を抱えた。

あのとき、直輝は有衣の手を晴基から乱暴に引き剥がし、怒りをそのまま言葉でぶつけた。

それを思い出すと、そのときの有衣の表情の記憶がありありと浮かんだ。

目を瞑つた後、すぐに俯いてしまつた有衣は、口を固く引き結んでいたのだ。

多分、涙をこらえていたのだ、と今ならわかる。

玄関にできた染みは、こらえきれないで落ちたものたちなのだ。

それを見たときに感じた胸の痛みが、また直輝を襲う。

自分にしてしまつたことの大きさに打ちのめされて、直輝は重たい溜息を吐きだした。

髪を乾かし終えて、有衣とみどりはベッドに入った。

みどりのベッドは大きい。

それは、みどりの快適さのためといつよりも、時折こうじて有衣が泊りに来た時のためにだつた。

だからみどりのベッドは、小さなころからかなり大きなものだつた。そのベッドに、ふたりで並んで横になる。

そしてみどりは、いつも有衣が話し出すのを辛抱強く待つのだ。

しばらく経つてから有衣は、ぽつりぽつり、と話し始める。

始めから、直輝のことが気になっていたこと。

晴基がとてもかわいかったこと。

晴基のさみしさを、自分はよくわかつてあげられると思つたこと。晴基が交換条件のよう、パパやママになることを無邪気に約束してくれたとき、嬉しかったこと。

戸惑いながらも、晴基の“母親”を演じるのは楽しかったこと。晴基と直輝と過ごした夜の時間帯は、あたたかかったこと。いつの間にか、本当に代りになりたいと思つていたこと。けれど、直輝に言われた言葉。

「私って、バカだよね。ムリに決まってるのに……」

話しながらまた泣いてしまつた有衣は、ひしゃげた顔になりながらも、なんとか笑おうとした。

みどりは、何も言葉を見出せず、ただそつと有衣を抱きしめてやつた。

隣でよつやく眠りについた有衣を確認して、みどりはそつとベッドから下りた。

部屋を抜け出し、下の階のリビングルームまで行くと、みどりは携帯を取り出す。

既に日付は変わり、深夜といつていい時間帯だったが、みどりは頬着しなかつた。

有衣の姿に胸を痛めると同時に、清香さんの事務所で一度見たことのある相手の男に怒りを感じていたのだ。

有衣をあれほど傷つけておいて、まともな神経の人間なら、すぐに眠れるはずはない、とも思つていた。

もっとも、眠つているとしても、起こしてやるとは思つていたが。みどりは、出ないだらうとは思つつつ、有衣の携帯をホールした。

突然、けたたましい音がすぐ傍で鳴り響き、直輝は驚いてその音源を凝視した。

直輝の座るソファの隅に、何度も田にしたことのある有衣の携帯が置きっぱなしになっていた。

有衣のその忘れものに、今初めて気づいた。

有衣は、取りに来るだらうか。

僅かに期待を抱いている自分自身を自嘲しつつ、きっと有衣は来ないだろう、とも予想した。

逡巡している間に、呼び出し音は途切れ。だが、間をおかずになにか鳴り出す。

勝手に出るわけにはいかないが、いつまでも鳴るままにしておくわけにもいかない。

直輝は、そつと携帯を手の中に引き入れると、電源を落とした。単なる機械にすぎないのに、直輝は無意識に、それに有衣のぬくもりを探していた。

同時進行ぼく、ちゃんと書きたかったのですが。
場面の変遷がちゃんと伝わってるでしょうか…。
なんか、微妙な感じになってしましました…。

とりあえず、直輝は自覚しました。

でも、その自覚をどう生かせるかな…みたいな^ ^；

そんな感じで、溝が埋まるのはもう少し先のよつたな気がしますね。

そして、今回ほぼ新キャラ。

幼馴染みのみどりの参戦です。いつでも有衣の強い味方です。
でも、いぐり怒ってても夜中に悪戯電話は、ほんとはダメですよ~

部屋がだんだん明るくなり、窓から差し込んできた朝日で、直輝は顔を顰める。

結局一睡もできないまま、日曜の朝を迎えることになってしまった。その後、ベッドに入つたことは入つたのだが、眠れるはずもない。手放すことのできなかつた、電源を落とした有衣の携帯が枕元にある。

夜の間中、ずっとそれを眺めていた。

それが、無かつたことにしたいという思いを絶対的に否定し、昨日の出来事の証拠として主張していた。

直輝は、気が進まないまま、それでも日常を送りつとした。まだ眠る晴基をそのままに、キッチンへ向かい簡単な朝食を作る。これまで日曜はいつもそつしてきたが、今日はこつもよつもせりひこ部屋の中がひつそりと静まっている。

テーブルの上に皿を置いた音が、やけに響くような気がして、直輝の気分はさらに落ち込んだ。

時計の針は7時を回つたところだ。

いつもなら晴基はとうに起き上がりつている頃である。

ベッドルームに戻ると、晴基はまだ起きぼどの姿勢のまま横になつていた。

起こそうかどうか迷いつつ顔を覗きこむと、不自然なぼどにじぎゅつと目を瞑つている。

よく見ると、全身に力が入つてゐるのか、手足もぎゅつと丸くなつていた。

寝たふりだ、と直輝にもわかつたが、どうしていいかわからない。

咄嗟に、こんなときに有衣がいたら、と思つたが、それが望めない

ことは直輝自身よくわかっている。

しかも、晴基がこんなことをしているのは、昨日の出来事のせいだと簡単に推測でき、溜息が出る。

どうにかしなくては、と思つたが、出て来たのは月並みの言葉だけだった。

「ハル、ごはんできただぞ」

晴基は寝たふりがばれないとわかると、無駄な努力をやめた。

すぐに起き上がつたので、直輝は安堵したが、その安堵は次の瞬間裏切られた。

「ぼく、ごはんたべない」

食欲がないのか、と心配したが、そうではないらしい。

ベッドから下りた晴基は、キツチンへ走り、お菓子の入った缶を手にまた戻ってきた。

その缶は、有衣との買物の際に買ったものの、ほとんど食べられることなく残っていたお菓子が入っている。

ハンストだ。

これは晴基の考えた、精いっぱいの直輝に対する反抗なのだ。

直輝はそれに気づき、またしても気分が降下していくのを感じた。

解決策のわからないまま晴基と一緒にいるのが苦痛にさえ思え、直輝は一旦書斎に避難した。

書斎にあるのは、医学書だらけの本棚と、大きめのデスクとPCだけだ。

誰も入つてこない空間で、直輝はようやく自分を取り戻せると思ったが、それは思い違いだった。

デスクの上には、以前唯と取つた写真の入つた写真立てが飾られている。

それが目に入った途端、直輝は内側から自分でもわからない何かが沸き上がるのを感じた。

笑顔で写っているはずの唯の目が、自分を責めているように感じる。

唯から心を移したことも、有衣にした仕打ちのことも、直輝にひどい罪悪感を感じさせた。

直輝は痛む顎頭を押さえ、思わず写真立てを伏せてしまった。

そんなことをしたのは初めてだったが、今のこの姿を、誰にも、特に誰には見られたくないと思つたのだ。

お皿を過ぎた頃、部屋の外で物音がしたのに気づき、直輝は書斎を出た。

精いっぱいの反抗に力尽きたらしい晴基が、テーブルに着いて置き放しだった冷めた朝食を口にしていた。

書斎から出てきた直輝を見て、晴基は一瞬迷つたが、空腹に負けてそのまま食べる。

缶の中に入っていたのが、腹の足しにならない小さなラムネやキャンディばかりだったからだらう。

直輝は、少しだけ胸の中に温かいものが広がったのがわかつた。

昨日晴基が泣きながら訴えていたことが何だったのか、よひやく聞いてあげられる。

食べ終わるのを待つて、直輝は晴基の言葉を促した。

「ゆいちゃんは、わるくないの。ぼくが、ゆったの。

ぼくが、ゆいちゃんのパパになつてあげるから、ゆいちゃんは、ぼくのママになつてね、つて」

「有衣ちゃんのパパ?」

「うん。ゆいちゃんはね、パパがしゃしんだけなの。

ぼくは、パパがいるのに、ゆいちゃんはいなくてかわいそう、つてゆつたら、やせしといつてゆつてくれて。

やせしかつたら、ゆいちゃんがうれしいつていうから、だから、ぼくがパパになつてあげることにしたの」

「それでハルが、代わりにママになつてほしこつて、お願いしたのか?」

「そうなの。でも、ぼく、やくそくもらなかつたの」「約束?」

「ほんとうはね、パパにはないしょだつたの」

「内緒…」

「ゆいちゃんは、さいしょは、うん、つてゆつてくれなくてね。ぼくが、いっぱいお願ひしたの。

そしたら、パパがかなしくなるから、パパにはないしょだつて、ゆいちゃんがゆつたの。

ないしょにしてたら、ぼくがおねがいしたら、ママになつてくれつて、ゆつたの」

直輝は、一生懸命話す晴基の言葉を、自分で組み立て直した。

つまり、「うつ」とだ。

まず、有衣には父親がない。

晴基は（意味はわかつていらないだるうが）自分が父親になるから、代わりに母親になつてほしいとお願ひした。

有衣は、直輝の気持ちを考えて、最初は断りうとした。

だが晴基があまりに強く言うので、有衣は直輝には知られないように、晴基のために願いを聞き入れた。

「そう、だつたのか…」

新たに知つた事実は、直輝を余計に落ち込ませるものだつた。有衣が事実を一部しか告げておらず、そして有衣の行動が晴基と直輝双方のためだつたとようやく気づいた。

自分が有衣に投げつけた言葉がいかに理不尽なものだつたか、思い到り直輝は項垂れる。

「パパ、かなしかつたの?」

「え…?」

直輝は、そうではない、と心の中で否定した。

有衣の言動によって、自分の内面が暴かれるのを恐れたのだ。それを覆い隠すために、怒りが先立ちひどい言葉をぶつけた。

「ゆいちゃん、パパがかなしくなるってゆつてた。だから、ゆいちゃんのことおこつたの？」

ぼくが、やくそくまもらなかつたから。ぼくが、いけなかつたの？だからパパがおこつて、ゆ、ゆいちゃんは、いなく、なつちやつたの？ もう、こないの？」

直輝に對して感じていた怒りは、一転して自分を責める感情になつてしまつたらしい。

自分が約束を守らなかつたために、直輝が有衣を怒り、有衣がいなくなつてしまつたのだ、と思つてゐる。

直輝は、自分の言動が有衣も晴基も傷つけたのだと、今更ながら再び思い知つた。

「…ハル、ごめんな」

涙を溢しながら、不安げに自分を見上げる晴基を、直輝はそつと抱きしめる。

そのぬくもりに、直輝は勇氣を『えてもらつた気がした。

「パパが悪かつたんだ。ハルのせいじゃない」

「…ほんと？」

「ああ。ほんとこ、『ごめんな。…許してくれるか？』

「うん。ゆいちゃんにも、あやまる？」

晴基の問ひは、無垢なだけに直輝の心に刺さり、なけなしの勇気が萎みかかる。

直輝はどうにか、そうだな、とだけ言つたために声を絞り出した。

晴基を寝かしつけた後、直輝は疲れた体をベッドに横たえた。

今日一日で、まるで一週間分の疲労が蓄積されたよつた気分だった。枕元に置いてある有衣の携帯を、改めて見つめる。

どうしたら、有衣に会つて、謝ることができるだろうか。

有衣とは、この部屋でのみの関わりしか持つていなかつたため、あの繫がりは会社だけである。

いざにしる明日まで待つしかないといつことだが、それはもう仕

方のないことだ。

2日続けて完徹するわけにもいかず、直輝は考ふることを諦め、無理矢理意識を沈めこませた。

朝一番に、電話をかけよつと思つていた直輝だが、電話は逆に西岡家へかかつてきたり。

それはもちろん有衣からではなく、しかしどうわけか社長から直接かかつてきた。

「担当の川名なんですが、少しの間お休みをいただきたいと思いまして」

直輝は、原因がわかつてゐるだけに、頷くしかなかつた。

しかし“少しの間”がどれほどの期間なのか、あるいはこのまま来なくなつてしまふのかと、不安が襲つ。

「それで、代わりの者についてなんですけれども」

「いえ、代わりの方は結構です」

咄嗟に、そう答えていた。現実的に考えれば、この答えはあり得ない。

直輝自身驚いたのと同様、電話の向こうつでも驚いたような空気が流れるのがわかつた。

「ですが、……お困りになるのでは？」

言葉を選んだ、とわかるような聞だつた。

もしかして、有衣は事情を話したのではないか、と直輝は思つた。
しかしそれならそれでいい、こちらの想いがわかるように、答えるばいいだけだ。

「そうですね。ですが、今後も是非、ゆ…いえ、川名さんにお願いできれば、と思つてゐるんです」

「…そうですか。では、…もう一度、川名へ確認いたしまして、またお電話させていただきます」

躊躇いがちな返答の後、電話は切れた。

狡いやり方だとは、思った。

それでも、このまま代りの誰かを宛がわされて有衣と会えないままになるのは、どうしても避けたい。

有衣を待つて、もしも来なければ、携帯を持って会いに行けばよいのだ。

直輝はそう思い、ようやく自分を取り戻せそうな気がしていた。しかし、その顔色を見れば、本人がそう思うほど成功しているとは言い難かった。

07（後書き）

“直輝際限なく落ち込む”の巻でした。

最後、ちょっと強気な発想をした直輝ですが、実は内心びくびくしているのです^ ^；

だって、有衣が戻るとは、限りませんもんね。

そして電話の社長がまさか有衣のママンだとは、思いもしない直輝なのでした。

日曜の夜遅く帰ってきた娘の姿を見たとき、選択を誤つたと清香は後悔した。

有衣が恋をしたと気づいた時に、あるいは最初から、有衣を西岡家に行かせるべきではなかつた。

配偶者と離別ではなく死別した人間に恋慕する危険は、清香が一番理解しいる。

清香自身夫と死別し、自分にある種の頑なさがあるとわかっているからだ。

有衣が恋をした相手 西岡 直輝が、ある意味清香と同じ種類の人間だらうということは、想像に難くない。

有衣は詳細を語ろうとはしなかつたが、大方の予想はついた。かわいそうに思つたが、直輝とはビジネスとしての関わりがあり、清香は感情のバランス取ろうと奮闘した。

複雑な気持ちで電話をかけたが、直輝は有衣の継続を希望した。帰るなり、もう西岡家には行けないと思つ、と言つた有衣を思い浮かべ、清香は溜息をついた。

どうやら娘は、少々厄介な男に落ちてしまつたようだ、と。しかし一方では、娘に揺さぶられているらしい直輝に、同情めいた気持ちが湧かないでもなかつた。

失つた存在から心をほかへ移すことも、それを自分で認めることも、かなりのエネルギーが必要なのだ。

「若いつて、いいわねえ……」

年寄りと言うにはまだ早すぎる清香だが、自分にはそんなエネルギーはもう無いわ、とひとつづいた。

継続を希望された、と聞いて有衣は戸惑つた。

今もまだ、最後別れ際に言われた直輝の言葉が、耳元でわんわんと

鳴り響いているのだ。

それなのに、直輝は自分がいいと言つたといつ。

直輝がどういうつもりでそんな要望を出したのか、有衣には全くわけがわからない。

また行つてもいいのだ、といつて、嬉しさはあつたが、今はただ、不安のほうが大きい。

“少しの間”休むことが許可されたため、有衣は自分の部屋で悶々とすることになった。

時間が遅く感じる。

繰返し時計を見てしまい、先ほどからたつたの10分しか進んでいないのを見て、有衣はどうと疲れを覚えた。

有衣は元の日常に戻つただけだったが、既にそれは日常ではなくなつてしまっている。

月曜、火曜と、学校から戻つて家事に明け暮れてみたが、時計が気になり、晴基や直輝のことが気になる。

今頃本当なら晴基と一緒に買い物をしていたとか、一緒にお風呂に入つていたとか。

あともうすぐで直輝が帰つてくる頃だとか、今日の夕食はどうしただろうかとか。

晴基は、直輝も、同じように自分を気にしてくれているだろうか、とか。

結局いつもふたりのことを考えてしまつ自分のことを、有衣は自分でどうにもできずにいた。

学校にいる時ですら、ふたりのことが頭から離れなくなり、有衣は疲れきってしまった。

それを横で見ていたみどりも、有衣の心情を思いやると苦しい。

みどりは、有衣にはあの口電話をかけたことを話していなかつた。けれど、電源が落ちたのは、人為的なものつまり、直輝が落とし

たのだとわかつて、いた。

それは有衣にとつて有利に働きそつなことだと思つたが、うかつには言えないと思つて、いた。

「有衣、気分転換したほうがいいと思つ

「… そうだよね」

そつは言つもの、お互い何をすれば気分を変えられるのかはわからぬでいた。

ひとまず、鬱々とした気分を少しでも晴らしあつと、昼休みになると有衣は屋上へ向かつた。

通常屋上は立入り禁止なのだが、鍵が壊れているため、事実上解禁されている。

それでも見つかること怒られることが多い、有衣は辺りを窺いつつ向かい、ドアを開けた。

見つかりにくい貯水タンクの裏側へと行くと、先客がいる。有衣の足音に気づいて向けられた顔を見て、有衣は驚愕した。

「あ…！？」

「…は、ハルママー…？」

「た、武先生？」

お互い、無様にも口をあんぐり開けたまま、しばらく見つめあつ。なんでここに、とお互いが思い、視線は名札へ、そしてその後足もとへ集中した。

有衣は、武 譲（たけ ゆずる）といづ名札を見た後、上履きのラインが黄色いのに気づいた。

黄色いラインは2年生の印だ。

ちなみに、3年生の有衣の上履きのラインは青色である。

「年下！」？

「高校生だったのか…」

「てか、それでなんで先生？」

「え、あの保育園、俺ん家だし…」

有衣にしてみれば、いくら若く見えたと言つても、仮にも“先生”が年下だとはまさか思わない。

讓にしても、いつも園で会うときは私服だったせいでも、まさか高校生だとは思つていなかつた。

何とも言えない微妙な空氣が流れだが、讓が促して有衣はおずおずと隣に腰を下ろした。

「…具合が悪かつたんじやなかつたんだ」

「え？」

「昨日、一昨日と、ハルパパが遅くに迎えに来てたから。

ハルママが具合悪いのかと思つてたけど…とりあえず体は元気そうだね」

有衣の表情が、あまりにも辛そうに変化したのを見て、泣いてしまうのではないかと、讓はぎくりとした。

けれど有衣は泣きはしなかつた。代わりに、少し哀しそうに笑う。

「私、ハルくんのママなんかじや、ないよ

「え？ でも、ハルが…」

「私は、ただのハウスキーパだから」

まるで、言い聞かせているかのようだ、と讓は思つ。

少なくとも、晴基や直輝の見方は違うだらう、と思つた讓は、余計なことだと知りつつ口を出したくなる。

讓が見たところ、この2日間の晴基の表情は暗く、直輝の顔色も相当悪い。

有衣の顔色も冴えないところを見ると、何かがあつたのは間違いないのだ、それも恐らく直輝と有衣とで。

それでも、それを直接聞くほどには親しくないため、讓は回りくどい質問をした。

「ハルの様子、気にならない？」

「…元気にしてる？」

「全然」

有衣は、弁当を広げていた手をぴたりと止めた。

一瞬譲がふざけているのかと思ったのだが、顔を見上げてみると、それでもないらしいことがわかった。

「具合悪いの？」

「体は元気。でも表情とか仕草とか、暗い感じでいつもと全然違うよ」

有衣の知っている晴基は、いつも笑顔で、暗い顔など見たことがない。

今、そんな風に暗い顔をさせているのは、自分のだらうか、と思うと有衣は胸が潰れそうに痛んだ。

そして同時に、直輝の様子も気になってしまつ自分には、半ば飽きてしまつ。

「それにハルパパも相当顔色悪いな。まともに寝てないって感じでね」

譲が直輝についても話したため、有衣は自分の気持ちが見透かされたのではないかと、どきりとした。

そつと譲を窺つてみたが、よくわからなかつた。

譲の話を聞いた後、二二日間頭から離れなかつたことが、さらにつぶりついたような気がする。

どうしても、何をしていても、ふたりのことを考えてしまつ自分がいる。

考えまいと躍起になるのに、そつすればするほどひたに考え込んでしまうのだ。

直輝が有衣の継続を希望したということは、有衣が行きさえすれば、有衣は受け入れてもらえるのだろう。

だが今のところ、有衣の中ではまだ踏ん切りがつかないでいた。

「今日も迎えに来ないつもりなの？」

「……まだ、わからない」

「俺としては、ハルのためと思って、迎えに来てほしいけどね」

「ハルくんのため？」

「何があつたかは知らないけどさ、どうせハルはどうちつ食つてるんだ」「

何も言い返せず、有衣はぐつと息が詰まつた。

確かに、晴基は何も悪くないのだ。

いわゆる“大人の事情”のために、忙しい直輝を待つて晴基は遅くまで保育園で過ごしている。

黙つた有衣の態度を、肯定と勝手に解釈した譲は、話は終わつたとばかりに立ちあがつた。

「じゃ、待つてるから」

ひらひらと手を振つて、譲は屋上を後にした。

有衣は、その後ろ姿を見つめながら、表面上は、まだ決めかねているふりをしていた。

けれど脳内では既に、今日の放課後の予定を組み立て直している。

有衣は、自分の浮つき始めた気持ちに気づいた有衣は、これは晴基のためだと誰に対しても一生懸命言い訳した。

有衣は家に帰つて急いで服を着替えると、会社に向かつた。もう行けないと思つていたため、西岡家の鍵は会社に預けていたのだ。

「清香さん、鍵ちょうどだい」

「…もう、お休みはいいの？ 復帰したら、もう休めないと思うわよ」

「うん、いいの。…ハルくんのために、行くことにしたの」「そう…？ まあ、有衣がいいなら私は何も言わないわ」鍵を受け取ると、振り返りもせずに事務所から出していく有衣の背中に、清香は苦笑交じりのまなざしを向けた。

「言い訳なんてしちゃって、…ばかな子

「有衣が行くと言つたら、止めることはできない。」

清香は小さく溜息をつきながら、直輝の職場の電話番号をダイヤルする。

今夜から有衣が行くと伝えると、あからさまにほつとした雰囲気を感じ、清香はまたしても苦笑を禁じ得ない。

どうやら有衣には追い風のようだ、と清香は電話が切れるといつそりとほほ笑んだ。

母親としては、有衣にまでできるなら辛いものを含む恋愛はしてほしくない、と思つ。

それでも、どうしても振りきれない想いがあるなら、それを貫いてほしいとも思う。

またしても、若さを羨ましいと思いかけて、最近このパターンが多いな、と清香は少しだけ慌てた。

今回はなぜか、清香さんで始まり清香さんで終わりました。
特に深い意味はなかつたんですが、そうなりました。

そして、武先生は高校生でした。

しかも有衣と同じ学校で、年下です。

この設定は、使おうかどうか、どうしようかな～といつ程度で考
えてたものですが、

有衣を動かすのに一番いいキャラは譲かなあ、と思いついて
しました。

次回は、有衣と晴基＆直輝再会です。
でもまだまだ安心はできません？＾＾；

保育園に向かう間、有衣はずっと手の中のカードキーを眺めていた。直輝の家から飛び出した時は、もう一度と使いことができない、と思っていた。

それなのに、3日だけ開けて、今日はもう使おうとしていると思つと、何やらおかしい。

直輝の意図はわからないままで、不安な気持ちのほうが大きいが、それでも自然に笑みが浮かんだ。

インタフロンに出たのは、譲だつた。

「ハルがお待ちかねだよ」

譲の後ろで、有衣の名前を呼ぶ晴基の興奮した声が聞こえる。その音が耳に届くと、有衣は緊張で強張っていた体から力が抜けるのを感じた。

「ゆいちゃん……」

大きな声で名前を呼んで、走り寄ってきた晴基は、そのまま有衣に抱きつく。

あまりの勢いに、有衣は後ろへ倒れそうになつたが、なんとか持ち堪えた。

そのまま抱き返してあげると、晴基は嬉しそうに笑う。

「ハルくん。…久しぶりだね」

「うん！ ひさしぶりだね！」

明るい声が、嬉しい。

目の前にいる晴基が現実だと確かめたくて、有衣はもう一度ぎゅつと晴基を抱きしめる。

そんな有衣と晴基を、譲はほつとしたように見つめた。

有衣は、ここにまた来られるよう背中を押してくれた譲を見上げる。制服を脱いだ分、学校で会つたときはやはり雰囲気が少し違う、

とお互い思つた。

「あの、ありがとう、…武、先生」

年下だと知つてしまつたせいで、先生なのが先生と言ひつのを一瞬戸惑つてしまつ。

変な間ができてしまつた、と焦る有衣を、譲は笑つた。

「好きに呼んでかまわないよ。つか、俺もため口きいてるし」

「じゃあ、譲くん？」

晴基の影響か、有衣は咄嗟に苗字で無く名前を言つてしまつた。一瞬焦りを覚えたが、譲は特に気にする風でもなく、それを受け入れる。

今までとは異なる雰囲氣で交わされたそんなやりとりを、晴基は怪訝そうに見つめた。

「たけせんせい、ゆいちゃんとなかよしなの？」

「んー？ そうだなあ。まだ、お友達かな」

「まだ、つて何…」

「だめ！ ゆいちゃんはまくーーあと、パパの！」

聞き捨てならない言葉に反応しかけた有衣だが、晴基の反応のほりが強烈だった。

深い意味はないとわかつていても、後半の言葉にはなぜかどきりとさせられた。

黙つてしまつた有衣をちらりと見つつ、譲は晴基に仕方なさやうに笑いながら有衣を譲るふりをする。

それで安心したらしく晴基に引つ張られるように、有衣は譲に挨拶して園を後にした。

実際会えなかつたのはわずか数日なのに、もうすこぶん経つたようを感じる。

そのせいか、何もかもが懐かしくて、嬉しい。
晴基と手をつないで、いつもの道と一緒に歩くことだけでも、樂しくて有衣はずつと笑顔だった。

いつものスーパーに行くと、顔なじみになっていた店員が近づいてくる。

「しばらぐですね。具合でも悪かった？」

「あ、はい…少し

ぎこちなく返事を返す有衣を見て、晴基は少しだけ表情を硬くした。有衣はそんな晴基には気づかなかつたが、とにかく早く店を出たくなってしまった。

すっかり忘れていたが、ここでは親子だと誤って認識されていたのだ。

以前感じていた戸惑いとともに、直輝と最後に会つた晩の出来事をまた思い出し、有衣は泣きたくなつた。

一秒でも早く、と手早く買い物を済ませ、足早に店を後にする。

「ゆい、ちゃん」

「あ、ごめんね、歩くの速過ぎたよね」

息の上がつた晴基の声に、小走りになつていた晴基の状態に気づき、有衣は慌てて歩幅を縮めた。

その頃には、マンションがもう田の前に見えており、有衣はいったん足を止める。

有衣は、初めて来たときのよつこ、少しだけ圧倒されるよつな面持ちで建物を見上げる。

有衣の心には、戻つてこれたのだといつう安堵と、戻つてしまつたのだといつ不安が縹々交ぜになつていていた。

玄関に入り靴を脱ぐと、晴基が有衣の服を引っ張つた。

有衣が晴基を見るといつうか表情に影が差してゐるよつこ思えて、有衣は少し不安になる。

どうしたのだろう、と思つたが、晴基の口元は強張つていて、なかなか話そうとしない。

晴基の目線に合わせて、有衣が廊下にしゃがむと、晴基はよひよへく口を開いた。

「…ゆいちゃん、『めんなさい』

「うん？ 何が、『めんなさい』？」

「やくせくまもうなくて。それで、ゆいちゃんが、パパにおこられ

たの」

あの晩のことを言つてゐるのだと、わかつた。

晴基に何も言えずに部屋を飛び出したせいで、晴基が気に病んだの

だと、有衣の胸は痛む。

「…ハルくんのせいじゃないよ。私が、悪かったの」

「でも、ぼぐが…。『めんなさい』」

ぎゅっと皿をつぶると、ぽろりと涙が零れ落ちた。

食いしばりとした歯の間から、小さな泣き声が漏れる。

有衣は晴基をぎゅっと抱き寄せると、左手で頭を撫で、右手で背中を撫でてやる。

「ハルくん。いっぱい心配してくれたんだね、ありがとうね。

でもね、ハルくんのせいなんかじゃないからね。だから、大丈夫だよ」

「じゃあ、またいなくならない？ ずっといてくれる？」

「…ずっといるよ。いなくならないよ」

そつ、自分は晴基のために来たのだ、と有衣は改めて思つ。またあのようなことにならないよ、晴基のためだけを思つてここに来ればいい。

直輝の意図もわからない今、直輝のことはできるだけ気にならないようにして、有衣は思った。

今日の晴基は寝つきが悪く、何度も有衣がいることを確認しようとしました。

有衣はそんな晴基がかわいそうで、その度にずっとここると約束し、よつやく晴基が寝入ると溜息をこぼした。

もしかしたら、自分の緊張が晴基に伝わってしまったのではないかと思つ。

ベッドルームに入った途端、いつも感じていたあの不可解な緊張感がぶり返したのだ。

そのため有衣は、自分がここにいるのは晴基のためなのだと、頭の中で繰返し念じる必要があった。

しかし、その抵抗は空しくえいものだと、すぐに痛感する。有衣が視線を巡らすとすぐに直輝のベッドがあり、しかもその枕元に自分の携帯電話を見つけてしまったのだ。

その瞬間、有衣の心臓は早鐘のように打ち始める。

記憶の中では、確かにリビングかキッチンに置いていたはずなのだ。それなのに、どうしてベッドルームに、まして直輝のベッドの上にあるのか。

答えなど出るはずもなく、有衣はふらりと立ち上がり、自分の携帯をその震える指でそつと掴みあげた。

その瞬間、ほんの一瞬だけ触れてしまつたベッドカバーの感触に、有衣の全身が静かに震える。

感じるのは直輝のぬくもりを探したくなつてしまい、有衣はやつとのことで自分を抑える。

こんなことではない、と思つたのに、またしても思い通りにならない感情に、有衣は途方に暮れた。

ロックの解除された電子音に、有衣はびくんと体を竦ませる。それなのにドアの開く音がすれば、条件反射のように有衣は玄関へ向かつてしまつた。

「…おかえりなさい」

「…ただいま」

お互いの口から出たのは、それぞれが思つていたよりも、幾分ぎこちない音だつた。

それでも、想像よりも穏やかな雰囲気を感じて、有衣はひどくほつとした。

それと同時に、自分の感情との闘いに勝てる気がせず、ひどく哀しそうだった。

それと同時に、自分の感情との闘いに勝てる気がせず、ひどく哀しそうだった。

い気持ちになる。

もつと何か言わなければ、と思ったがうまく言葉に出せない気がして、有衣はリビングへ戻った。

直輝の夕食の準備は整っているし、お風呂もできあがっている。晴基も眠り、その他の仕事も終え、自分自身の帰り支度も既に終わっている。

有衣は、やはり帰つてくる前に全てを終わらせておいて正解だったと思った。

お決まりのようなぎこちない挨拶をした後、リビングへ歩く有衣に、直輝は安堵を覚えていた。

なんとか謝ることができそうだ、と内心で改めて覚悟を決めようとしていた。

しかし、リビングへ到達した有衣は、床にあつた自身の荷物を取ると、すぐに引き返そうとこちらを向く。

「あの、食事ももうできますし、お風呂も大丈夫です。

ハルくんももう寝つきます。掃除と洗濯もひと通りやりました。

「じゃあ、あの…また明日来ますので。今日はもうこれで失礼します」

直輝が何も言えない間に、かなり早口でそれだけのことを言つて有衣は直輝の横をすり抜けていく。

「有衣ちゃん…」

とつたに呼びとめようとした声は、自分でも驚くほど掠れていた。有衣は顔を直輝に向けたが、靴を履く動作は止めようとしない。それも、心なしか急いでいるような雰囲気が感じられる。どうあっても帰るつもりらしい、とわかると、直輝はもう何も言ひだせなくなってしまった。

「…タクシー」

「いえ、…ひとりで帰れます」

「そう…」

力無く返した言葉が、虚しく廊下に響く。

有衣は、既に完全に靴を履いてしまい、ドアを半分開けてしまつている。

「あの、おやすみなさい…」

「…おやすみ」

情けない自分の声の後に、ドアのしまる音が響いた。

直輝は、全く期待に副わないこの再会に、茫然と閉まつた玄関のドアを見つめることしかできないでいた。

と、いうわけで再会編でした。

有衣にもいろいろ思うところがあるわけでして、
ハルには普通に接しますが、直輝にはもう普通にはできない…と思
つていいようです。

直輝は、ガーン！…ってここですかね^ ^；

じれったいふたりですが、もうしばらく見守ってください

電車に揺られながら、有衣は自分の携帯をいじっていた。

落ちていた電源は、自然に電池が切れたのだと思つていたが、電源を入れてみると電池はまだ満タンだつた。

残つている着信履歴は、全部あの日の夜中のもので、みどりが大量に電話をかけたことを物語つている。

有衣自身は、自分の直輝に対する感情と晴基に対する不用意な言動が悪かったのだと思つている。

だが事情を全ては知らない優しいが激情家の幼馴染みは、自分の惨状を見て怒つたのに違ひない。

だから、有衣が直輝の家に携帯を忘れたことに気づいて、わざとかけ続けたのだろう。

そのときはまだ電源が入つており、恐らく鳴りやまないために、直輝が電源を落としたのだろうと予想がついた。

直輝のベッドに置かれていた携帯。

あの日、夜中まで眠らずにいた直輝。

今日有衣を呼びとめた、掠れた呼び声。

それらが何を意味するのか、有衣にはわからなかい。

そして、自分に都合のいいように考えてしまいそうな自分が、正直怖かつた。

そんなことをしてしまえば、またあの晩のようなことになりかねないのだ。

直輝のことを考えまいと、有衣は降りる駅までの間ずっと無意味にネットサーフィンをし続けた。

避けられている、という事実は、有衣の復帰で浮上しかけていた直輝の気分をまた急降下させた。

有衣が帰った後ベッドルームに入った直輝は、枕元に置いてあつた

携帯が持ち帰られたのに気づいた。

もともと有衣のものだから、それは当然のことなのだが、どこか心もとなさを感じた。

有衣の態度は翌日も変わらず、直輝が部屋に帰ると同時に、有衣が部屋を後にする。

直輝は何も言えないまま、相変わらず玄関のドアを見つめるためになった。

テーブルの上には、温められたばかりの料理が載っている。湯気が立ち昇るのを目にしながら、直輝はなぜか、温かさを感じられないかった。

力無く椅子に座り箸をつけるのだが、あれだけうまいと思っていたものが、今は砂を噛むように味がない。

違うのは、一緒にテーブルに着いて、いろいろな話をしてくれていた有衣が、今はいないということだけなのに。

視界がやけに開けていて、いつもと変わらないはずの部屋の広さが、もつと広く感じる。

有衣がこの家に来る前までの日常は、直輝にとっても既に日常ではなくなっていた。

「先生、大丈夫かね？」

左方向から急に聞こえた声に、直輝ははつと意識を戻した。

一瞬、直輝は自分がどこにいるのかを認識するために、視線を素早く巡らせる。

カルテの広がるコンピュータのディスプレイと、座る馴染みの患者のヨシさんが目に入り、直輝は慌てた。

「あ、すみません。ええと…、検査の結果でしたよね」

「それはもう聞いたから、あとは薬のことだけ…。今日は先生のほうが具合悪そうだねえ」

「は…、すみません」

よくディスプレイを見れば、確かに処方箋を入力し始めたところで

止まつてゐる。

勤務中に、しかも患者の田の前で、こんな呆けたことになつてしまふとは、と直輝は慌てて入力を再開する。

「タケプロンは、8週目なので今回で最後ですね。あとはいつもの消化剤お出ししておきます。

何か異常があつたら、また診察に来ていただいてけつこひですので」

「ありがとうございました。…先生も診察してもらつたほうがよさそうだけどねえ」

「…お大事に」

患者がヨシさんで、まだよかつた。

診察室から出ていく際の言葉に苦笑しながら送り出すと、後ろから冷氣を感じて直輝は振り向く。

看護士である白井（しろい）の、失態を責める冷たい視線に、直輝は益々苦笑を深める羽田になつた。

「じめんね」

「私に謝られても…。というか、先生最近変ですよ。

近頃急にウキウキしだしたかと思つてたら、ここ一週間くらいは逆に葬式かつて雰囲氣で」

「はは、そつか…」

個人経営の病院であり、加えて経営陣の性格のせいか、ここでは看

護士も医師もほぼ対等に渡り合つてゐる。

しかも白井は直輝より7つも下なのだが、正直な性格の故なのか、歯に衣着せぬ物言ひが特徴である。

例にもれず今回もぐさつと来るような言葉を言われ、直輝は渴いた笑いを漏らした。

気を取り直して次の患者のカルテナンバを見ようとすると、白井が横からそれを搔つ攫う。

「先生の担当の患者さんじやありませんから、お隣に回します。

患者さんに心配されるような顔が直るまで、休憩でもしててください

「さー

口調はきついのだが、その田の奥に微かに心配そうな気配を感じて、直輝は素直に従い、診察室を出た。

確かに、患者に心配されるようではお終いだ。しかし、自分はそこまでわかりやすい性格だったか、と思い直輝は首を傾げた。

唯が亡くなつて以来、その必要性もなかつたのだが、あまり感情を動かされたりはしなくなつていたはずだ。

それでも、最近の気分の激しい変動は、自分でもわかつてはいる。有衣のこと、自分の気持ち、そして唯のことで、直輝の内面は混乱と無秩序に陥つている。

そして白井の言つ“近頃”といつのが、恐らく有衣が来始めてからだろう、といつのは容易に考えられた。

「はは……」

思わず、自分で自分を笑つてしまつた。

結局のところ、始めから有衣に惹かれていたのだ、と再認識してしまつたのだ。

ちょうど屋上のドアを開け、田に飛び込んできた鮮やかな青と白を言い訳に、直輝はぎゅっと目を瞑つた。

直輝の気分とは裏腹に、すつきつと雲ひとつない青空が広がり、真っ白なシーツが風に揺られている。

シーツの波間をくぐるように、直輝は歩を進め、フェンスのそばまで行く。

白衣のポケットに手を突つ込み、額をフェンスに預けて眼下を覗くと、その隙間から落ちていきそうな気になる。

「ここに自殺なんて、やめてくれよ」

突然、後ろから笑いを含んだ声が聞こえてきて、直輝は振り返つた。立っていたのは、院長の甥にして次期院長と名高い、経営陣の一人である四谷 慧（よつや けい）だった。

しかし直輝にとつて慧は、ただそれだけの関係ではない。

慧は直輝の大学の2年先輩であり、大学病院からこの病院へ引き抜いてくれた恩人でもある。

さらに、慧は唯の従兄でもあるため、直輝にとっての親戚でもあり、そして友人また理解者でもあった。

「死にそうな顔してるつて聞いたけど」

途端に白井の顔が浮かび、余計なことを言つてくれた、と直輝は顔を震めた。

きっとヨシさんの前での失態についてもしゃべつてくれたに違いない。

「…ほんとにそんな顔してるな」

慧はほんの少しだけ楽しそうな顔で、珍しそうに直輝を見ている。慧は機微に敏いところがある。

直輝は、慧に何もかも知られたような気がして、内心ぎくつとした。有衣のことは、慧には何も話していないし、話そつといふ気も起きた。

多分それは、唯のことに関して、後ろめたさがあるからだ。

「唯が死んだときと、似てる」

その慧の言葉に、今度こそ直輝は動搖を抑えられずに、慧をまともに見ることになった。

心臓が、強く早く打つせいで、息苦しささえ感じじる。

探るような慧の目に、恐ろしいほど狼狽を覚えつつも、直輝からはその目を逸らせない。

少しの間を置いて、納得したような慧が、ひとりで頷きながら視線を他にやる。

「誰にも遠慮するな。俺にも、唯にもだ。唯は、もういないんだ。

それに、だいたいお前はまだひとりでいられるような年じゃないし、ハルだっているだろ」

歌うような、軽い口調だった。

実際、慧の発した音声も、軽く風に流されたように空へ消えた。

やはり慧は気づいた。

直輝が唯からほかへ心を移したこと、気づいている。

何も言えないでいた直輝に向かって、慧はもう一度念押すよつて言う。

「変な遠慮とか迷いのせいで、せつかく見つけた大切だと思える人間をまた失うのは嫌だろ？」

有衣の来ない数日間は、気の遠くなるような日々になつた。有衣が来ても、温かい時間は今、手の届かないものになつていて。そのうち、永遠に失われる日が来るかもしれないとは、考えたくもない。

「…悪い」

「謝るなよ」

「正直…、俺もまだ混乱してるんだ」

「…そうだろうな」

短い返答に、様々な想いが感じられて、直輝は不覚にも泣きそうになり手で目を覆つた。

慧とは、もともと唯に紹介されて出会つたのだ。

直輝の唯に関わることは、慧もほとんど全てを知つていて。恐らく、直輝と同じくらい、もしかするとそれ以上に、慧も心がざわついたに違ひなかつた。

「で？ そんな顔してる、ってことはつまくいってないんだな」

徐に聞く慧の質問に、直輝は当面の問題を思い出した。

とにかく、有衣に避けられている事態を何とかしなくてはいけないのだった。

結局慧にどんな状況なのかを直輝は吐かされ、聞いた慧は呆れたよう直輝を見やつた。

「その臆病さ加減、どうにかしろ。そんなの、さっさと謝つて掘まえろ、つづ一話だよ」

それは、そうなのだが。

自分でもわかつてはいることをさりと指摘され、直輝は苦く笑う。

「…ハルをダシにするとか」

「は？」

「逃げられたのはハルがもう寝てた日だ。仕事が終わつたから、ここぞとばかりに帰つたんだろうよ。

だからハルが寝てないうちに帰つて捕まえれば、……早退しろ。

外來は代りに俺がやつてやる」

「はあ？」

「どうせそのせいでの仕事になつてなかつたんだ。いいから、今日は帰れ。

「ましいかせて、来週からきちんと仕事してくれればそれでいいし」

提案に目を丸くした直輝だが、言われたことは理にかなつていていため、直輝は従うほかない。

直輝は慧に追い立てられるように、早退手続きを済ませると、実際に出口まで見送られてしまった。

「今度、紹介しろよ」

挨拶代わりのそんな言葉に、直輝は曖昧に頷いた。

紹介できるような間柄になれば、の話なのだと思いつつ、妙に気分は良かつた。

10 (後書き)

やつと出できました、直輝の味方キャラ。

うじうじくな直輝に発破かけてくれるキャラは、唯の従兄の慧でした。

慧のおかげで直輝も元気が出たようですね。

次回、とうとう、ようやく、溝が少し修復できるかも?^へへ;

玄関のドアを開けると、いつもは無いものが目に入つて有衣は目を見開いた。

男物の靴だ。直輝の靴がある。

今日は土曜日で直輝の帰りは早いはずだが、こんなに早い日は無い。珍しくしまい忘れたのだろうか、そうであつてほしい、という有衣の願いも空しく、廊下の奥で物音が聞こえる。

そして、ドアを閉める音と同時に、直輝の姿が見えた。

「おかいり」

「パパー！ ただいま！ きよひさ、はやいね！」

いつになく早い直輝の帰宅に、晴基ははしゃいで直輝のもとへ駆け寄る。

その晴基を微笑ましいと思いながら、有衣の内部では驚きと狼狽と不安がいっぱいになつていて。

このまま、帰つてしまいたい。

直輝がいるなら、自分の仕事はしなくてもいい。

けれど、今日は土曜日で、契約内容に含まれているため、そつもいかないことは十分わかっている。

どうしてよいかわからず、有衣は靴も脱げずに玄関で立ちつくした。直輝はそんな有衣に、少しだけ気まずそうな顔をしながらも、中へ入るよう促した。

「…入つて」

「あ、はい…」

慌てて靴を脱ぎ、廊下へ足を踏み出しが、有衣はまだ今の状況を乗り切る方法を思いつかずにいた。

有衣が食事を作る間、直輝は晴基と入浴することにした。

怪獣のような晴基を風呂に入れるのは、直輝にとつてもけつこうな

労働だ。

髪を洗つていると、わざと頭を振つた晴基のせいで、シャンプーの泡が飛んできて直輝は反射的に目を瞑る。

「ほらっ！ おとなしくしてなさい」

「えへへ～」

晴基は、直輝の珍しく早い帰宅が嬉しくて仕方がないらしく、さきほどから全く落ち着かない。

目に沁みる痛みに顔を顰めながらも、直輝は晴基のことが愛しくてたまらない。

それに比べ、と直輝は思う。

有衣はかなりの戸惑いと狼狽を表情に表していた。

直輝は、有衣が直輝を避けようとする理由を、正しくは知らない。不安を感じつつも、せっかく慧が作ってくれた今日という機会を、どうにか生かしたいと直輝は決意していた。

料理をしている間に、有衣はどうにか落ち着きを取り戻していた。晴基が起きているときに、直輝とここで過ごす時間のことは、今まですっかり失念していたのは浅はかだった。

そう気づいたが、どうせもう後の祭りなのである。

今日はもう諦めるしかない、と有衣は早々に自分を抑え込むための闘いを放棄することにした。

そうすると不思議なことに、このところ感じていた重苦しさが、消えたような気がした。

晴基用の盛り付けをしていた時、晴基がリビングに走り込むのが見えた。

いつもの追いかけっこを、今日は直輝とするつもりらしい。てててて、という小さな足音と一緒に、ぽたぽたぽたつ、と水が落ちる音が聞こえる。

直輝はまだ追いかけてこない。

このままでは床がかなり濡れてしまつ、と有衣がキッチンから出かけた時、ようやく直輝が走ってきた。

晴基はきやーきやーと甲高い声で逃げようとしたが、直輝の歩幅では敵はない。

有衣と違い、直輝はすぐに晴基を捕まえ、タオルでわしゃわしゃと拭き、手早く晴基を拭く。

しかしそくよく見れば、直輝の頭もまだ濡れていたせいで、床はさらに濡れていた。

「ハル～、濡れたまま行くなよお

「パパきょうは、ふくきたの」

「…あんなあ」

しかもそんな会話が聞こえてきて、有衣は思わず笑いをかみ殺した。直輝は慌てて服を着たらしく、ジッパが途中で服の生地を噛んで上がらないままになっている。

そこから見える素肌の色に、有衣はどきりとして慌てて目を逸らす。落ち着きを取り戻そうと懸命に努力した後、有衣はよしやく気を取り直してふたりに声をかけた。

「ハルくん、床拭いてね。…直輝さんも、髪拭いてくださいね」

「はーい」

「あ、…ごめんね」

直輝は、今気づいた、というような顔で情けなさそうに、持っていたタオルを今度は自分の頭にやる。

前にもこんなことあつたな、と有衣は懐かしく思い、柔らかな顔で笑つた。

その笑顔に直輝は一瞬虚を突かれたような表情を浮かべたが、それはすぐに消えたため有衣は気づかない。

しかしそのとき、直輝の中には、言いつのない温かむと喜びがじわじわと広がつていた。

夕食と後片付けの時間は、思いの外和やかだった。

有衣が晴基に辛抱強く非効率的な後片付けの手伝いをさせている姿は、初めて見た直輝には驚きでもあった。

晴基が喜んで皿やグラスを一つずつ運ぶ姿も、直輝の知らないものだった。

そういうえば、自分が片づけているときに、晴基は何か言いたそうな顔をしていた、と思いだす。

自分でも運べるのだ、と言いたかったのだろうと気づかされた。

恐らく、有衣がそのように助けてくれたのだとわかり、直輝は有衣に対する気持ちがさらに深まるのを感じた。

しかし、晴基を寝かせる時間が近づくにつれ、有衣は緊張の高まりを隠せなくなつていく。

落ち着きなく時計と晴基、そして鞄の間をさまよう有衣の視線に、直輝は気づいていた。

帰ろうとするタイミングを計つてゐるようだが、直輝にまだそのつもりはない。

晴基がうつらうつらしだすと、有衣は直輝の視線を逃れるように、さつと晴基を抱き上げベッドルームへ消えた。

直輝は咄嗟に、意味もなく追いかけたくなつたが、まだその時ではない、と体をソファに縫い付けた。

どれくらいの時間が経つたのか。

晴基はもうとうに眠りに入つてゐるが、有衣はまだその場から動けずについた。

リビングには、直輝がいる。

自分はもう家に帰らねばならないが、その前に、直輝がひとりでいる部屋へ行かなければならない。

その事実が、有衣を動けなくさせていた。

晴基が起きているときはよかつたのだが、もう眠つてしまつてゐる。今度は、有衣が一人で直輝に対峙しなくてはならない。

それが、とてもなく大きな壁に思えて、有衣の鼓動は速まった。

有衣が部屋に入つて30分は経過した。

晴基の様子からして、多分どうに眠つてゐるだろ、といつたまことに簡単に予想できる。

有衣が部屋から出でてくるのを、直輝は忍耐して待つていた。やがて、恐る恐るといった風に部屋から出てきた有衣の顔は、傍から見ても強張つていた。

直輝の顔をちらりと見てから、一旦散に鞄のもとへ歩いとするのを、直輝は内心苦笑して待つたをかける。

「有衣ちゃん、ちょっと…話があるんだ」

「え…」

はつきりと、困惑の表情を浮かべて固まる有衣に、直輝は少しだけ勇気が萎えそうになる。

だが、今日はもう決意を変えるつもりは無い。立ちあがつて、固まつたままの有衣をソファに促すと、それでも有衣は素直にソファに座る。

今まで直輝がいたのとは反対側だつたが、今度は直輝がそちらに移り、有衣は驚いて横の直輝を見上げた。直輝がその目線をまともに受けて逸らさずにいふと、有衣は少しだけ頬を染めて氣まずそうに俯いた。

その、頬を染めるという反応が、直輝の想定を超えたものだったで、緊張を別にしても直輝の鼓動が速まる。

「…まずは、あの夜言つたことについて、謝らせてほしい。俺が、悪かった。

あんな風に、言つべきじやなかつたし。有衣ちゃんを傷つけてしまって、本当に、後悔する」

有衣はもう一度、視線を上げたが、その顔は驚きに満ちていた。

有衣の唇が物言つたげに震えたのを見て、直輝は促して話させる。「でも、あれは…私が、悪かつたんですね。私が勝手にハルくんに」「ハルがお願ひした、つて聞いたよ」

「あ、でも、それでも…。直輝さんの言葉は、間違つては…」

言いかけてはつとしたように言い淀んだ有衣を見て、突然思いついたことが直輝の脳内を駆け巡った。

まさか、有衣にも自分と同じ想いがあるのではないか。

だがそれは、あまりにも自分に都合のいい考えだ、と自重しつつも、期待が芽生えるのは止められない。

「うまく言えないけど、…あれは、俺の願望に近い」

「…え？」

「あの時は自分でも気づいてなくて、咄嗟に怒りてしまつたんだ。
ごめん…。

本当は、今有衣ちゃんが、いつもやつてまた来てくれる」とだけでも感謝だけど。

それでも俺としては、ハルのためにも、俺のためにも、前みた
いに笑つてほしいと思うんだけど、どうかな」

直輝は、“俺のために”、といつところに重きを置いたつもりで話
し、有衣の反応を窺つた。

有衣は話の全容を掴むつと努めつつも、直輝の言葉の意味を図りか
ねていた。

直輝の願望、とはじつこつ意味だらう。

晴基の本当の母親の代りをすること? それとも単に母親の役目を
果たすこと?

それは同じようでいて、全く違う事柄だ。そう思った瞬間、有衣には自衛作用が働いた。

直輝は、晴基のために、とまづ言つた。変に期待するのは命取りだ。
ただ直輝が、自分が以前と同じように接することを望んでいるとい
うことは理解できた。

有衣としては、自分が辛くなるだけとしても、それでも直輝と過
ごす時間は魅力的に思える。

晴基を口実にするのは忍びないが、自分を抑えるのにはほとほと疲

れている。

それならば、いつそのこと、以前と同じように温かな時間を過ごせ
るほうが、良さそうに思えた。

「わかりました。直輝さんが、そう思ってくれるなら……」

「よかつた……」

心底ほつとしたような顔と口調で直輝がそう言つのを、有衣は複雑
な気持ちで見つめた。

11(後書き)

直輝さん、伝わってませんけど……！
……な、感じで終わり、次回へへへ；

表面的には元通りになりますが、内面ではまだ隔たりが生じたま
です。

直輝は基本、鈍感ですからね……。

有衣も有衣で考えすぎというか……。

まあ、人を好きになると、普段できることもできなくなったりしま
すもんね。

そんな感じで、日常は続き、次回はハルの運動会です。

いつもは無い小さな旗の飾り付けが、色とりどりで眩しい。

今日はかねてから案内されていた、晴基の保育園の運動会だ。

お弁当の入った大きな紙袋を片手に門をくぐり、有衣は場所取りをしているはずの直輝の姿を探した。

普段部屋の中でしか会っていないため、外で会うことに若干緊張している。

しかも頼まれたお弁当は、晴基用とあと有衣を含めて大人4人分ということだった。

直前に人数が増やされ、直輝のほかに誰が来るのかを有衣は聞いておらず、ますます緊張が増した。

「有衣ちゃん」

声をかけられ視線を向けると、直輝が手招きしてくれているのが見え、有衣は笑顔と会釈を返して足を向けた。

以前と同じように、といつ直輝の希望通り、有衣は前と同じ生活を送っている。

学校の後に晴基の世話をし、晴基が眠り直輝が帰った後は直輝と時間を使っている。

それは温かく楽しい時間ではあるが、有衣の心の中に少しずつ重しき積み重ねてもいる。

だがそれも自分で選んだことだ、と有衣は思っている。

それに、晴基と直輝と全く会わずにいたあの数日間と比べれば、どんなことも辛くはない、と思えるのだ。

有衣が直輝のもとまで行くと、直輝はさりげなく荷物を有衣の手から引き受ける。

その行動に、有衣はいつもながら少しの戸惑いを覚える。

単なるあたたかさではなく、何か別のものが存在しているかのよう
に錯覚してしまうからだ。

「ありがとう。急に人数増やしちゃつたから、大変だつたでしょ」「
いえ、大丈夫です。簡単なものばかりだから、2人くらい増えて
も変わらなかつたですよ」

「そう？ ならよかつたよ。せつかくだから、有衣ちゃんのお弁当
食べさせたくてね」

「…あの、どなたが来られるんですか？」

ずっと気になつていたことを、有衣は恐る恐る尋ねる。

晴基の祖父母、それも母方の祖父母が来るのはないか、と有衣は
密かに恐れていた。

そんな人が来るのだとしたら、自分がいることで相手を不快にさせ
てしまう恐れがある。

そして何より、自分が居る意味や気持ちの置きどころが無くなつて
しまう、といふことが怖かつた。

「慧、あ…えーと…ハルの母親の従兄で、慧といふのと、その母
親で妙（たえ）さん。

俺たちから見るとおばさんなんだけど、『おばさん』って言われ
るの嫌みたいで、名前で呼んでるんだけど。

ふたりとも、普段から俺がお世話になつてる人たちなんだよ」

「そなんですか」

有衣は咄嗟に、清香さんと似ている、と母親の顔を思い浮かべて笑
つた。

そして、どうやら恐れていた祖父母は来ないらしい、と知り不謹慎
だと思いつつも、ほつとした。

「あの、おじいさまとかおばあさまとかは来られないんですね…？」

「俺のほうは、今親父がちょっと病氣してて、お袋も今年はやめて
おくつて。

ハルの母親のほうは、どちらももう「くなつててね。だから、今
年は誰も来ないんだ」

「そ、ですか…」

有衣は、直輝がずっと“晴基の母親”という表現を使うのに気がついていた。

直輝としては、何と言えばよいか迷つての末の言葉の選択だったのだが、有衣がそれを知るはずもない。

有衣には、その表現がどうしてか牽制に聞こえ、有衣は感情を押し殺すことを、更に課す必要性を感じた。

それでも、“妻”という表現を使われてしまっていたら、さつとちつと切なかつただろう。

そう思ふと、自分自身にすらコントロールできない気持ちが、疎ましくもあった。

あともう少しで園児の入場、という時に妙が到着し、数分遅れて慧が到着した。

妙は少しだけ驚いたように有衣を見つめ、それから笑顔で挨拶をした。

慧はとことん、何やら訳知り顔で有衣を見つめ、そしてこちらも笑顔で挨拶をした。

有衣はその視線にかなりの緊張と居心地の悪さを感じつつ、やはり笑顔で挨拶を返す。

なぜこんな風に、観察されるような視線が向けられたのか、その視線の意味を、有衣は知らない。

直輝は、唯が亡くなつた後、基本的に女性そのものを遠ざけてきた節がある。

整つた容姿、柔らかな性格、職業故の社会的地位だけを考えても、寄つてくる者は多いが、受け入れなかつた。

またハウスキー・パを雇つてはいたものの、決してビジネスのラインを越えて接したことはない。

マンションの外で会おうとしたことなど、これまでに一度もなかつた。

その直輝が、晴基の運動会に連れてきた女性、それも義理とはいえる親類に紹介した女性。

このことがどういう意味を持つのか、妙も慧もわかっている。わかつていなのは当事者の有衣だけ、という奇妙な事態になつていることに、直輝はまだ気づいていない。

4人はそれぞれの思いを抱いたが、園児の入場が始まると、晴基を見ようとすぐに気持ちを切り替えた。

30人ほどの小さな子どもたちが、小さな運動場の真ん中に立ち、保護者たちにお辞儀をすると拍手が沸く。

「あ、ハルくん」

一番最初に晴基を見つけたのは、有衣だつた。

こつそり手を振ると、晴基も有衣に気づいて満面の笑顔で手を振り返す。

晴基はこつそりのつもりだったようだが、かなりの大きな振りに、周囲の保護者からも笑いが起こつた。

一緒に注目を浴びて気まずく笑う有衣を、直輝、慧と妙も微笑ましく思う。

その後の競技は、まず1歳児のはいはい競争から始まり、2歳児のかけっこ、3歳児の障害物競争と進んだ。

晴基は、ゴール目前にある跳び箱で躊躇つたが、しかし諦めたり泣いたりせずにきちんとゴールした。

そんな姿に、大人4人は感心し、そしてどこか励まされたような気持ちになる。

それから、小さなポンポンを持つてのお遊戯の部に移り、直輝は撮影に忙しかつた。

そうしてあつという間に時間は過ぎ、お昼の休憩になる。有衣は、なんとなく4人でいることに気づまりを感じ、晴基を迎えて役を買って出て歩き出してしまう。

そんな有衣の後ろ姿を眺め、慧は怪訝そうに直輝に視線をやつた。

「なあ、もしかして、まだちゃんと付き合つてない…？」

「え？ ちゃんと…」

直輝は、そこではたと氣づいた。

以前のように一緒に過ごしたい、と言つて、有衣はそれを了承した。しかし、ふたりに何か特別な進展があつたわけではなく、むしろ感情的な繋がりは無いに等しい。

有衣との繋がりは、結局のところ晴基が間に入ることでしか保てていなかつた。

言葉を切つたまま黙り込んでしまつた直輝に、慧は脱力感を感じる。せつから代りまでして早退させたのに、あのときの半日が全く生かされなかつたということである。

一瞬、慧はあの日の出来事を思い出しあつになり、顰め面で頭を振つた。

今は自分のことを考へている場合ではない。

慧は、直輝の臆病な面や鈍感な面を知つてゐるつもりでいたが、まさかここまでとは思つていなかつた。

「おい、自分の気持ちも言つてないとかじやないだろうな？」

「え？」

「だから、好きだと、大切だと、……言つてないんだな」

こんな基本的なことを、今まで氣つかずについたことに、直輝は大きな衝撃を受けた。

固まつたまま反応を返さない直輝に、慧は大きな溜息をついて妙を見やつた。

ふたりのやり取りを聞いていた妙も、慧と目を合わせ、呆れたように直輝を見る。

「直輝くん。私たちに紹介するよりも、先にすることがあるでしょう…」

「どうりで、あの子ずっと気まずそうにしてたわけね。あーあ、か

わいそう…居心地悪いでしょうに」

「だいたい、あんまりもたついてると他に取られるぞ。あの子若いんだし、普通にかわいいし。

あ、あーあ、ほら… あそこ見てみる。さつやく若い男に声かけられちゃってるし」

妙の尤もな忠告と、慧の嬉しくない忠告に、直輝は自分の馬鹿さ加減が厭になる。

そして慧の指差す方向を見ると、晴基を迎えて行つたはずの有衣が、武先生と笑つて話しているのが見える。

その瞬間直輝は、腹の底のほうから、沸騰したような熱の塊が沸くのを感じた。

それは紛れもなく、嫉妬だった。

けれど、今の有衣とのあやふやな関係では、表現しようのない感情だとわかっている。

そんな事態を招いてしまつた自分自身に、直輝は言いようのない怒りを感じた。

「…迎えに、行つてくる」

押し殺した声で咳き、大股で歩き出した直輝に、慧と妙は顔を見合わせて苦笑を洩らした。

歩いていく直輝の背中に視線を戻し、妙はぽつりと聞く。

「慧、あんた知つてたの？」

「まあ、比較的最近に」

「そう…」

唯を自分の子供のように思つていた妙には、今日の対面は少々衝撃的でもあつた。

直輝の前でそれを出さなかつたのは、直輝のことも唯と同様に大切な存在だからだ。

それに実際、このまま直輝が独りでいるのも心苦しい。

直輝が唯をどれだけ大事にしてくれたかを、直接知つてているだけに尚更そうだった。

そんな妙の複雑な胸の内を思いやる慧は、少しだけ苦く笑う。

「焚きつけたのは俺なんだよ。…悪いけど」

「…誰も、悪く思つ必要なんて無いのよ。でもまあ、あの子があんまりにも若く見えて驚きはしたけど」

「ああ、若いね。…確かに、若い」

含み笑いをしながら言つた慧を、妙は訝しげに見た。

「幾つか知つてる?」

「…さあね」

これは多分知つてゐる、と妙は思つたが、口を割りそうになつて息子に溜息をついて諦めた。

対面後の動搖は、まだ妙の中で小ちく続いていた。

運動会です。

小さな子たちが動き回るのを想像しただけでかわいいです。
種目があやしいですが、運動会メインではないので許してください
ね^ ^ ;

直輝先走っちゃいました。

紹介する前にまず有衣に告れよー状態ですが。

慧と妙に突っ込まれましたので、次回かその次あたりでがんばるの
ではないかと思われます。

さて。

慧が直輝に代つて外来をしたあの日何があつたのか。
慧が有衣の年齢を知っているのはどうしてなのか。
気づかれた方、多いでしょうね^ ^ ;
こいつの話はいづれまた…。

晴基が園長先生と話しているのを見つけ有衣が声をかけようとしたところ、背中から声がかかる。

振り向くと、運動会仕様でジャージ姿の譲があり、有衣は思わずほつと息をつく。

譲とはあれ以来、ときどき学校の屋上で会って話したり相談したりする仲になっていた。

友情というよりは、晴基を軸にして、保護者と相談役のような関係で落ち着いている。

「来れてよかつたな」

「うん。みんなすごくかわいいし、見てて楽しい」

「そうだろ？」

子どもたちがかわいくて仕方がない、そんな顔で譲は笑い、つられて有衣も笑った。

「そういえば譲くん、午前中見なかつたね」

「ああ、俺は午前は中での歳児のお守。午後からは俺も出るよ」

「そつか。午後は大人の参加率高いもんね」

そんな会話を交わした後、譲は別のスタッフに呼ばれたため、手を振つて去つていく。

有衣は譲と顔を合わせて、少し落ち着いた気持ちになり、自然と顔の強張りも解けていた。

午前中は、園児たちの姿を見て勿論楽しんだが、直輝に近しい人と一緒にいるのは居心地が悪かったのだ。

良い人だというのは伝わってきたが、直輝の亡くなつた妻の親戚だと思うと、やはり気が重かつた。

何でもない会話を交わすことで、有衣の気分は晴れ、譲に心の中で感謝する。

有衣のすぐ後ろに近づいてきていた直輝は、軽い、いやかなりの衝撃を受けていた。

武先生と話す有衣の表情は多分今日見た中で最も明るく、声も弾んでいた。

自分の前ではいつも敬語の有衣が、“先生”にもかかわらず武先生を相手に、敬語を使わないと知った。

その態度には、自分の知らない有衣の“素”が表れていたような気がする。

そして、“譲くん”と呼ぶ声に親しみを感じて、直輝は田の奥が真っ赤に染まった気がした。

この感情は、現状では理不尽なものだ。

そうわかっているからこそ、直輝は余計に複雑な感情が渦巻くのを感じた。

その時だった。

「ゆいちゃん！」

大きな声で呼ばれ、小さな衝突の衝撃が有衣の足に走る。驚いて足元を見ると、晴基が有衣の足に抱きついていた。

「ハルくん…？」

「ゆいちゃんが、ママだもん。おべんとも、あるもん…」
つつかえつつかえの言葉に晴基の顔を覗きこむと、晴基は涙田になつていい。

晴基が人前で有衣のことを実際に口に出して“ママ”だと主張したのは、初めてのことだった。

人が勝手に誤解するか、あるいは有衣が単に“ママ”的に行動するだけで、今までは済んでいたからだ。

有衣が、晴基が話していた園長先生のほう田田を向けると、園長先生も有衣を困惑気を見ていた。

園長先生は、有衣が西岡家のハウスキーパであることを知っているのだ。

「あの……」

「いえ、あの… そうじゃ、ないんですけど」

有衣が慌てて、しどりもどりになりながら返事をしたとき、靴底が砂を踏む、じゅり、とこづ音が間近で聞こえた。はつと後ろを振り返ると、直輝が立っているのが見え、有衣は顔色を失くす。

晴基の声は大きかったし、この距離では、今の会話は聞かれてしまつただろう。

またこの間の晩の繰返しになる、と有衣は呟えた。

直輝も、晴基の声は聞こえていた。

以前に感じた恐れや怒りのような感情は無く、ただ有衣の反応が気になる。

しかし振り返った有衣が、直輝を認めた瞬間怯えの混じった表情を浮かべたのを見て、直輝は息が詰まった。

あの晚のできごとが、自分の言葉が、今でも有衣に圧し掛かつたままなのだと、気づかれる。

咄嗟に声を出せないと、園長先生が先に直輝に気づき、声をかける。

「ハルくんのお父さん、今日はお弁当はどうなさいます?」

聞かれて、初めて思いだした。

去年は、園が厚意で晴基のお弁当を用意してくれていたのだった。今年は有衣がいることもあり、すっかりそんなことも忘れてしまっていた。

それで、晴基の言葉の意味もわかる。

園長先生が晴基にお弁当の話をしたのだ。

有衣に“ママ”としてお弁当を作つてもらつたと思つてゐる晴基は、必死に反論した、ということだ。

内心苦笑しながら、有衣に抱きついたままの晴基の頭を撫でてやる。

「すみません。今日は用意してもらったのがあるんです」

「そうですか。それは、よかつたです」

優しげにそう言つと、園長先生は中に入つて行く。

心なしか体を縮めて立つてゐる有衣に、直輝は努めて柔らかい視線を向けた。

その穏やかさに有衣はいつたんほつとしたように見えたが、まだ完全に怯えと不安を拭い去れてはいない。

そんな顔をしなくて、いいのに。

直輝は、今すぐ有衣の不安や誤解を解きたくて、きちんと話しがしたいと思つたが、この状況では無理だ。

お昼の休憩時間もそれほど長いわけではないし、晴基にも食事をさせなくてはいけない。

直輝は、席に戻るために、有衣と晴基をそつと促した。

直輝の反応が予想に反していたため、有衣は安堵したが、やはり気分は優れなかつた。

けれど、晴基のために、そして何も知らない慧や妙のために、有衣はどうにか笑顔を作る。

席に戻ると、晴基はわくわくとした気持ちを隠せずにいた。

「おべんと！」

期待いっぱいの顔で有衣を見上げるそんな姿に、有衣の気持ちはほぐれ、ようやく作り笑顔を脱する。

晴基用に1人分の小さなお弁当と、大人用の大きなお弁当を作つてあつた。

晴基はそれを大事そうに抱えて受け取り、お弁当のふたを開けると、目をキラキラさせて喜ぶ。

「すごいね！ アンパンマン！ チーズもいるね！」

「うわ、初めて見た。キャラ弁」

はしゃぐ晴基のお弁当を覗きこんだ慧は、感心したように呟く。

晴基用は、アンパンマンのおにぎりとめいけんチーズの顔を描いた「ロッケ」がメインなのだ。

大人用も、キャラクタ物ではないが、それなりに工夫はしてあった。直輝も慧も、そして妙も、有衣の仕事に感心し、日々にお礼を言つ。有衣と妙はやがて、料理談義で盛り上がり、お互いが内心で感じていた気まずさもそのうち消えた。

その様子を、直輝と慧は意味ありげな視線を交わしつつも、ほつとしたように見守っていた。

午後の競技は、まず親子競争から始まる。
三輪車に乗った園児と、その三輪車を後ろから押して走る親の競争だ。

日頃の運動不足がたたり、足を巻きらせる親も少なくないが、実は大いに盛り上がる。

子どもの前で恰好つけたい気持ちや、親同士の密かな対抗心が大きくなるせいかもしれない。

直輝も例外ではなく、そんな姿を、有衣はいとしそうに見つめた。直輝の前では必死に覆い隠そうとしている気持ちは、直輝が遠くにいる今、籠が外れている。

そんな有衣の様子に、慧と妙が気づかないわけではなく、ふたりは余計に直輝の鈍さを感じて苦笑を漏らした。

その後、園児たちだけの玉入れを挟み、親だけの風船割り、親子参加の綱引きで競技が終わる。

最後にまた園児たちが中央に集まって、保護者に向けてお辞儀して運動会は締めくられた。

やがて皆が帰り始め、運動会を終えた充実感と、イベントが終わつた侘しさが漂う。

門のところには、お見送りで譲を含め先生たちが列になつて立つていた。

直輝の後ろを歩いていた有衣は、譲の顔を見た途端、昼のできごとを相談したくなってしまった。

有衣の表情で、何か言いたいことがあるらしいと察知した譲は、そつと列から外れて有衣の近くに寄る。

先に門を出て外からそんなふたりを見た直輝は、咄嗟に憮然とした表情になり、慧に見咎められ笑われた。

有衣は直輝のそんな様子に気づいていなかつたが、譲は直輝の視線に気づいていた。

常々有衣がここまで悩む必要は無いと思つていたが、それを確かめようと、必要以上に有衣に近づいてみる。

譲の思つた通り、先ほどよりもさらに強くなつた視線が痛い。

やつぱり両思いなんじゃないか、と内心苦笑しつつ、かわいそうなふたりのために協力してやる。

「大丈夫。絶対怒つてないと思つ。つか、素直に気持ち伝えたら、案外うまくいくかもよ」

「え？ でも」

「ほら、待つてるし、早く行つたほうがよくね？ ジヤ、今日はお疲れさん」

追い立てるように有衣を外に出し、譲は元の列に戻る。

これで多分今日の夜辺りにはうまくいくだろ？、と思うと譲は、ひな鳥を巣立たせたような妙な気分に浸つた。

晴基は運動会で疲れたのか夕食前から既に眠そつで、食べ終わるとすぐに眠り始めてしまつた。

有衣はまだ直輝とふたりで話す勇気が起じらず、晴基を抱いてベッドルームへ逃げた。

晴基を寝かせてあげ、しばらくそこで晴基を見つめながら、有衣は直輝のことを想う。

帰り道、そして家に帰つてからも、ずっと喋つていたのは晴基で、直輝はほとんど一言も喋らざついた。

表情は普通で、あからさまに不機嫌そつではなかつたのだが、何を思つているのかわからない。

有衣としては、昼間のでき」とのことが気がかりだった。

直輝は以前のようには反応しなかつたが、本当はどう思つてているのだろうか。

譲の言葉を思い出し、素直に気持ちを伝えるなんて自殺行為だ、やつぱり無理だと頭を振る。

一方で、譲は根拠もなくそんな言葉を言わないのではないか、と少し期待もしていた。

いずれにしろ、昼間のことについては多分直輝も話し合ひが必要だと思つているはずだ。

有衣は覚悟を決めて立ち上ると、ロビングへ通ずるドアノブを握った。

13（後書き）

なんとか、無事に運動会終了…。
キャラ弁なんて、作ったこと無いんですけど、書きたくて書いてちゃいました。

キャラクタ名を今まで出しちゃいましたが、大丈夫でしょうか…。
ちなみに、ほつぺたはにんじんです。
目はのりとチーズを使って、チーズの耳はウイーンナで。（チーズが
ややこしいな…）

さて、イベントでドキドキなことが起こる予定でいたのですが、
成り行き上、ハラハラなことが起きました。予定外… ^ ^ ;

直輝と有衣、双方覚悟が決まつたところで。
じれったかったふたりも次回、ついに告白します！

直輝はキツチンにいた。

土曜日のいつもの習慣で、ビールを飲んでいたのだが、緊張のせいか酔えなかつた。

後から一気に酔いが回る可能性を考えると、それ以上飲むのも気が引け、コーヒーを入れることにした。

有衣も、緊張しているようだつた。

多分、昼間のできごとについて気にしているのだろう。
眠った晴基を抱えて、逃げるようにベッドルームへ行つてしまつた。
有衣は、怖がつているようにも見えた。
しかし、何を？

「俺を、か」

昼間の直輝を見たときの表情が、直輝の目に焼き付いている。

あの晩、泣くのを我慢していた有衣の表情と、交互に直輝の脳裏に浮かんでは消える。

豆を挽きながらそんなことを考えていると、途中で刃に大きな豆が引っかかり、手に衝撃が走つた。

「痛え……」

手の痛みは、然程なかつた。

本当に痛みを訴えているのは、心だ。

慧や妙の言つとおり、まず自分の気持ちだけでも伝えなければならぬない。

受け入れられるかは別としても、今日こそ、現状を打破したい。
けれど、田を合わせたときに頬を染めて俯いた有衣に、少しだけ期待と樂觀することは忘れなかつた。

有衣がドアを開けた瞬間、ガリガリといつ音とが聞こえ、馴染みのある香りがした。

直輝はリビングにはおらず、キッチンで作業しているのが見えた。

有衣は慌ててキッチンに入り、直輝から作業を引き継いだ。

「あの、座つてください。私、やりますから」

「いいよいよ。俺やるし」

直輝の返答を待たずして有衣が手を伸ばしたため、直輝のそれと触れ合ってしまった。

「…っ」

お互いが息を詰め、体を強張らせ、手を引こうとしたため、コーヒーミルがぐらつく。

直輝がそれに気づいて手を伸ばしたが、間に合わなかつた。

「あ

意味のない音が口から出たが、どうしようもない。

台から落ちたミルは傾いて有衣の体にぶつかり、ほぼ挽き終わっていた豆の粉も宙を舞つた。

有衣はミルや豆の粉を床に落とさないよう、慌ててしゃがみ込んでエプロンの裾を広げた。

「…大丈夫？」

「だ、大丈夫、です。すみません…私が、無理に代わるうとしたか

ら

「いや、俺も、ごめんね」

直輝は謝りながら、有衣の膝の上からミルを取り上げ、台の上に置き直す。

そして、少し躊躇した後、有衣に手を伸ばした。

「粉、かかつちゃったね

「え？」

自分に伸びてくる直輝の手に、直輝の意図を理解した有衣は焦った。だが今エプロンから手を放してしまえば、せっかく落とさずにいた粉を、床にぶちまけてしまう。

どうしよう、どうしよう。

そもそもこんな事態になつたのだけ、直輝の手と触れてしまった

からではなかつたか。

こんな、この上直輝に触れられてしまつたら、どうにかなつてしまつで、怖い。

直輝の手が触れる直前、有衣は思わず目を瞑つてしまつた。

だがそんな甘い恐怖は、すぐに熱に取つて代わる。

直輝の手が、そつと有衣の髪や頬に触れて、付着した粉を少しづつ払つていく。

その触れ方は、優しくて、まるで愛されているかのように、錯覚してしまふほどだった。

有衣の心臓は、音が聞こえてしまつのではないか、と思つぼど脈打つていて。

それに気を取られていたせいで、有衣は直輝の言葉をほとんど聞いていなかつた。

「Hプロン、外すよ」

直輝は、有衣の髪を少し上げ、つなじで結んであるHプロンのひもを外そうとした。

ひもに触れた時、必然的に有衣の首筋にも触れることになり、直輝はぎくりとする。

何も考えていなかつたが、実際今の体勢はといえば、まるで直輝が有衣を抱き込んでいるようだつた。

有衣はおとなしくしているが、息を詰めているようだし、肩も強張つて見える。

直輝は、できるだけ自然に、と頭の中で念じながら素早くひもを外す。

しかし、結んではあるのは一か所だけではなく、腰にあると気づいて、直輝は迷つた。

この体勢のまま腰に手を伸ばせば、本当に抱きしめるような格好になる。

しかしづざわざ体勢を変えないと、かなりわざとらしくなるよつな氣

がする。

有衣が押さえている場所を直輝が代りに押されば済む話なのだが、直輝は頭が回つていなかつた。

結局同じ体勢のまま、密着を避けようつに右手を有衣の肩に置き、左手を伸ばして腰のひもを解く。

エプロンがするりと下に落ちると、有衣の手をエプロンから外して、シンクの上でエプロンをはたいた。

そして、床に散つたわずかな粉は、ふきんで拭いてきれいにする。直輝は冷静になるために有衣を見ないようにしていたのだが、有衣がずっと身動きしないので、心配になる。

「…有衣ちゃん？」

呼びかけにも、応答がない。

いよいよ心配になり、直輝はしゃがみ込んで有衣の顔を覗きこんだ。

有衣の頭の中は混乱していた。
エプロンを外す、と言われたような気はしたが、まさかあんな体勢になると思わなかつた。

指先だけでなく、体温まで感じてしまつ距離が、有衣の閾値を超えていた。

けれど、緊張していたのは自分だけだ、と思つ。

直輝は何も感じなかつたからこそ、普通に後片付けをしていたに違いない。

直輝に名前を呼ばれても、有衣は咄嗟に反応を返せなかつた。
覗きこまれる気配に、有衣はぱつと片手を直輝のほうへ突き出し、もう一方の手で自分の顔を覆う。

「何でも、ないです。ごめんなさい」
恥ずかしい。

多分、今顔は真つ赤になつている。

心なしか、目も潤んでいる気がする。

今、見られてしまつたら、自分の気持ちは直輝に筒抜けになる。

だから、見られたくなかった。

有衣の、拒絶と思えるその反応に、直輝は傷ついた。自分が悪いのは、わかっている。手ひどく傷つけられた男相手に、あんな風に近づかれたくないだろう。

豆を挽きながら考えていたことを、今度は口に出してみる。

「俺が……怖い？」

その問いかけを実際に言葉にしてしまつと、その意味は直輝の心に直接重く響いた。

それはそうだろうな。

またいつ怒られるか、またいつ傷つけられるか、わかつたもんじやないし。

昼間もあんな顔してたしな。

直輝は、心の中で思っていたその自答を、無意識に口に出していたことに気づいていなかつた。

俯いていた有衣は、聞こえてきた直輝の小さな咳きに睡然とした。直輝は、有衣が直輝自身を怖がつていると誤解している。しかも、その口調は、どこか傷ついているように聞こえた。自分が今どんな顔をしているのかも忘れ、有衣は顔を上げてきつぱりと言つ。

「それは、違います」

「え？」

驚いた直輝がこちらを向き、有衣はよつやく自分の顔を思い出して、また俯いた。

直輝には、顔を見られてしまった。

きっと、自分の気持ちも伝わつてしまつただろう。それならもう、隠す意味もない。

顔を俯けたまま、それでもほつせりと口に出す。

「直輝さんが、怖いんじゃ、ないです。怒られたり、傷つけられたり、そういうことじやなくして。

私が怖いのは……直輝さんに、嫌われる」と、です。怒らせられひたすらなことを、してしまつことです

いつたん口を開くと、あとは止まらなかつた。

「私は、直輝さんのことだが

「ストップ！」

「え……？」

好き、と言つたかった。

結果フラレるとしても、この際気持ちは伝えてしまつたかった。

やはり、それは許されないことなのかな、と有衣は落ち込みかけた。

有衣が何を言つてゐるのか、いかに鈍い直輝でもわかつてしまつた。

いやその前に、必死に覆つっていた顔を上げてくれたとき、「元気から伝わってきた。

必死に隠していたのは、自分の気持ちを隠しておきたかった、ということの表れだ。

だから、それだけは有衣に最初に言わせてはいけない気がした。

そうなつてしまえば、有衣はずつと負い目を感じてしまつよつた気がしたのだ。

思わず制止をかけた瞬間の有衣の表情が、かわいそつに思えたが、仕方ない。

「ごめん。俺に、先に言わせてほしいんだけど……」

「え？」

「……君が、今言おつとしたこと

「……え！？」

何を言われているかわからない、といつ怪訝そうな表情から一変、有衣は驚きに目を見開いて直輝を見つめる。

信用無いな、と直輝は苦笑しながら、ようやく自分の気持ちを言葉

にした。

「俺は、君のことが、好きだよ」

口にしてみて、本当に好きだ、という気持ちがじわじわと全身に広がる。

どうして今までこんな大事なことを言えずにいたのか、直輝は自身のことがわからなくなりかけた。

「あの晩のこと、俺は自分の願望だった、って説明したでしょう。君がハルの母親に代ること、つまり、俺のものになつてほしい、つて本当はずつと思つてたんだと思う。

最初から、俺は君のことが気にかかつていて、君と居るのが心地好かつた。

それなのに自分で認めるのが怖かつたんだ。そのせいで、傷つけたり、怖がらせたりして、悪かつた。

今日の晩、俺を見て怯えた顔したのがわかつて、本当に反省したよ。…許して、くれるかな？」

有衣の目に、涙が盛り上がるのが見えた。

許しの言葉はまだ得られていないが、有衣は拒否しないだろう。

直輝は有衣の頬を手で包み、目に親指を滑らせて涙を掬つた。

あの晩、直輝が“君”と言つた時、有衣の心は凍つた。

でも今、直輝が“君”と言つた時、有衣の心は温かくなつた。触れられている手から、直輝の温度が伝わってきて、有衣は心地好さに目を閉じる。

「直輝さんを許すとか、そういうことよりも…私も、謝りたいです。ハルくんのママになつてあげる、なんて直輝さんの知らないところで勝手に言つたこと、後悔してました。

…それから、私も、直輝さんのが、好きです

「うん。ありがとう…」

有衣の頬にあつた直輝の手が、肩へ背中へ下がり、有衣はそのまま直輝に抱き寄せられた。

温かい腕の中で、お互いの心音が溶け出して重なるのがわかり、直輝も有衣も幸せそうにほほ笑んだ。

14 (後書き)

お待たせいたしました。

ようやく本当の両思いに…！

ああ、長かったです^ ^；

しばらくは平穏な日々が続く、かもしませんが（…）。
まだお互いのことをほとんど知らないふたり。

問題は山積み、障害は壁のよう…？

これまでと変わらず、応援してやつてください^ ^

タクシーを降りても、有衣はまだどこかぼんやりとしていた。まだ、直輝とのことが現実ではないような、そんな感覚が続いている。

それでも、と有衣は思つ。

帰つてくるまでずっと見つめていた携帯に視線を戻すと、直輝のデータが映つている。

今までは、お互い携帯のデータを知らなかつたが、さきほど交換したのだ。

そのメモリが、確かに現実のでき」とだと証明している。じわり、と嬉しさがこみあげてくる。

家に向いていた体を、反対側に向け、みぢつの家に向かつた。

またしても、土曜の夜の有衣の訪問。

みぢりは、またあの男か！と心の中で悪態をつきながら、玄関へ向かう。

けれどみぢりの予想に反して、有衣は泣いてはいなかつた。むしろ、どこか夢を見ているような、そんな雰囲気すら漂つてゐる。

「どうしたの」

「じめんね、また夜遅くに来ちゃつて」

「それはいいけど。とりあえず上がつて」

有衣に先に部屋に行かせ、みぢりはとりあえず飲み物を用意しよう

とキッチンへ向かつた。

ベッドの端に座つて待つていた有衣は、ドアが開いた瞬間、コーヒーの香りが漂つたのに気づく。

みぢりがトレイにカップを2つ載せて、部屋に入つてくるのが見えた。

有衣は、その香りでわざわざの「」とを胸に出して、ひとつ赤面してしまう。

様子のおかしい有衣に、みどりは首を傾げた。

「みどり、じうじょ」

「…また、何かあったの」

「好き、だつて」

「え?」

「直輝さんが、私のこと、好きだつて」

その言葉にみどりは、よつやく有衣の様子がおかしい理由に納得する。

現実なに、信じきれない気持ちのほうが大きこらしこ。

みどりとじつは、じゅうかと言えば直輝のことはあまつよく思つていない。

有衣が前回のみづまた手ひびく傷つけられたのではないか、と心配でもある。

それでも、有衣の本気の想いを知つてゐるだけに、嬉しそうな有衣を祝福してやらないわけにはいかなかつた。

結局、有衣を幸せにできるのは、今のところ直輝だけなのだ、とみどりは自分を納得させる。

古典的だとは思つたが、現実だとわからせむと、みどりは有衣の頬をぐにっと左右に引っ張つてやつた。

「痛つ、痛い、痛いつて!」

「痛かるう。夢じゃない証拠だね」

「…ひどこよ。ちょっと信じられないだけじゃん」

「でも、よかつたじやん。両思い」

「うん。ありがとう」

「で? なんで、赤面してたのかなあ? 他に何があったの?」

興味津津のみどりの追及に、有衣は洗いやらしく白状させられる羽田に陥つた。

と言つても、コーヒーまみれの密着と、告白しあつた後の密着しか、

進展らしいものは無かつたのだが。

今まで恋愛ごとに疎い面のあつた有衣としては、それだけでも大照
れものだった。

みどりと話したことで、ようやく現実的に感じられるようになった
有衣は、ようやく家に帰った。

有衣が廊下を歩いていると、ちょうど清香がバスルームから出でく
るところだった。

「ただいま」

「遅かったわね」

「うん。帰りにみどりん家寄ってきた」

「どうだつたの、お弁当の評判は？」

「大好評！ ハルくんも直輝さんも、慧さんと妙さんも喜んでくれ
た」

おや、と清香は知らない名前に内心首を傾げた。

2人分にしては大きなお弁当を作つていると、朝不思議に思ったの
だが、どうやら誰かが来ていたらしい。
だが有衣の表情からすると、大変なことは無かつたのだろうと思えた。

「なんだか、嬉しそうな顔してるわね」

「え！？」

有衣は咄嗟に大きく反応し、手で頬を抑えたが、その後あからさま
にしまつた、という顔をした。

清香は、これは何があつたな、しかも西岡 直輝絡みで、と予想す
る。

「ちょっと、いらっしゃい」

清香のにつじりとした笑顔に、有衣は逆らえない。

笑顔の裏に、実は誰にも有無を言わせない凄味があるのだ。

結局、清香の追及にも有衣は堪えられず、関係が変化したことを白
状した。

但し、みどりには話せた密着の件は、清香に言つのは憚られたため、割愛する。

「基本的に、有衣がいいなら私はそれでいいわ。

まあ、年頃の娘を持つ親の気持ちは理解してほしいところね。これまで通り、外泊は許可制。遅くなるときは連絡すること。相手が年上だからって、流されないのよ」

「わかってる。ありがとう

案外あっさりと話が終わることに、有衣は少しだけ拍子抜けしたが、安堵もした。

あまりにも年上だから、何か言われるかとも思っていたのだ。話が終わると、もう休むと言つて部屋を出していく清香を見送りながら、有衣はほっと一息ついた。

自分の部屋に入り、バッグを下ろすと、中で携帯のライトが点滅しているのが見える。

青色のライトは、メール着信があつたときのものだ。もしかして、もしかして、と逸る気持ちのまま携帯を慌てて取り出す。

『無事に、着いたかな?』

目に飛び込んできた、直輝からのメール。

よく見ると、1時間ほど前に受信していた。

みどりのところにいて、まったく気づいていなかつたのだ。

『すみません。帰りに向かいの幼馴染みのところに寄つて、遅くなりました。さきほど無事帰りました』

慌てて返信する。

初メールにしては、ちょっと色気が無さ過ぎる、と苦笑していると、すぐにまたメールが来る。

『それならよかつたよ。遅かったから、ちょっと心配した。その幼馴染みつて、もしかして“みどり”ちゃん?』

なんで、知っているのだろう、と一瞬思い、それからすぐに出

した。

あの晩、といふか深夜に、みどりが携帯に電話をかけまくっていたのだった。

『そうです。その節は深夜に迷惑電話をかけていたよつで、すみませんでしたへへ・』

『俺、挨拶に行つたほうがいいかな。菓子折り持つてそんな、くだらないと言つていい話が続いた。

メールを繰り返していると、今までになく親密になつていく気がして、有衣は嬉しかった。

少しでも途切れさせたくなくて、人生で初めて、お風呂場にまで携帯を持ち込んでしまつた。

『明日は、どんな予定?』

『特には予定入れてません。直輝さんは、何する予定ですか?』

『そろそろ衣替えしようかな、と思つてるとひな』

『あの、もしよかつたら、手伝いに行きましょうか?』

『実は、そう言つてくれるかな、と思つて言つてみたんだ。来てくれる?』

『行きます』

『じゃあ、衣替えはまたにする』

『ええ?』

『日曜にも会えたらいいな、つて思つただけなんだよ遠まわしだった誘い文句の割に、ストレートな最後の文章に、有衣の体温は一気に上がる。

日曜にも、いつでも、会いたいと思つてくれているのだとわかつて、嬉しかつた。

これ以上お風呂にいるままメールを続けていたら、のぼせてしまいそうだ、と有衣は手早く上がる。

部屋に戻つて、眠る直前までメールは続いた。

『じゃあ、おやすみ』

『おやすみなさい』

その挨拶だけのメールも、温かくて、有衣はディスプレイを見てほほ笑んだ。

週明け、有衣は譲に報告するために、昼休みの終わり、廊下に向かつた。

「うまくいっただろ？」

顔を見るなりそう言った譲に、有衣は驚きつつも苦笑した。結局、帰りに譲が言った通り、素直に気持ちを伝えようとしたら、うまくいったのだ。

「どうして、わかったの」

「ええ？ だつてさ、ハルパパの俺を見る目がわ」

「目？」

「ジエラシー」

「じえ、…嘘」

「ほんとだよ。俺がちょっと近づいただけで、目力倍

「目力って…」

相変わらず、譲と話していると少しだけ力が抜ける。それにして、どうして自分ではわからないことを、他人のほうがよく見ているのだろう。

直輝への気持ちも、まずみどりや清香さんに指摘されたのだ。

そして譲に言わなければ、直輝の気持ちを知ることもできなかつたに違いない。

恋をするというのは、意外と難しいものだ、と有衣は思った。

携帯がくぐもった音を立ててポケットで鳴り、有衣は慌ててスカートのポケットからストラップを引っ張りだす。

『もう休憩入ってるかな？ 俺はこれから』

直輝との、何でもないメールのやりとりが、既に有衣の日常に加わっている。

譲は、嬉しそうに返信する有衣を横目で見やつてこいつそりと溜息をついた。

「いいねえ、楽しそうで」

「何、その年寄りみたいな言い方……」

「俺も彼女欲しい」

「ごめんね、先に幸せになつて」

「うわ、何気にむかつくんですけど。誰のおかげだよー。

つーかさ、あんた絶対性格違う。俺の前と、ハルとハルパパの前と、絶対違つから

「そうかな。……そうかも。年の差とかあるし。それに、愛の差?」

「あーはいはいはい」

浮かれている、と有衣は自分でも思う。こんな軽口は、譲の前といえども以前の有衣であればほとんどの通りしなかつた。

そんな自分自身の変化は、有衣の中に少しの戸惑いを感じさせつつも、どこか悪い気はしない。

覚え始めたばかりの両思いの恋は、今の有衣にとってはただただ楽しいものだった。

15（後書き）

付き合い始めの、バカップルです。

お風呂まで携帯持ち込んでメールとか、やりましたねえ…（遠い田）
。

それでたまに湿気で携帯壊れたりとかへへ；

まあ、何はともあれそんなラブな日常に突入した直輝と有衣です。
書きながらちょっとと思ったのは…、清香さんの対応は妥当なのか、
ということ。
親の立場からすると、どうなのかなーと思いつつ、応援してくれる
ほうがいいなあ、と思つて書いちやいました。

むづひよつと、平穏ライフは続く予定です。

最後の患者を見送り、直輝は座つたまま両腕を斜め後ろに大きく伸ばす。

今日はこの後カンファレンスもへつていなし、いつもより少しだけ早く帰れそうだ。

直輝は、いそいそと引き出しから電源の入つていない携帯を取り出すと、立ちあがつて出て行こうとした。

が、またしても冷氣を纏つた白井が立つている。

「…今日は、ミスは無かつた、と思うんだけど」

年下の看護士に言つた言葉としては、かなり情けないと思つたが、如何せん相手は白井である。

強気に出たところで、口で敵えるとも思えない。

「大有りです。しかも今日だけじゃないですよ。…その顔！」

「え、顔？」

「ずーっと笑顔、つてどつなんですか。病状聞く時くらこマジメな顔してください」

「あ、ごめんね」

「だから毎回、私に謝られても…。いえですから、先生先週からまた変ですよね。

なんていうか、以前のウキウキ具合の比じやないです。むしろ逆に怖いぐらいなんんですけど」

「そうかな？ 実はね」

「あ、お話は結構ですよ。これ以上顔が戻らなくなると困りますから。じゃ、お疲れ様です」

言いたいことだけ言つて、さつと身を翻して歩き出した白井に、直輝は開きかけていた口を斜めに歪めた。

実を言つと、直輝は白井に有衣のことについてかなり話してしまった。

たかった。

特に意味はなく、ただ単に話してみたかった。

正直なところ、直輝には気が置けない友人が少ない、というよりも現在ほぼいないに等しい。

と言つても、直輝の人柄に問題があるというわけではなく、成り行き上そうなつてしまつただけのことである。

学生時代は、唯と慧に加え、サークルの仲間たちも周りにいた。しかし卒業後大学病院に勤めるようになつてからは、医局内での摩擦に疲弊し、友人関係を諦めた。

そこで、直輝のすぐ近くの友人といえば、また唯と慧のみとなつた。そのうち唯と結婚した後は、慧は親族となつたため、友人と呼べる関係の人間はいなくなつてしまつたのだ。

その上、唯が体調を崩した後は唯と晴基にかかりきりになり、たとえ望まれても付き合えなくなつた。

だから今のところ、有衣のことについて話せたのは、つまり慧だけなのだ。

悲しいかな上下関係が成り立つていらない白井になら、友人とまではいかなくても話せそうな気がしたのだが。

ばっさり斬られてしまった。

直輝は、ここまで浮かれている自分が、自分自身でも確かに相當に意外ではあつた。

唯を亡くした後凍結していた感情が、有衣によつて融かされたその反動は、思ったより大きいらしい。

そもそも顔がミスだ、という白井の言葉を思い出し、直輝は自分の頬を両手で擦つてみる。

だが効果はそれほど無く、表情は浮かれたまま、直輝の足はロッカールームへと急いだ。

急いで外へ出ると、ようやく携帯の電源を入れる。

午前中はかなり患者が多く、昼の休憩はほとんど無いに等しかつた。

おかげで今日は病院に入つてから一度も電源を入れられなかつた。いつもなら休憩時にメールのやり取りができるのだが、そういうわけで今日はまだ有衣のメールを見ていない。

送ってくれていることが前提なんて、傲慢だろうか。一瞬そう思つたが、溜まつていたメールがすぐに受信を始め、そんな思いはすぐに消えた。

『お昼休みです。屋上でお弁当です。直輝さんも屋上でしよう?』建物の中は携帯の電源を入れられないため、直輝は最近ずっと屋上で休憩時間を過ごしている。

肌寒くなつてきたから無理しないでもいい、と有衣は言つがそうではなく、直輝が我慢できないのだ。

メールのやり取りが日常に組み込まれた今、空いている時間ができると携帯をいじりたくなる。

だから、どうせ電源は入れられないにも関わらず、デスクの中に閉まっておくのだ。

いちいちロッカールームに行かずには済むようこそ、空いた時間にすぐに持つて外に行けるように。

しかし直輝が屋上に出るのを止めないと知ると、今度は有衣までもが屋上に出るようになつてしまつた。

なんとなく同じことをしていると嬉しいから、と言われた時には思わずむぎゅっと抱きしめずにいられなかつた。

ああ、思い出しだけで顔が緩む。

白井がここにいたら、先週からずっと緩みっぱなしです、とか冷たく言われるに違ひない。

冷たい視線を思い出して身を竦め、直輝は次のメールを開く。

『直輝さん、忙しいみたいですね。今日は空がキレイですよ』

今度のメールには添付ファイルがあり、開いてみると有衣が撮つたらしい空の画像だった。

雲のほとんどない、真っ青な空だ。

外出られないと思つて、送ってくれたらしい。

とうに日は暮れ、ネオンの光が煌々とする時間に、昼間の空を見られるとは思わなかつた。

有衣はやはり、心をあたたかくほつとさせるのに長けている。

『あー やつと一日終わりましたあ。これから一度帰つて、ハルくんを迎えに行きます』

直輝はここで、おやと思つた。

直輝の知らない有衣の別の生活が、垣間見えたような気がしたからだ。

今日は直輝からの返信が無かつたため、有衣が好きな内容で一方的にメールを送つてきている。

そのせいか、今まで送つて来たことの無い、このような行動パターンを送つてきらしい。

直輝ははたと、有衣が日中何をしていて夕方にやつと終わつたのか、どこへ帰るのか、知らないことに気づく。

そういうえば、有衣は直輝のことを家の中まで知つてゐるが、直輝は有衣のことを持んど知らない。

それどころか、知らないことのほうが圧倒的に多い、と気づいて直輝はしばらく立ち竦んでしまつた。

「大丈夫か？」

急に後ろから声をかけられ、直輝が驚いて顔を上げると、慧が立つてゐる。

「いつから…」

「いや、さつきから。携帯見ながら互面相やつてるからビリしたものかと」

見られていたと思うと、直輝は軽く狼狽する。

慧も妙も、有衣のことで何かとアドバイスをくれるが、まだ完全に遠慮が抜けきつたわけではなかつた。

有衣からのメールだと言つたわけではないが、慧のことだ、気づいているに違ひない。

「また何かあつたのか」

「いや…」

「…遠慮は抜きでな」

慧の、念を押すような声色に、直輝は苦笑した。

やはり、何もかも見通されているようだ、慧には隠し事は通用しない、と改めて思つ。

「特に、何があつたわけじゃないんだ。

ただまあ、気づいてみると、あの子のこと全然知らない自分がいて、ちょっとと考え物だなど」「たとえば?」

「昼間何やつてゐるのか、とか。家はどこか、とか。そういうこと」

「昼間、つて……」

慧は口の中で小さく呟いたが、すぐに言葉を切つた。

呟いた声は小さすぎて、直輝の耳には届かなかつたよつだ。

慧は、その事実に安堵する。

直輝が知らないことを、自分が知つているところと氣取られてはならない。

それにして、と慧は内心で大きな溜息をつく。

直輝は、本当に何も知らないらしい。

今のふたりは完全に、想いだけが先行していいる関係になつてしまつている、ということだ。

この分では、当然有衣も知らないことが多いのではないか、と慧は心配になる。

「ひとつ聞いてもいいか」

「何だ?」

「あの子は、名前のこと知つてゐるのか」

「名前?」

直輝は、まさかと内心さくらうとしたが、平静を装つふりをして鸚鵡返しに聞いた。

晴基の運動会の時、慧と妙に対し、直輝は有衣のことをただ“川名

さん”とだけ紹介していた。

自分が最初に受けた衝撃を覚えていたので、特に妙を気遣つて名前をわざと言わなかつた。

それにつけてか晴基も、あの口はこのままの“ゆこちゃん”といつ呼び名を使わなかつた。

恐らくあの日は、“ママになつてもうひつ口”だつたからだと、直輝は予想している。

直輝自身も、名前を呼ばないよう注意もしていた。

だから、慧が有衣の名前を聞いていたとは思えなかつたのだが。

「…誰と、同じ名前だつてことを、知つてゐるのか」

「どうして…、お前は知つてゐるんだ」

「質問を質問で返すなよ。…俺は、あなんだ、成り行き上な。それで、どうなんだ?」

「俺は言つていないから、知らないはずだ」「もし知つたら、どうなると思つ?」

「どうつて…」

多分、自分が感じたのと回りよつたショックを受けるだらう、とは思つた。

だが慧がここまでして聞いてくる意図が、正直よくわからない。

「同じ名前だから付き合つた、と思われる可能性は考えたのか

「俺はそんなんじや」

「お前はそうだとしても。女はそういうの過敏だろ」

直輝は、何も言い返せなかつた。

よく考えれば十分にあり得る話なのだが、そんなことは、深く考えたことが無かつた。

黙り込んだ直輝に、慧は思ひやるような視線を向ける。

「こずれにしる、お前たちはもう少しにらみ話を合つたほうが多い。

あの子にしる、お前にしる、思つてもいなかつたことを思つてもよらない時に知るのは、よくないだろ?」

「… そうだな」

「ま、追々がんばれよ」

慧は、直輝の肩を軽く叩くと駐車場へ向かって歩き出した。

直輝はしばらく放心していたが、携帯に田を戻して残りのメールを読むと、肩の力が抜ける。

『今日の夕食は、ふわとろお好み焼きです！ 早く帰ってきてくださいね^ ^』

今度は晴基が口の周りを汚しながらおしゃつに頬張っている画像が添付されている。

直輝は思わず笑みをこぼし、慧の言葉を胸の隅に無理矢理しまい込み、タクシープールへ歩き出した。

直輝もかなりの浮かれようですへへ；
ちなみに病院支給のPHSは、Eメール機能は付いていないため、
業務中の有衣とのメールのやり取りはできないのです。
多分真冬になつても屋上に行くと思われます（笑）。

しかし、今のところ直輝よりも情報を持つていてる慧は心配そう。。
確かにこのふたり、いつも一緒にいる割にお互いのこと知らなすぎ
なのです。

今後、その辺りを書いていきたいと思います。

有衣は走っていた。

もう日も落ちて、辺りはかなり暗くなっている。

いつも晴基を迎えて行く時間よりも、1時間ほど遅い。

ようやく門にたどり着きボタンを押すと、譲ののんきな声が聞こえた。

「遅かったねえ。今連れて行くよ」

学校を出でぐるとき、譲の姿を見かけていたから、譲も有衣を見たのだろう。

ここよりも有衣の家のほうが学校からかなり近いのだが、家からここまで距離と合わせればそう変わらない。

しかも制服を着替えた時間分口スした、と有衣は着替えてから来たことを後悔した。

今、有衣の学校は学園祭前の準備でかなり忙しくなっている。有衣のクラスは、俗に言つて“コスプレ喫茶”をすることになつた。

と言つても、風紀にあまり緩くない学校であるため、きわどいものは無い。

スクール系の服、メイド服、ナース服、和服といった露出の少ない無難なものでまとめられている。

低予算のため、着る服は自分たちで用意する、という無茶な要求が出されており、放課後が忙しい。

和服は親に、学ランは男子に、ブレザー系の制服は他校生に借りれば済む。

だが他の服は有衣を含めた裁縫の得意な女子たちで、田下制作中なのである。

「有衣ちゃん？」

かなり近くで直輝に名前を呼ばれ、有衣ははつと意識を戻した。

同時に、肉の焦げ付いたにおいが鼻をつき、顔を顰める。

「う、わっ！　す、すみません！」

慌てて火を止め、フライパンをコンロから下ろす。

煙すら立てているフライパンの中身　元はハンバーグだった　は、底に接していた面が黒く焦げ付いていた。

「あ、ああ…」

意味もなく、情けない声が有衣の口から出していく。

挽き肉は使いきってしまったため、タネはもう無いのだ、どうしようもない。

毎日使うものだけを買つたため、冷蔵庫にも野菜はあるがメインとなる食材は無いに等しい。

何が代りに作れるだろうか、と有衣は考えたが、何もなさそうだという結論に達してうなだれる。

有衣のあまりにも情けなさそうな顔に、直輝は思わず軽く吹き出してしまつ。

「大丈夫だよ。上半分は食べられそうだし」

「すみません…」

有衣はなんとか上半分を切つて盛り付けると、その後はフライパンの後処理に奮闘した。

半分だけのハンバーグを食べながら、有衣はどうも、かなり疲れているらしい、と直輝は思った。

有衣がぼーっとするところは今までにあまり見たことがなかつたし、家事で失敗したのも初めて見た。

毎晩遅くまで拘束していることを自覚してはいるため、じつそり溜息をつく。

とりあえず、今晚だけでも少し早めに帰してあげたほうがよさそうだ。

そう思いながら、今晚だけが、と自分でシッ パリをしつつ、本当に溺れているようだと我ながら苦く笑う。

食べ終わった頃、フライパンをきれいにし終えたらしい有衣が、テーブルに近づいてお茶を入れてくれた。

「なんだか、疲れてるみたいだね」

「あ、ちょっとだけ…。今日の夕食はほんと、ごめんなさい」

「それはいいから。今日は、ちょっと早めに帰つて、ゆっくり休んだほうがいい」

「え…」

途端に、有衣の顔は不安げな表情を浮かべる。

それを見て直輝は、今の言い方は早く帰つて欲しい」と呟つたようではじめに、と焦つた。

そつと有衣の腕を掴み、直輝は膝の上に有衣を座らせた。

「ほんとは、帰つてほしくないけどね。疲れてるようだから、心配なんだよ。…わかる?」

言ひ聞かせるよひこむつと書ひと、有衣はよひやく頭を縦に振る。

腕の中の有衣はおとなしい。

有衣はいつもこうだ。

ほんの少しの接触でも照れたように頬を染め、口数が極端に減る。緊張がこちらまで伝わるのだが、それでも嫌がつてゐるわけではなく、おとなしくされるがままにする。

もしかすると、恋愛経験が極端に少ないのかもしれない、と思つ。タクシーを呼んで待つてゐる間、直輝は有衣に小さなキスを繰り返していた。

そして時間が来ると、玄関まで手をつけないで歩き、最後にひとつキスをして、別れる。

ドアが閉まるとき、直輝は腕の中の軽い喪失感に溜息を漏らした。

タクシーの中で、有衣はまだ熱い頬を押さえていた。

まだ、直輝の感触が残っているような気がして、動悸が納まらない。触れられるのは、もちろん嫌ではない。

ただ、まだ慣れていないだけだ。

今まで過ごしていった直輝との穏やかな時間に、少しだけ恋人としての時間が加わったことに。

それでも、嬉しくて満ち足りた気持ちになるのは間違いない。

家に着くまでの間、有衣はぼんやりと直輝とのことを頭の中で反芻した。

翌日も、有衣は忙しさに追われ、気づいた時には既に外は暗くなっていた。

時計を見ると、あと数分で6時半になるところで、昨日より遅い、と有衣はぎょっとする。

今手がけていたものは、あともう少しで完成するのだが、晴基をこれ以上待たせるわけにはいかない。

有衣は作業をそこで切り上げ、急いで帰り支度をした。

「ごめん、先帰るね」

「んー明日ねー」

作業中の子たちは、顔を上げず挨拶だけくれる。その脇を走り抜け、昇降口まで駆け下りて行った。

今日は、もう着替えに戻る時間も無い。

有衣は清香さんに連絡メールを打つと、大きな荷物を抱えたまま、いつもとは別の方向へ駆け出した。

「あれ、制服だ」

晴基を連れて出てきた譲が、驚いたように言つ。

譲はといえば、とうに着替えたようで、いつもの“武先生スタイル”になつている。

「遅くなっちゃって。直接来たの

「あーなんか大変らしいって聞いた。自分たちで衣装作ってんだってね」

「しばらく遅くなっちゃいそ」

「まあ、うちは大丈夫だけ。ハルは寂しいよな

「ゆいちゃん、おそいの」

「じめんね。できるだけ、急いでくるからね」

晴基は、うん、と頷きながらも、繋いでいないほうの手でスカートをぎゅっと握っている。

かわいそうになってしまい、空いている手で頭を撫でてあげた。

「やっぱ、変な感じ」

「え? 何が?」

「学校で会うときは普通だけど。制服着てハルママしてんの、ちょっと違和感

「…変?」

「いや、慣れないだけ」

「ゆいちゃん、かわいいおよひふくだね」

「あつ!」

有衣はかわいく褒めてくれた晴基に頬笑み、焦ったよひに声を上げた讓をじろりと睨みつけた。

また例のイロゴトレクチャーをしてくれたらしく。

今度は多分、女の子が新しい服を着てきいたら何たら、とこうものに違いない。

だから晴基は、見たことの無い制服を見て、かわいいと笑ったのだ。

「讓くんさ、ハルくんに変なこと教えるのやめてよね

「別に変な」とじやねえつて

「おとこの、た、たいなみ!」

「嗜み」

「たし、なみ」

「ちょっと! 保育園で教える」とじやないでしょ、それ

「あのね、たけせんせいは、ものしこなんだよ

慌てる有衣の脇で、晴基は譲を尊敬のまなざしで見上げている。こりやダメだと有衣は諦め、譲に手を振ると、晴基の手を引いて歩き出した。

そういえば、制服で来たのは初めてだ。

晴基が見たことが無いのだから、つまり直輝も見たことが無いということだ。

そう考えると、有衣はなんとなく恥ずかしいような気がする。

そして、いつも来るスーパーの入口に来て、入るのうとしたが躊躇してしまった。

ここでは晴基と有衣は親子として誤った認識が定着している。

そんな場所に制服で入つてしまつたら、変に思われるだろ？か、と急に心配になつたのだ。

「ゆいちゃん？」

「あ、何でも無いよ。行こうか」

思いきつて入ると、いつもと時間帯が違つせいか、いつもの店員はいなかつた。

思わずほつとした自分に気づき、有衣は慌てる。

結局のところ、心の中の願望は、変わつていないのでとわかつてしまつたからだ。

何とか頭の中から振り払おうと、有衣はいつも以上にしてきぱきと買い物した。

玄関に入つた直輝は、見慣れない靴に首を傾げた。

今まで有衣が履いていたのは、ブーツやスニーカなど多かつたのだが、今日はローファーが置いてある。

ローファーなんて、周囲で見なくなつて久しい。

もしかするとローファーを履くファッショング、今頃流行つているのかも知れないし。

もともと世間に疎くなつてゐる自分にはよくわからない、と直輝が

軽く笑つたとき有衣の気配がした。

「おかえりなさい」

「ただい、ま……」

顔を上げて言いかけた言葉は、途中でいつたん途切れ、不自然な間が入つてしまつた。

呆気に取られ、身動きできないまま有衣に鞄を引き受けられる。

「お風呂準備できますよ」

「あ、…ありがとう」

いつものように柔らかな笑顔をくれてから、有衣はリビングのほうへ歩き出した。

強烈な違和感。

直輝は、無意識に後ずさりして、背中をドアにぶつけた。もう一度、ローファーに田を向ける。

「制、服…」

目にしたもののが信じられず、直輝は一瞬、“コスプレ”といつ言葉を思い浮かべた。

しかし結局、ひどい現実逃避だ、と頭を振る。目にしたものは、確かに現実だ。

薄いクリーム色の生地に紺の襟、白いライン、紺のリボンタイ、濃紺のボックススカート、紺のハイソックス。

そして、中襟にあつた校章とポケットについていた名札が証明していた。

有衣は、高校生だ。

その事実に、直輝は思わず両手をきつく握り、右手を口に当て、呻くように息を吐き出す。

しまい込んであつた慧の言葉が甦り、頭の中何度も響いていた。

17（後書き）

直輝、ショッキング！

というわけで、新たな問題発生です。

直輝は一応、常識人なので、これは意外と衝撃大だと思われます。まさか高校生相手に恋愛をしていたとは思わなかつたんですね。

前半のあまあま具合から、急激に暗雲が立ち込めました。

またまた波紋（？）の展開へ突入です！

いざ（楽しんでいる私… ^ ^ ;）

入浴すれば少しは頭もすつきりするかと思つたが、期待していたほど効果は得られなかつた。

相変わらず慧に言われていた言葉が、直輝の頭の中を行き廻つている。

しかもダイニングからキッチンはよく見えるし、中で働く有衣のこともよく見える。

セーラー服の上のエプロンが、アンバランスで目の毒だ。
直輝は慌てて皿を逸らし、皿の前の食事を早く終わらせようと集中することにする。

いつもは食べているときテーブルと一緒につくが、今日はキッチンで何かやっておきたいことがあるらしい。

今日の有衣は、忙しそうにキッチンの中で動き回つている。
習慣から外れほんの少しの物足りなさを感じつつも、今日に限つて言えば、直輝は助かつたと思う。

まだ、頭が混乱している。

有衣が、高校生だということなど、知らなかつたのだ。
確かに、自分よりもずいぶん若いとは思つていた。

少なくとも5歳以上は年下だとも思つていたが、社会人だと思つていた。

高校生が派遣会社を通して、しかもハウスキー・ピングに来ることなど、一般的見地からしてもあり得ない。

そこで直輝は、慧が有衣の名前について知つていたことを唐突に思い出した。

成り行き上知つた、とは言つていたが、その成り行きとは何だつたのだろう。

慧の口振りからして、知つているのは名前だけではなさそうだ。

あの時言つていた“思つてもいないこと”とは、年齢のことだった

に違いない。

だから直輝に、もう少し話し合いが必要だ、と促したのだ。
直輝はテーブルに両肘をつき、両手で皿のあたりを覆つて溜息を吐きだした。

有衣は、キッチンの中から直輝の様子を時折盗み見ていた。
今日の直輝は、帰ってきたときから少しおかしい。

有衣を見たとき、直輝が硬直し、その目が少しだけ泳いだのを、有衣は気づいていた。

なんとなく不安が有衣を襲つたが、気づかないふりをして鞄を受け取りリビングへ歩いたのだ。

有衣がキッチンへ入つてしまはらく経つてからようやく、直輝がバスルームへ向かう音がした。

そして食事を食べ始めても、途中で何度もぱーっとし、また食べ始める、その繰り返しだ。

食べ終わつた今は、完全に頭を抱えてしまつたかのような姿勢になつていた。

病院で何かあつたのか、それとも知らないうちに自分が何かしてしまつたのか、よくわからない。

とりあえず疲れているだけかもしれない、といづ可能性を考えたが、それも自信は無かつた。

器が置かれる音とあたたかな温度が伝わり、直輝は顔を上げる。
テーブルの上には、いつもの緑茶ではなくティーカップに入つた紅茶が置かれていた。

視線を上げ、有衣の顔を見るとどこか心配そうな表情だった。

「あの、なんだか疲れてるようになつて見えたので…」

「紅茶？」

「ちょっとだけリング酢とはちみつ入れたので。疲れが取れるかな、つて思つて」

いつもと変わらない有衣の優しさが、直輝を包み込む。

カップに口をつけると、ほんのりまつたりとした味わいが、温かさと一緒に全身に沁み込んだ。

「ありがとう」「

お礼を言つと、有衣は嬉しそうにふわりと笑った。

かわいい。触れたい。抱きしめたい。

直輝の中に、そんな想いがざわざわと駆け巡る。

だが今日は、田の前にある制服が恐ろしい抑制力となり、それを行動に移すことはできなかつた。

帰りのタクシーを待つ間、直輝と有衣はソファで隣り合つて座る。いつもは少なからずあるスキンシップも、今日は直輝が仕掛けないために、何も無い。

有衣は何か言いたそうな表情を一瞬したが、それでも隣に座つていることで満足しているようだつた。

直輝は、有衣のスカートをちらりと見てから、重い口をなんとか開く。

「何年生?」

「え? 3年ですよ?」

「そう……」

有衣は、今さら何を、というような、質問自体を不思議なものと感じたような顔をした。

直輝はその意識の違いに、曖昧な笑顔を浮かべる他ない。

どうしたものか、と思い悩むうちに、ふたりの間には沈黙が落ちる。直輝が疲れていると思っているため、直輝の口数が少なくて、有衣もあまり話そとしなかつた。

やがて時間が来ると、直輝は有衣を見送るために立ち上がる。

だが、有衣がいつものように手を繋ぐのを待つてゐる気配に、直輝は内心頭を抱えた。

リビングから玄関までの、短い距離だ。

しかし、今の直輝にとつては、とても短いとは思えない。

それでもそうしなければ、直輝の考えていることなど何も知らない有衣を傷つけてしまうだろう。

有衣を傷つけないために妥協した直輝は、有衣の手を取つて玄関へ向かう。

そして、玄関に到着した直輝は、別れの挨拶代りにこれまでしていたことに気づき愕然とした。

視線は自然と、有衣の唇へ落ちる。

有衣もうつすらと頬を染めて、まるで儀式のようにキスを待つている。

顔を近づけると、有衣はきゅっと目を閉じた。

その瞬間、直輝の脳裏に“淫行”の文字が鮮明に浮かび上がり、直輝はぎくっと硬直した。

そして目をきゅっと瞑り、観念したように、有衣の唇ではなく額に軽くキスをする。

繋いだままの手が、異常に汗ばんでいるような気がして、直輝は気が気でない。

いつもと違う突然の額へのキスに、有衣は一瞬拍子抜けしたような顔をした。

そしてそれから、それを恥じらいつつ笑い、額を手で押さえる。

「あの、おやすみなさい…」

「うん。おやすみ。気をつけて…」

名残惜しげに手を離し、有衣はドアの向こうに消えた。

ドアが閉まると、直輝は壁に背を当てながらずるずるとしゃがみ込んだ。

直輝を襲つたのは、もつと触れたいという強い衝動と、そしてそれを遙かに上回るひどい罪悪感だった。

恋愛経験が少ない、どころではない。

有衣は、完全に初めてなのだ、と直輝は確信した。

額にキスした後の反応が、その確信と相まって、直輝にさうに罪悪感を抱かせる。

有衣が物足りなさを感じたのは、自分が教え込んだせいだ。付き合い始めてからの数週間で、もう何度キスをしたか知れない。その度に腕の中でおとなしくキスを受けていた有衣の表情を思い出し、直輝は眩暈がした。

三十の男が、高校生相手にすることではない。だがそれでも、触れてしまいたい。

衝動と理性の凄まじい闘いに疲れ、直輝はしばらく立ち上がることができなかつた。

ベッドに入つても、有衣はなかなか寝付けなかつた。今日の直輝は、やはりどこかおかしかつた。

口数は極端に少なく、ほとんど全くと言つていいほど、言葉を発さなかつた。

それに、手を繋ぐのを一瞬躊躇つていたようにも見えた。しかも、キスも無かつた。

そこまで考えて、無意識のうちに指で唇をなぞつていた有衣は、一気に頭に血が上つてしまつ。

誰も見ていないのに急に恥ずかしくなり、体をうつ伏せて枕に顔を突つ伏した。

恥ずかしい、恥ずかしい。

これでは、まるでキスが欲しかつたみたいだ。いや、本心を言えば、本当は、欲しかつた。

直輝はいつも、有衣が緊張しているのに気づいて、余計な力が抜けまるまではそつと掠めるようなキスをする。

それから有衣が慣れてくると、今度は唇を食むように、まるで味わうように、熱い唇と舌が触れる。

最初の頃びくびくしていたのに、今ではそれを望んでいる自分に時々気づく。

そんなことを思い出していると耳まで熱くなってきた。

有衣は、じりりと仰向けに戻ると、今日ひとつだけもらったキスの跡、額を手で触れる。

帰る時のキスも、なぜか唇でなく額にだつた。
それが少しだけ物足りないような気になつてしまつたのは、やはり自分がキスを望んでいるからだろう。
でもたまには、こんなのもいいのかもしない。
どちらにしても、幸せな気分を分けてもらえるのは変わらない、と思つた。

翌朝、直輝は出勤すると真つ先に慧の部屋へ向かつた。

入つてきた直輝の顔を見ると、慧は大体の事情が掴めた気がして苦笑する。

「お前、知つてたんだな」

「…高校生だつて？」

慧の答えに、直輝は溜息をついた。

頭痛がする。

ゆうべは、平日は飲まないはずのビールを遅くに飲んでしまつた。
おまけに朝までろくに寝付けもせず、今日のコンディションは最悪だ。

「どうしてわかつた？」

「…制服、着てきた」

地を這つのようなテンションの返事に、直輝の衝撃の大きさを思い、慧は直輝を哀れに思つた。

直輝は良くも悪くも真面目で真つ直ぐな男だ。

父親が厳しかつたせいか、直輝も常識や良識に忠実で、それから外れることが嫌いだ。

だから大学病院の体质が合わず、医局内でも孤立することが多かつた。

自己抑制の傾向も強い直輝に、有衣が高校生だつたという事実は、

かなりの苦痛だつたに違いない。

「それで、どうするつもりなんだ」

直輝は、こめかみのあたりに指を置き、田をきつく瞑つている。慧はそう尋ねながらも、直輝の答えは恐らく予想の範囲を超えない、と思った。

そして、その通りだつた。

「…無理だ」

苦しそうな直輝の声が、部屋全体にどんよりと漫透した。

常識人直輝、苦しんでます。

思わず、無理とか言つちゃいました！

好きなのに。大切なに。

でも多分そこら辺は、慧が何とかしてくれるでしょう^ ^；

そしてその直輝の不審な態度に、今後有衣は何を思つのか…。
まだもうじばりぐ、雲は晴れません。

手の中の携帯が震え、メールの着信を知らせる。

休憩時間になると、直輝はいつものように屋上に上がったが、メールを打つことができないでいた。

文章を入力してみては消し、の繰り返しで、結局送れないままだ。有衣はまた、直輝が忙しくて休憩を取れないと勘違いしたらしく、適当なメールを送つてきてている。

順番にメールを開きながら、直輝は慧との会話を思い出した。

あの時思わず、無理だと言つてしまつた。

だが口に出した瞬間、直輝は何とも言えない苦い気持ちに襲われた。直輝の中では、理性が承認を出す一方で、感情は猛烈に抗議していた。

無理だと言つたところで、本当に手放せるだろうか。

それこそ、無理ではないのか。

いや、それよりも、本心を言えば手放したくなどないのだ。

身動きの取れなくなつた直輝を見て、慧はやれやれと溜息をついた。直輝がここまで苦しむこと自体、直輝の気持ちが既に固まっていることの証しだらう、と慧は思う。

「つたぐ、あんまり真面目なのも、考えもんだな。お前が俺なら、若くてかわいくてラッキー、で済む話なのに」

おどけたように言つ慧を、直輝は軽く睨みつけた。

だが慧は直輝の性格をよく知つてゐるし、本当はかなり同情と心配をしてくれている、とわかつてゐる。

「俺からすれば、お前も正解はもうわかつて、あとまだつ折り合いつけるか、つてことだらう」

慧の言葉は、間違つていない。

確かに、ビーツ足搔いたところで、結局のところ有衣を手放せないことは、直輝もわかっている。

実際、有衣がない生活など、もう想像する」とさえ困難なのだ。ただ、今はまだ直輝の中で整理が付かない。

考えるのに疲れた直輝は、少しだけ脱線して気になっていたことを尋ねた。

「そういえば、名前といい年といい…なんぞ知つてたんだ」

「あー、成り行き上」

「それは、前も聞いた。その成り行きが、気になる」

「…あの子の幼馴染みつてのに、会つた」

直輝の中に、すぐにはみどりの名前が思い浮かぶ。

「もしかして、みどりちゃん、か？」

「お、なんだ、知つてんのか」

「名前だけ」

「もともとお前に会いに来たんだ。お前に早退させて俺が外来代わつてた日」

そう聞いて、直輝はぎょっとした。

深夜に何度も電話をかけてきた相手だ。

病院にまで來たとは驚いたが、それも納得する。

しかしもし実際にそのとき対面していたとしたら、一体どんな事態になつていたのか、と想像すると恐ろしい。

おそらく有衣のためなら何でもするような、そんな子なのだろう。一度も会つたことはないが、直輝はなぜかみどりに恨まれているような気さえして、妙な気分になつた。

微妙な表情を浮かべる直輝に、慧はあっけらかんと言い放つ。

「心配しなくても、そつちは俺がビツビツかするけど」

「…は？」

直輝は、慧の言葉のどこに反応すべきか迷う。

だが後半部分は些か問題ではないか、と思い慧を見ると、少しだけ

癖のある笑顔を浮かべていた。

その表情で、なんとなくだが事情を察しかけて直輝は溜息をつく。

「お前の性格が、今だけ羨ましいかもしない」

直輝の複雑極まりない心情を察した慧は、軽く噴き出した。

また携帯が震えた。

ほんやりとしていた直輝は、携帯に目を落とす。

『仕方ないんですけど。直輝さんとメールできなこと、ちょっとだけさみしいです』

時計を見れば、もうすぐ13時15分になろうとしており、有衣の昼休みの時間はもう終わる。

日中メールできるのは、昼のこの時間帯のみだけに、素直な有衣の言葉は、真っ直ぐに直輝の胸を衝いた。

生じる小さな切ない痛みが、どうしようもなくいとしい存在なのだと、訴え続ける。

『じめんね。午後の授業も、がんばって』

やつとのことで、こんなつまらない文章だけ送った。授業、と打つところで、何度も指が止まりかけたが、なんとか堪えた。

慧のようこ、常識に囚われない見方をすぐにできない自分が、疎ましかつた。

答えがわかっているのに、そうできないことが、もどかしい。

今日も今日とて制服姿で働いている有衣を横目で見ながら、直輝はこつそり溜息をついた。

なんとか免疫が付いたのか、ここ数日で最初の日よりは自然な振る舞いができるているのではないかと思つ。

しかし、これから後、有衣が帰るまでのふたりの時間は、そういうかない。

だが今日は運が味方をした、よう見える。

有衣が、今日は早めに帰ると言つたのだ。

残念に思つ面もあつたが、どちらかといつぱりとした気持ちのほうが大きかつた。

「直輝さん、やつぱり疲れてるみたいですね。顔色悪いし……」

最近寝不足で、しかも悩んでもいたから、当然だらう。

自覚のあつた直輝は曖昧に笑いながら、早く帰らうと思わせたことに、ちくりと良心が痛んだ。

「……」

「いいんです。今日は、ゆっくり休んでくださいね」

いつもよりも大分早い時間。

タクシーの到着時間に合わせて、玄関までいつものよつて見送る。直輝は今日も、儀式のようにキスを待つ有衣の、額にひとつだけキスを落とした。

ドアが閉まるごと、直輝にかけた明るい声とは対照的に、有衣は足取り重く歩き出した。

エレベータに乗りこみ、景色がだんだんと下がつていいくつれ、光がじんわりと滲んで見えてくる。

ここ数日間、直輝の態度は、相変わらずおかしかつた。

今日はわざと試しに、早めに帰ると言つてみただけだつたのに、明らかにほつとしたように見えた。

それに加えて最近ずっと続いている、せこひない手繫ぎにて、躊躇いがちに額に落とされる最後のキス。

疲れているのではなくて、まるで、一緒にいたくないみたいだつた。ぎゅっと目を瞑ると、有衣の目からぼろりと涙がこぼれる。

エントランスを出てタクシーを見つけると、有衣は慌てて田元を拭つた。

窓の外を流れる景色を見ながら、有衣は考えていた。

直輝がおかしいのは、学校の帰りが遅くなつたあの日からだ。

その日、直輝が帰ってきたときの、有衣を見て、硬直したあの顔、泳いだ目。

それから、触れるのにいちいち躊躇いを見せるよくなつた。何が原因だろう。

いつもと違ったのは、何だつただろうか。

そこで、有衣ははたと気づいた。

「制服…？」

確かに、今まで直輝と会うときにはいつも普通の服だったから、制服で会つたのはその日が初めてだつた。

隠していたつもりはないけれど、直輝は自分が高校生だとは知らなかつたのかもしない。

そういうえ、何年生か、聞かれた。

そして、その日から今日までずっと、有衣は学校から直接制服のまま来ている。

そこで有衣はようやく、自分が直輝から子どもだと思われたのだ、ということに気づいた。

自分ではどうしようもないことで、直輝が離れて行つてしまつような気がして、有衣は茫然とした。

お決まりのように、有衣はみどりの部屋へ行く。

だが今田のみどりは、いつもと様子が少し違つて、どこか苛々しているように見えた。

「なんか、あつたの？」

「…あつたには、あつたけど。ありえないから、無視。

それより、なんかあつたのは有衣のほうでしょ？ またあの男に何かされたの」

有衣は、いつになく刺々しい雰囲気のみどりに首を傾げたが、言いたくなさそうだったのでそのままにする。

「何にもされない」

「はあ？」

「…高校生だと、ダメなのかな
「じつこつことへ。」

最近の一連の「じつ」とをみじつと話すと、みじつは考え込んでしまつた。

「まあ、確かに「じつ」もだね、あの人からすれば
「うん…」

「でも、別れようとかは言われてないんでしょう？」

「言われてないけど。や、やだよそんなの…」

「あ、ごめん」めん。確認しただけだよ、泣かないでよ」

「う…」めん

考えただけでも、泣けてしまつのは、本当に本当に、好きになり過ぎているからだ。

以前の片思いをしていた自分だったら、ここまでじやなかつたかもしない。

でも今はもう、あの温かさと優しさを知つてしまつたから。直輝と離れる」となど、今さらもうできないと有衣は思つた。

「きつとせあ、真面目な人なんじゃない？」

「真面目？」

「何にも言つてくれないで態度おかしくなるのもじつかとは思つけど。

高校生だったなんて知つて、びっくりしたとか、不安になつたとか、そんなんじゃないのかな
「不安、なんてなるのかな」

「普通なるでしょ。だって一步間違えたら犯罪じゃん
「は、犯罪つて、私もうー8だし、しかも同意なのに
「関係無いよ。未成年だと親が訴えたらアウトだし」
「清香さんはそんなことしないよ」

「いや、例えばの話だつて。そういう微妙な問題もあるから、気にしている可能性もある、つてこと
「みぢり、良く知つてるね」

「…まあ、ひょっと必要に迫られてね。

でも、せうやつて悩んでるつことせわ、裏を返せば有衣がそれだけ大事、つてことじやない？

だから有衣もそう思つて、もう少し様子見てみたらどうかなあ「なんとなく、釈然としないものを残しつつ、有衣はとりあえずみどりの言葉を受け入れた。

こんなことになるなら、制服なんて着て行かなれば良かった、と思つ。

でも今やらざつにもならないし、たとえ制服を着ていなくても年齢は変わらないのだ。

みどりの言葉通り、もしも“大事”の裏返しなら、それはそれで嬉しいと思つ。

だが、いつまで直輝ときくしゃくした時間を過ぐしなければならないのだから、と思うと憂鬱になつた。

直輝しつかりしき（笑）状態です。

慧を羨ましいとか思つていい場合じゅありません^ ^ ;

有衣もついに直輝の拳動不審の原因に気づきました。

でもほんとに、自分じゅじつめつもなことで距離置かれたら、
哀しくなりますよね。

慧とみどりの関係は、別の話で書きますが、
ちよつといつと時期がリンクしてるので、じつてもまだお読み
まいます。
そつねはもう少しだけお待ちくださいね。

4限目の終了を知らせるチャイムが鳴ってしばらく経つても、有衣は立ち上がれないでいた。

体が鉛のように重い。

周りの声が遠く聞こえ、逆に自分の鼓動や呼吸が大きく聞こえる。机に突っ伏したまま、有衣は手の中の携帯をぼんやりと見つめた。直輝とのメールはそこそこ続いているものの、昼休みについていた頻繁なやり取りは、最近ではほとんどない。

忙しいのだと思っていたが、どうやら違ひひじこということに気がついて以来、有衣から送ることにも躊躇してしまった。なんとなく直輝とシンクロしていくて行っている屋上も、今は果てしなく遠く感じた。

「有衣、貧血？ 頬色かなり悪いよ…」

「うん、今日、一日…」

心配して近づいてきたみどり、「有衣はなんとか答える。

普段はそうでもないが、毎月一度、このときばかりはかなり貧血がひどくなる。

連日の忙しさによる疲労も関係しているのか、今回はかなり辛かつた。

「保健室で休んでたほうがいいんじゃない？ それか帰るか…」

「…保健室行く」

「うん。じゃ、一緒に行つてあげるから

みどりに支えられて立ち上がり、保健室に向かいながら、こんなとおりでも携帯を手放せない自分に有衣は苦い思いを抱く。

期待することが、やめられないのだ。

だから、躊躇しながらも結局メールを送りてしまつて返信も待つてしまつ、とうとう堂々巡りに陥る。

そんなことが、体調の悪さに拍車をかけているような気がして、有

衣は重い溜息を吐き出した。

痛い。気分が悪い。…それから、寂しい。

言えば、直輝が心配してくれることはわかつてゐる。

それでも、今のふたりの状況を考えると、じつじつとで氣を引こうとするのは卑怯な氣がして嫌だつた。

鳴らない携帯を握りしめながら、有衣の意識は暗く沈み込んだ。

午後の授業が終わり、有衣の荷物を保健室へ持つていこうとしたみどりは、いつもよりひとつ多い鞄に眉を顰めた。

中身はもうわかつてゐる。

制服をきらう直輝を気遣つて、有衣は「何日かわざわざ着替えを持つて來ているのだ。

真面目なのはいいが、それで有衣が傷つくのは見るに堪えない。真つ白な顔色で、ベッドに横たわる有衣を見つめて、みどりは小さくため息をついた。

その気配に有衣は目を覚まし、体を起こすと一瞬くらうとしたが、なんとか大丈夫そうだった。

「…もう、終わつたの？」

「うん。どう？ 少しは具合いい？」

「んー…大丈夫」

「お願ひして今日は早めに帰つてきてもうひとつか、できないの？」有衣の性格上、そういうことは言わないとわかつてはいても、みどりはそう聞かずにはいられない。

このまま小さい子どもの世話をしていたら、有衣は本当に倒れてしまったに見える。

だが案の定、有衣は首を横に振つた。

「大丈夫。それに、心配かけるのやだ」

その言葉に潜む本当の意味を、みどりも知つてゐる。

どうあつても自分では言わないつもりだとわかり、みどりは今度こ

そ大げさにため息をついた。

なんとか保育園へ行くと、珍しく晴基は寝ていた。

話によると、お昼間に遠足があつたようで、疲れてしまつたらしい。起こすのもかわいそうで、そのまま抱いて帰ろうかと思ったが、有衣は荷物も多くしかも今日は体調も悪い。

この状態で、眠つて脱力した3歳児を連れるのは、かなり至難の業だ。

どうしようか、と思つていると、見かねた譲が口を開いた。

「俺、今日は暇だし。晴基連れてつてやるうか」

「え、大丈夫なの？」

「ああ。それに、顔色超悪いし、荷物も多すぎだし」

「じゃあ、お願ひしようかな。…ありがとう」

限界に近い有衣は、譲の厚意に素直に甘えることにする。

結局、譲が晴基を抱っこし、有衣の荷物も持つてくれることになった。

途中で寄るスーパーでも、有衣はベンチに座つて待ち、譲がメモを持つて買い物をした。

ようやく家につくと、玄関先で有衣は晴基と荷物をそれぞれ受け取る。

晴基をベッドに寝かせ、もう一度玄関に戻つて譲に声をかける。

「ほんと助かつた。ありがとね」

「それはいいけど。ほんとに大丈夫か？ ハルパパにメールとかした？」

「大丈夫。…直輝さんには、言つてないよ。てか、今は言えないし」

「なんか、そういうのって変じやね？ 付き合つてんのに遠慮とか。だいたい、高校生なのがそんなに悪いことかよ」

「うん…。でも、ほんとに大丈夫だから。今日は、ありがとう」

譲の言うことも、尤もだ。

内心同調したいと思う面もある有衣だったが、はつきりとは言わず

に笑つて済ませる。

何を言つても仕方ないと思つたのか、譲はもつそれ以上は何も言わず、お大事に、とだけ言つて帰つていった。

年齢のことは、直輝の気が済むのを待つしかないのだと、有衣は思つていた。

それに下手にこちらから何かを言つて、本当に離れて行つてしまつことになつたら、と思うと怖かった。

譲がエントランスを出ると、ちょうど直輝がタクシーから降りる姿が見えた。

直輝も譲の姿に気づき、驚いたような顔をした。

「こんにちは」

「こんにちは。…どうか、しました?」

「いえ、ハルが寝てしまつて、彼女も具合が悪そつたので、付き添つてきました」

「そう、ですか」

譲は、直輝が自分を見るその視線の中に、はつきりと嫉妬のような敵愾心のようなものを感じ取つていた。

それは以前から感じていたものだが、今日はさらに強い。

そんなに有衣を思つているなら、どうして有衣にあれほど悩ませたままでいるのか、逆に不思議だ。

強がる有衣は見ていて痛々しいほどで、それを間近に見る譲としては、何とかしてやりたかった。

「ひとつ、お尋ねしたいことがあるんですが。…彼女の、友人としてて」

直輝を煽ることも忘れない。

案の定、最後の言葉に直輝はびくつと反応した。

「何でしょう」

「高校生だと、何が悪いんですか」

譲の問いに、直輝はぎょっとしたように譲を見つめる。

つい最近まで自分も知らなかつたのに、なぜ譲は知つてゐるのだろう。

有衣の“譲くん”と呼んでいた声が、耳元でちらついた。

「…なんで知つてるんだ、つて思いました？」

図星を突かれた直輝は、黙つたまま譲の次の言葉を待つ。

「俺、彼女の後輩なんですよ」

「後輩…じゃあ、君も、高校生なのか？」

「制服着てなければわからないでしちゃう。でも、中身は同じだ。あなたにとつての彼女も、そつじゃないんですねか。

今日、俺が勝手にここに来たのは、悪かつたとは思つてます。けど、あなたが彼女に距離を置くようなことをしてなかつたら、間違いなくあなたを頼りたかつたと思ひますけど。

…生意気言つてすみません。じゃあ、失礼します

直輝は、何も言えないまま譲の後ろ姿を見送る。

譲の言葉は、的を射ているだけに直輝の胸に突き刺さつた。慧に、有衣が具合が悪いらしいと聞いて、急いで早退して戻つてきただのだが、人伝の情報に胸が苦しかつた。

有衣が自分を頼れない状況を作り上げたのは、自分自身であると直輝もよくわかつてゐる。

直輝は、自身を叱咤し、エントランスへ足を急がせた。

まだ、夕食の準備を始めるには早い時間だつた。

買つてきたものを冷蔵庫にしまつと、有衣は先に掃除をしようと思ひ立つたが、まず着替えることにする。

鞄に手を伸ばそうとした時、視界の中でチカチカと白っぽい星が瞬くのを感じた。

まずい、倒れる前兆だ。

とにかくしゃがみ込もうとローテーブルに手をついたが、置いてあつた写真立てに手が当たつて落ちてしまつた。

どうにかやり過ごして、落ちた写真立てに目をやると、ストップパ

外れ、中の写真が外に出てしまっている。

直輝の亡くなつた妻と、まだ生まれたばかりの晴基が映つているものだ。

その写真を手に取り、有衣はぼんやりと眺める。

ここにこの写真と、直輝とふたりで写つてある写真があるのは、有衣もだいぶ前から知つていた。

だがいつからか、まともに見ることができなくなつて、掃除の時も見ないようにしていた。

多分、直輝を好きになつてしまつた頃からだろう。

視線が恐ろしかつたのかもしれない。

この、儂げな、綺麗なひとには、絶対に勝てないと思うから。想いに優劣をつけるのは愚かだと知つてはいても、どうしても、その思いは抜けなかつた。

何の気もなしにしたことだつた。

有衣は、写真をただ元の位置に戻そつと、写真立てに入れようとしただけだつた。

そのとき、写真の裏側に文字が書いてあるのが見えた。

“ Hospital , Yui & Haruki ”

「 ゆ、い…？」

衝撃だつた。

そして瞬時に、ここで直輝に初めて会つた日のことが思い出された。晴基に名前を教えていた時の、派手な食器の音、直輝の驚愕の表情、そして妙な質問。

同じ、名前だつたのだ。

だから、名前の漢字まで聞いてきたのだ。

「 唯一のゆい…。唯一…」

单なる漢字の説明なのに、“唯一”という単語がひどく重たく感じ

られる。

有衣は、もうひとり思い出してしまったことに、眩暈を感じた。

直輝は、有衣が晴基の母親に代ることが、願望だったと言ったのだ。それはただ単に代わるものになることだったのだろうか。

本当は、同じ名前の有衣に、身代わりになつてほしかつたのではないだろうか。

だが、有衣が高校生だと知つて、それはあまりにも不自然だと思つて、それで急に距離を開けたのだろうか。

そう考へると、全ての辻褄が合つてしまつよつた気がして、有衣はショックのあまり茫然とした。

「ま、まさか…」

必死にその考へを打ち消そつと、できるだけ静かに写真を元の位置に戻す。

しかし一度考へ出してしまつたものはなかなか消えてくれない。

それどころか、正解はそれしか無いようにさえ思えてくる。

落ち着きを取り戻そつと、キッチンから水を取つてきたが、頭がくらぐらして足取りがおぼつかない。

急に嫌な汗が吹き出し、視界がだんだんと白く覆われ出した。

このままだと倒れてしまつ、と有衣は焦り、手に持つたグラスをどこかに置こうとした。

が、有衣の意識はそこまでしか保たれなかつた。

手から滑り落ちたグラスは床に落ちて割れ、有衣はその上に倒れ込んだ。

20（後書き）

譲からのパンチもあり、直輝も吹っ切れそうですね。
でも有衣は名前のこと知つてしましました^_^
直輝、がんばりどころです！

直輝が玄関のドアを開けた瞬間、耳に飛び込んできたのは、ヒステリックな晴基の泣き声だった。

何事かとぎゅっとしながら、晴基の名前を呼びながら廊下を走ると、晴基がリビングから飛び出してきた。

「パパ！ ゆ、ゆいちゃんが、まつかなの、まつか」

「まつか？」

嫌な予感に慌ててリビングに入ると、有衣が床に倒れている。しかも割れたグラスと水が飛び散り、その上に倒れたせいで有衣の額は切れて血を流していた。

素早く晴基の足に視線を走らせるが、幸いグラスの破片は踏んでいないようだった。

「ハル、危ないからそのまま動かないでいなさい」

「う、うん。ゆいちゃんは？」

「いつ倒れたのか、わかるか？」

「い、いまだよ。ぼく、ねてたの。ガシヤンつておどがして、びっくりしておきたの。

そ、それで、ここにきたら、ゆいちゃんが、よんでもおきなくて、かおもまつかなの。まつか…」

晴基もショックで様子がおかしい。

直輝自身も動搖していたが、晴基を落ち着かせるようにできるだけ穏やかな声を出す。

「ハル。有衣ちゃんは大丈夫。パパはお医者さんだから、治してあげられるよ」

「うん。ぜつたいね？」

「ああ」

医者に“絶対”など無いと、直輝はよくわかっているが、とにかく今はそう言つしかなかつた。

朝から貧血がひどかつたようだと聞いている。

直輝は有衣を抱き上げるとソファに寝かせ、足もとにクッションを重ねてやる。

心拍数はかなり減少しているが、数分もすれば意識は回復するだろうと予想した。

しかし、うかつに薬剤投与することはできない。それに、外傷もある。

とりあえず、病院へ連れて行かねばならない。

額の傷の応急処置をしながら、直輝は慧に連絡し、落ち着いたらしく有衣を連れていく手はずを整えた。

有衣の様子を窺いながら、直輝は素早く床に散らばった破片を除き、水を拭き取る。

動いてもいい、と言つと晴基は急いで有衣のそばに駆け寄り、心配そうに顔を覗きこんでいる。

ひととおり片付け終わり、直輝も有衣のそばに近づいた。

慌てていたせいでの今まで意識していなかつたが、有衣は制服姿だった。

そして、近くに置いてあつた鞄の口からは、衣服が見えている。ここ何日か有衣が制服を着ていなかつたのは、わざわざ着替えていたのだと、直輝は今初めて気づいた。

有衣にそこまで気を遣わせ、なおかつ具合が悪くても言えなにような雰囲気にしていたことに、ひどく落ち込む。

「…」めんね

直輝は小さな声で謝ると、まだ顔色の戻らない有衣の頬をそつと撫でた。

「パパ。ゆいちゃん、おきないの？」

「もうすぐ起きるよ。ハル、びっくりしただろ？。よくがんばったな

直輝の言葉を聞くと、晴基の目からぼろりと大きな涙が落ちる。

驚きとショックと心細さに耐えていた晴基は、ぎゅっと直輝に抱きついて、しばらく涙を零していた。

直輝はそんな晴基を抱きしめながら、有衣の冷たい手を握り、そつと撫でていた。

ぼんやりと浮上した意識の中で、手に温かな感触を感じた。有衣がそちらに目を向けると、晴基を抱きしめたまま自分の手を握っている直輝がいる。

驚いてはつきりと覚醒し、体を起しあつとしたものの起き上がることができなかつた。身動きしたことで、有衣が意識を回復したことに気づいた直輝も、動かないように制止した。

「今急に起きると、また倒れるから」

晴基も有衣の覚醒に気づき、直輝から離れると有衣の服を掴んだ。

「ゆいちゃん、おきたの？　だいじょうぶ？」

「ハルくん。起きちやつたんだ、ごめんね。大丈夫だよ」

「よかつたあ。ゆいちゃん、おきてよかつた」

真つ赤な目が、心配したのだと物語ついて、有衣は晴基の頭を撫でてあげようとした。

しかし、有衣の手は直輝が握つたままで、動かせない。

ちらりと視線を投げかけたが、直輝は手を離す気はなさうだった。そもそも、なぜ直輝がこの時間帯に家にいるのか、有衣にはよくわからぬ。

「直輝さん、どうして…」

「早退してきたんだ。朝から具合悪かった、って聞いたよ」

具合が悪いと聞いて、早退して来てくれたのだと思うと、素直に嬉しかつた。

手を繋いでいてくれたのだといふことも、泣きたいほど嬉しい。だが一方で、直輝が無理をしたのではないかと思つと、申し訳ない気もした。

「「」めんなさい…」

「どうして、謝るの」

「無理、させちゃったと思つて…」

こんな状態になつても、まだ直輝を気遣う有衣に、直輝は苦く笑うほかない。

内心で溜息をつきつつ、握っていた手に少しだけ力を込める。

「無理したのは、君のほうでしょう。こんなになるまで、ひとりで我慢して。

…今日、君に言わせなかつたのは俺のせいだけど、でも今度からは、俺に言つて。頼むよ」

それは、ほとんど懇願だった。

有衣が倒れているのを見たとき、晴基がいたおかげで、直輝は動揺を最小限に抑えることができた。

それでも、本当は取り乱す寸前だつたのだ。

有衣の意識が戻つた今でも、繋いだ手を離せないのは、そのせいだ。失いたくない、大切な存在なのだと、自分自身に対しても再度確認する。

制服は、然程気にならなくなつていた。

有衣の様子を見ながら、直輝は有衣を少しづつゆっくりと起き上がらせる。

「病院に行こう。慧には連絡してあるから、着いたらすぐに対応してもらえる」

直輝に起き上がらせてもらいながら、『眞のこと』を思い出した有衣はまた暗い気持ちになつた。

直輝がこうして優しくしてくれる理由は、本当にどこにあるのだろうか。

そして有衣は、自分がまだ制服のままだつたことに気がついて内心うろたえる。

このまま病院に行くつもりだらうか。

直輝は、いいのだろうか。

しかしそんな迷いも、直輝の次の行動によつてかき消された。

直輝はソファから有衣を抱き上げ、晴基に声をかけると、そのまま玄関へ向かつて歩き出そうとする。

「え、ちょ…っと、直輝さん？」

いくらなんでもこれは、と有衣は慌てて声を上げたが、直輝は下ろそうとしない。

それどころか、ますます抱く腕に力を込め、下ろす気が全くないことを示した。

「おとなしく拘まつって。また倒れたい？」

そんなことを言われると、逆らうことなどできない。

おとなしく言つことを聞き、有衣はそつと直輝の首に腕をまわした。久しぶりの密着に、こんな状況ながら有衣はどきりとする。再び首を擡げていた“身代わり”の疑いは無理矢理心の隅に押し込め、有衣は目の前の温もりに縋つた。

到着した直輝たちを見て、慧は思わず苦笑を漏らした。

いや正確には、制服姿の有衣を抱える直輝を見て、だ。

しかも、準備しておいた車椅子を指差すと、直輝はあからさまに不満そうな顔をした。

その様子に今度は噴き出しそうになつたが、有衣のいる前でそういうのは憚られたため堪えた。

それにも、いざとなるとこんなことができてしまつてしまつて、あれこれ悩むなんて本当に難儀で損な性格の男だ。

これじゃあ有衣も苦労する、と有衣に目を向けると、有衣は慧に向かつて小さく頭を下げた。

「大丈夫？ まだ顔色良くないね。

とりあえず、血液検査。その間に傷手当して。結果次第で薬出す

から

「頼む。俺はとりあえず、親御さんに連絡する」

有衣の頭上で話すふたりに物事は決められ、有衣は車椅子に下ろされる。

急に離れた直輝の温もりに、寒くなつたような気がして、有衣は両腕をわすつた。

採血と処置の間、有衣は好奇の視線に晒された。

ところのも、有衣の採血や処置の補助を担当したのは白井だつたらだ。

白井の無遠慮な視線と居心地悪そうな有衣に、慧は白井を窘める。

「白井ちゃん。困つてゐるから、じろじろ見るのやめなさいね」

「あ、ごめんなさい。西岡先生が拳動不審になる原因の子だと思つたら、ついつい…」

「拳動不審？」

白井は、一見キツそうに見えるが、いや実際言動もキツいのだが、笑顔はとても綺麗だ。

普段の白井の物言いを良く知らない有衣は、その笑顔を向けられて気持ちが緩み、口を挟んでしまつ。

直輝が拳動不審になる、というのが想像できなかつたのだ。

「そりや、もうひどいもんよ。うまくいつてるときは、気味悪いくらいウキウキしちゃつてずつと笑顔だし。

喧嘩だか何だか、何か問題が起くるともう葬式か、この世の終わりか、つてくらいどんより沈んじゃつて。

仕事にならないから困つちゃつくらい。こんなかわいい子が相手ならあり得る、つてちょっと納得したけど」

「今日だつてあいつ車椅子見て超不機嫌な顔してさ。離したくなかつたみたいだよ。愛されてるね」

有衣は、ふたりが口々にそう言つのを、不思議な気分で聞いていた。直輝が自分とのことで、周りからわかるほど態度に表れるところなど、想像が付かなかつた。

愛されている？

果たして、本当にそうなのだろうか。

考え込むように黙つた有衣を見て、白井は何かを感じ取り、笑顔を引っ込めて口を噤んだ。

「なんだか、喋りすぎちゃったみたいね。結果が出るまで、安静に、待つてくださいね」

そそくさと処置室から出て行つた白井の背中を田で追いながら、有衣はおざなりに返事を返した。

慧は、そんな有衣の様子を注意深く観察していた。

愛されている、といふ言葉は、今のふたりの状況を察していながらわざと使つたのだ。

その反応から、有衣が直輝の愛情に疑問を持っている、といふのは間違いなさそうだった。

時間がかかり過ぎたな、と直輝にも有衣にも同情する。
視線を感じて有衣と目を合わせると、有衣は何か言いたそうな顔をしていた。

「何？ どうか、まだ痛む？」

「あの、慧さん、は知つてますよね」

「何を？」

「唯さん……って、どういう方だつたんですか」

有衣の口から、その名前を聞くとは慧も思つていなかつた。直輝の様子と照らし合わせても、直輝が告げたとは思えない。

「どこで、知つたの？」

「…偶然、写真の裏を見て」

有衣は俯き加減で、苦しそうに答える。

ようやく直輝が上向くなつてきたといひで今度はこつちか、とタイミングの悪さに慧は内心毒づいた。
さて、どうしたものか。

ここにはいない直輝のことも思い、慧は答えを思いめぐらして天井を仰いだ。

21（後書き）

直輝、吹っ切れたようです。

吹っ切ると、行動も大胆です（笑）。

慧の言うとおり、本当に損な性格、面倒な男です…。

直輝に直接聞く勇氣の無い有衣は、まず慧に聞くことにしたようです。

慧は有衣にどう答えるのか。有衣は何を思うのか。

それからちょっと忘れかけてましたが^ ^；

清香さんに連絡を取った直輝のことも書かなくては。

次回からはいろいろ問題解決に向かってみんなががんばっていくと思します

「唯がどんな人だったか、聞いてビリするつもりなの？」

非常に長い沈黙、と有衣が感じた時間の後、慧は逆にそつ尋ねてきた。

どうするつもりなのか、と言われても、考えたことのなかった有衣は答える詰まる。

「…聞いて、真似でもする？」

「え？ いえ、そういうつもりじゃなくて。ただ、気になっただけです」

真似なんてしたら、本当に身代わりのようになってしまふと思ふ、想像だけで有衣は震えた。

「名前が同じだから、直輝が君と付き合つたと思つた？」

「…少し」

「でも、君は唯とは似てない。全く違つ。だから代りにはなり得ない」
これ以上ない、といつまではつきりと言つて切る慧に、有衣は妙なシヨックを受けた。

似ていふと言わされたで苦しこのこ、これほど今までにほつつきりと代わりになれないと言われるのも苦しい。

身代わりになるのは嫌なのに、たとえ身代わりでも直輝に必要とされたいと思う、矛盾。

再び黙り込んだ有衣を見て、慧は傷つけたかもしれないと少しだけ後悔した。

軽くため息をつきながら、補足する。

「本当に身代わりにするつもりなら、名前なんかじゃなく、外見がある今は中身が似ているひとにすると思わないか」

「それは、そうですけど…」

「でも、唯には敵わないと思つてる？」

「死んだ人には、勝てません」

「…そうだね。でも、死んだ人も、生きている人には絶対に勝てないよ」

尤もな言葉に、有衣は自分の中から卑屈な気持ちが霧散していくのを感じた。

やはり、想いに優劣をつけることは愚かなことなのだと、もう一度思いなおす。

有衣の表情が少し明るくなつたのを見た慧は、止めどばかりに言葉を足す。

「それに、君は唯にはできなかつたこともしたしね」

「…どういう意味ですか？」

「気づいてると思うけど、直輝は堅物で真面目な男で、常識から外れただことができないヤツだ。

でも、君はその壁をぶち壊した。制服着た子をお姫様抱っこなんて、今までのあいつならあり得なかつたんだよ」

おかしそうに笑つて話す慧に、有衣もつられて苦笑した。
病院に連れてこられたときのことを思い出して、急に恥ずかしくなる。

「まあ、あとは直輝に直接聞いてよ。多分、身代わりなんて考えもしてなかつたと思うけどね」

慧はそれだけ言つと、結果をチェックしていく、と言つて出て行つた。

有衣の心は、完全に晴れたわけではなかつたが、少なくとも直輝に直接聞いてみる勇気は湧いてきた。

数針縫つた額に手をやりながら、これも怪我の功名と言ひつのだらうか、と有衣は苦笑した。

安心してまた眠つてしまつた晴基を抱えながら、有衣の母だと言つ女性を目にした直輝は、固まつてしまつた。

今まで何度か会つたことのある、ハウスキーパーを依頼していた派遣

会社の社長だつたからだ。

まさか、このひとが有衣の母親だとは思つていなかつた。
しかしこれで、すべてに説明は付く。

高校生で派遣されてきたのも、一度有衣を傷つけた時に社長が電話してきただのも、有衣の母親だつたからだ、とわかる。

「あの、この度は、すみません…」

言いながら、なぜ謝つているのか自分でもわからず、直輝はこいつそりと冷や汗を拭う。

清香はそんな直輝を苦笑しながら見つめ、持つてきていた有衣の必要な荷物を直輝に差し出した。

「ご連絡ありがとうございました。今日ははちょっと仕事を抜けてきましたので、すぐに戻らなくてはいけないんです。

有衣は、私よりも西岡さんにそばにいてほしいんじゃないか、と思ひますし。宜しくお願ひしてもよろしいでしょうか

「え…」

直輝は、有衣との関係を知られていることで、内心かなり動搖した。そして、それを認めているかのような清香の言葉に動搖が増したが、なんとか堪えて荷物を受け取り、清香を真っ直ぐに見据える。

「わかりました。結果が出ましたら、またご連絡します。…それから、今度、改めてご挨拶伺います

「ええ、お待ちします」

清香はこりこりと笑つて軽くお辞儀すると、踵を返して去つていく。その後ろ姿を見つめながら、直輝は今の笑顔にそれ以上のものを感じたような気がして、どつと疲れを覚えた。

どこに行つたのか慧を探していると、診察室のひとつで、有衣のカルテを見ているところを見つける。

直輝も横から一緒になつてカルテを覗きこみ、血液検査の結果に素早く目を走らせた。

「…8・1か

「鉄剤初めてだつてから、一応点滴だな。個室空いてるし、とりあえず今晚は入院させて、お前も泊れば」

「ああ、そうだな。助かる」

「この感じだと静注続けたほうが無難だな。ただ、まあ…婦人科回したほうが確実」

「それなら荒居さんで」

産婦人科の非常勤を含めた5人の医師のうち、女医は荒居一人である。

直輝がすぐにその荒居を指名したことにより、慧は遠慮なく噴き出した。「つとに、お前はめんどくさい」というかどんくさいと云うか、損なヤツだよな

「どういう意味だ」

「そんなに独占欲丸出しなのに、全然あの子には伝わってないし。…あの子、知つてたぞ。自分が唯と同じ名前なんだつてこと。ついでに、身代わりにされてるつて勘違いもオプションで」

「え？」

直輝は、有衣には名前のことは言つていなかった。
有衣がどうして知つたのか、しかも身代わりだと思つてているとは、と直輝は焦る。

「偶然写真の裏見たとか言つてたけど

「写真…」

リビングに飾つてある唯の写真が、直輝の頭に浮かんだ。
もしかして、有衣はある写真をずっと気にしていたのだろうか。
ずっと飾り続けているのは、無神経だつただろうか。
いつ知つたのかはわからないが、とにかく同じ名前だと知つて、シヨックは大きかつただろう。

それも、最近は直輝が少し距離を置こうとしていたため、尚更辛い気持ちにさせていたに違いない。

「まあ、俺も一応フォローはしたつもりだけど。あとはお前次第だろ」

「ありがとう。すまない」

慧は直輝の肩を軽く叩くと有衣のもとへ、直輝は清香に連絡するためにそれぞれ出て行つた。

車椅子に乗せられたまま、個室に入つた有衣は、物珍しさにきょりきょりと周りを見回す。

部屋の中にトイレとシャワールームがあり、簡易ベッドや冷蔵庫なども普通に置いてある。

昔一度入院したことがあったが、そのときは一室6人の大部屋だったため、こんな部屋は初めてだつた。

「入院初めて？」

「いえ、一度目ですけど。こういう部屋は初めて、です」

慧に尋ねられて、自分の行動が子どもっぽく思えた有衣は、だんだん恥ずかしくなつて最後は小声になる。

こういつところからして、きっと全然似ていらないんだろうな、と改めて思う。

どこかしょんぼりとしてしまつた有衣を見ながら、慧は小さく笑つた。

おそらく直輝も、こういつ素直で計算の無い気持ちやそれが表れた言動に、やられてしまつたのだ。

「しばらくしたら、直輝も来ると思つけど。点滴終わるまではおとなしくしてて」

「あ、はい」

「ベッド、自力で上がれそう？」

「大丈夫です」

「じゃ、何かあつたらナースコールしてね」

そう言つて慧が出て行くとしたときに、ちょうど入れ替わりで直輝が入つてくる。

有衣は、この後直輝とどう話をすれば良いのか、と若干緊張した面持ちを直輝に向ける。

しかしその直輝の後ろから、こつそり“がんばれ”と口を動かす慧が見えて、有衣は小さく笑みを浮かべた。

直輝は右手に晴基を抱え、左手に荷物を抱えていた。車椅子から立ち上がるうとした有衣に気づき、慌てて荷物を床に落として晴基を簡易ベッドに寝かせると、有衣に近づく。

「自分で動いて平氣？」

「大丈夫です」

有衣の返事を聞いていたのかいないのか、直輝はさつと有衣を抱き上げる。

本日何度もお姫様だつて、有衣は恥ずかしさを感じつつ、だが諦めたように笑った。

そつとベッドに下ろされ、髪や服を直して掛け布団をかぶせられた、人形にでもなつたような気分で恥ずかしい。

それでも、触れられることが嬉しくて、温かさが心地よくて、有衣はおとなしくされるままにしていた。

直輝は、有衣の額や針の刺さった手の甲を痛々しそうに見てから、意味もなく点滴装置をチェックする。

そういえば荷物を床に置きつ放しだつた、と思い出した直輝は、一度ベッドのそばから離れようとした。

どこかに行ってしまうのかと不安になつた有衣は、思わず直輝の服の袖を掴んでしまう。驚いた直輝が振り向いて有衣をじつと見つめ、有衣ははつとしてすぐには手を離した。

「あ、…ごめんなさい、つい」

直輝の驚いた顔が、有衣にはなぜか怒つているように見えたのだ。緊張のせいで変な先入観が働いているらしい、もう一度見ると、浮かんでいたのは単に驚いた表情だけだった。

有衣は、自分で離してしまつたために行き場を失つた手で布団をぎゅっと握りしめる。

「いや。荷物を床に置きつ放しだつたから、取りに行くだけだよ。
どこにも行かないから」

直輝は、単に有衣が自ら自分に触れようとしてくれたことに驚いた
だけだった。

だが有衣が一瞬で不安げな表情になってしまったのを見て、最近の
自分の言動のせいだと直輝は自らを罵る。

直輝は荷物を取つて棚に置くと、ベッドの脇に椅子を置いて座り、
有衣の手を布団から離して軽く指先を握つた。

伝わる体温にほつとしたように息をつく有衣に、直輝は今まで無理
に抑えていたいとしさが一気に内側から広がっていくのを感じた。

22（後書き）

想いの優劣は生死には依らない、ということです。

慧のナイスフォローにより、有衣はなんとか持ち堪えました。
あとは、直輝と有衣とふたりで気持ちをぶつけ合うだけです^ ^
ここからが、ほんとの直輝のがんばりどころです。

それにも。

医者が相手だと、体のこと何でも知られそうで怖...^ ^ ;

有衣がふと目を開けると、照明が落とされ病室は薄暗くなっていた。直輝の手から伝わる体温にほつとしたせいもあってか、眠ってしまったようだ。

起き上がって簡易ベッドにて目をやると晴基が眠っていたが、病室を見回しても直輝の姿はない。

点滴を見上げると、残りはあとほんのわずかだった。
終わるまでに三時間程と言われていたから、つまりは三時間近く眠ってしまっていたことになる。

直輝に聞きたいことも話したいこともあったのに、寝てしまうなんて何たる失態、と有衣は溜息をついた。

それにしても、直輝はどこに行つたのだらう。
どこにも行かない、と言つていたのに…と、有衣は急に心細くなつてしまつ。

病院は、本当は苦手だ。

昔入院したときは、両親の帰つた後、カーテンで仕切られた薄暗い場所でひとり眠るのが怖かつた。

そしてその次の記憶は、有衣の父が亡くなつた時のことだ。
あのときは何が起きているのかもわからないまま、忙しなく行き交う医師や看護師眺めていたことしかできなかつた。

それに、……ああ、もうこれ以上思い出したくない。

気温は決して低くないベッドの上で、有衣はぶるりと体を震わせた。

直輝は、アルコール綿などの載つているワゴンを取りに行つていた。
眠っている有衣をひとりにするのは心苦しかつたが、もうすぐ点滴も終わるため仕方がない。

ナースステーションはこの病室からすぐの場所にある。

すぐだから取つてしまおう、と行つたのだが、帰つてドアを開

けた途端直輝は後悔した。

有衣は目を覚ましてベッドの上に起き上がっている。

ドアの音に気づいて直輝に向かって田は、濡れて廊下の電気の光を反射してきらきらと光っていた。

病院に来てからも有衣が普通にしていたためすっかり失念していたが、有衣の父親は、病院で亡くなつたのだろうか。

親を病院で亡くした子どもは、病院や白衣を嫌いになつたり恐れたりすることが少くない。

直輝は、先ほど有衣に袖口を掴まれたことを思い出した。

ひとりでここにいると氣づいて、きっと心細かつたに違いない。

「ひとりにして、『じめんね』

直輝は、有衣を包み込むようにそっと抱きしめた。

有衣の両腕が遠慮がちに直輝の背中に回され、やがてまるでしがみ付くよつにぎゅっと力が込められる。

有衣は声もたてずに静かにぽろぽろと涙をこぼし、直輝はあやすように背中を撫で続けた。

突然鳴った機械音に、有衣も直輝もびくんと体を震わせる。

点滴の終了を告げるアラームだった。

有衣は急に泣いていたことが恥ずかしく思えて、ぱっと直輝から体を離した。

直輝はアラームを止め、持つてきていたワゴンを引き寄せると、有衣から点滴を外して片づける。

てきぱきと作業する直輝を見ながら、有衣は急いで手で涙の跡を拭う。

全てを片づけてベッドの脇へ戻った直輝に、有衣は小さく謝る。

「『じめんね』」

先ほどの子どもに返つたように泣いていた顔は既に消え、いつもの有衣の顔に戻っていた。

こんな調子で、有衣はいつも何かを我慢してきたのかもしれない、

と直輝は思つ。

そして、おそらく自分も、我慢を強いてきたのだと反省する。

「有衣ちゃん、ほんとは病院嫌いだろ？」

「…少し」

遠慮がちに答える有衣に、直輝は苦笑をこぼす。

いつも明るく、その陰で我慢強く、けれど本当は寂しがりな有衣がかわいそうでもあり、いとしくもある。

「君はいつも、何かを我慢してる気がする。我慢強いのはいいことだけど、我慢のしすぎはよくないね。」

本当は、俺にも言いたいことたくさんあるでしょう。俺が、我慢をさせてきちゃったんだろうな、って思うけど…。

でもやつぱり、ちゃんと、言いたいこと言つて、何でも話していくれると、俺は嬉しいよ」

有衣の手を握り、有衣の目を覗きこむように見る。

最初緩く首を振った有衣は、じつと見つめられて困ったように俯き加減になる。

上目づかいになつたその目で、促すように視線を送ると、有衣はやがて口を開いた。

「…どこにも、行かないって、言つたの？」

先ほどのことだ。

目が覚めたら、いなくなつていたことを、小さく責められる。

「うん。ごめん…。それから？」

「お昼休み、メールくれないし」

確かに、最近はほとんどやり取りをしなかつた。

何でも話してほしいと言いながら、直輝も実は内心の葛藤についてだんまりを続けていたのだ。

忙しかつたわけではないことを、有衣は気づいていた、と知りぎくりとした。

「制服着ると、一緒にいたくなさそうにすんな」

「制服着ると、直輝は一層ぎくじとした」

思わず有衣を凝視してしまい、有衣が言い辛そうに小さな声で付け加える。

「早く帰る、って言つたら、ほつとした顔してました」

一度早く帰ると言い出した日があつたことを、直輝は思い出した。あれは、直輝の反応を見るために、わざと言つたことだったのか、と初めて知る。

一緒にいたくない、と思つてたわけではないが、ほつとした気分になつたのは間違いなかつたため、身につまされる。

「…」「めんね。俺は、君が高校生だつて知らないくて、驚いて、どうしていいかわからなくなつてたんだ」

「それだけ、ですか？」

「どういう意味？」

「私が、亡くなつた奥さんと同じ名前だから。一緒にいよつと思つてたのに。」

私が高校生で、まだ子どもだから。それだと全然釣り合わないから、だから距離置こうつて思つたんじゃないんですか」

最初、有衣が何を言つてゐるのか、直輝にはその意味すらわからなかつた。

そんなことは考えたこともなかつたからだ。

慧に、有衣が唯の身代わりだと勘違いしていると言われたことを思い出して、ようやくその意味を悟る。

「そんなこと、考えてたの」

「最初に会つた時、名前聞いて驚いてましたよね。」

それに、好きだつて言つてくれた時も、奥さんに代るものになつてほしかつた、つて

根深い有衣の疑いに、直輝は唖然とした。

つまり、有衣は直輝の愛情の根本からして疑つてゐるということだ。勘違いを引き起こすような言い方と、最近の態度に問題がありすぎた、と認めて直輝は内心かなり凹んだ。

「名前を聞いた時は、確かに驚いたよ。でも良く考えればそこまで

珍しい名前でもないから、ありえることだと思つた。

だけど、それで君を唯の代りにしようと思ったことは一度もないよ。というか、今君が言つまで考えもしなかった。

唯は君とは全然似てない人だつたし、君の代りがいないよう、唯の代りもいないと思つてる。

だから、代るものになつてほしかつたと言つたのは、人格とかじやなくて、ポジション的なことのつもりで。

それにだいたい、君が気になつていたのは名前を知る前からだつたんだ

言つてから、直輝ははつと口を噤んだ。

弁解する気持ちが強く出たせいか、言わなくてもいいことまで言つてしまつた。

有衣の視線を感じて、直輝は自分の顔に熱が集まるのを感じた。

「名前を知る前、つて……？」

「いや、その」

「いつですか？」

「……なんか、楽しそうだね」

つい先ほどまでの有衣は落ち込んでいたように見えたのに、今は期待が目に浮かんでいる。

直輝は、結局先に惚れたほうが負けだ、と苦笑した。

まあいい、これで有衣の気持ちが解れて、自分の気持ちがちゃんと伝われば、と直輝は口を開く。

「最初に会つた日、緊張してた君が、ハルにつられて笑顔になつたとき。

あまりの変わりように驚いたし、その笑顔が眩しいなつて思つた。そんな風に、異性に惹き付けられたのは、久しぶりだつた

「唯さんの、亡くなつた後、初めてでした？」

有衣の口から、唯の名前が出たのは初めてだつた。

身代わりで無いと分かり、有衣も唯も一個の人間として見られるようになつたらしい。

少しだけ緊張したよつて唯の名前を口にし、言葉を慎重に選ぶ有衣がいとしい。

「やうだね。だから正直、自分でも混乱したし。君を傷つけんなこともしてしまって、後悔してるよ」

「あ、あれは…もういいんです。私も、勝手なことじたって反省してますし」

「うん。それで、つまりはね。俺は君を唯の身代わりだと思つたことは、無いってことだよ」

「わかりました。変なこと聞いて、ごめんなさい」

潔く謝った割に、有衣の顔は、まだ聞きたいことがあると語つている。

何でも話してほしいと言つた手前、直輝も何でも聞かなければ、と思つていた。

「言いたいこと、他にもありますだね」

「…制服、着てるけど、まだ気になりますか？」

「はは…」

思わず渴いた笑いが漏れてしまった。

正直なところ、我に返れば気にならないわけではないのだが、それでも離せないのでから気にしてはいられない。

「もうわざわざ着替えを持って来なくて、いいよ」

といつあえず今のところ、これが直輝の精いつぱいの答えた。

有衣は、直輝の気持ちが初めて心まで伝わってきた気がして、嬉しかった。

多分、年齢のことば、まだ完全に払拭してはいないところのはわかる。

それでも、どうしてもあともうひとつだけ、言いたかった。

握ってくれている手をぎゅっと握りしめて自分を奮い起こすと、おずおずと言葉を出す。

「…キス、したいです」

小さな声に、直輝の手がぴくりと反応する。

その途端、とんでもないことを言つてしまつたような気がして、有衣は顔を真っ赤にして俯けた。

直輝が椅子から立ち上がる気配に、そろりと顔を上げると、直輝の顔が近い。

繋いでいないほつの直輝の手が、ベッドの横の柵を掴み、まず最初に額にキスが落ちる。

また額なんだ、と有衣はかなりがつかりしてしまつたのだが、直輝はそれをわかつていていたように小さく笑つた。

「ずっとしなかつたから、不安だつた?」

「…はい」

「ごめんね」

瞼に、頬に、鼻に、顔中にキスが落とされる。

くすぐつたくて、恥ずかしくて、有衣が思わず笑いを零した時に、唇の端にキス。

「…もつと、ちゃんと」

抗議するよつたな、でもちゃんと強請る言葉と田線に、直輝はあつさりと白旗を上げた。

久々に触れ合つ唇は、わだかまりを融かすには十分な甘さだった。

23（後書き）

仲直り終了です！！
あ～…長かったです。

ようやく、ふたりの間の問題が解決。
これで、ふたりの仲は安泰ですね
この後待つてるのは、らぶい生活！

明るい未来！（笑）

翌朝、副作用も出ず気分も安定していた有衣は退院して良いことになった。

直輝が清香から預かつた保険証やら何やらで会計を済ませるのを、有衣は晴基とベンチに座つて待つてているところだ。

本来病院が開く時間にはまだ遅していないが、慧と直輝で特別に早くしてくれるよう取り計らつてくれたらしい。

この後は、学校へ行くと言つた有衣を心配した直輝が、送ってくれることになつていて。

そういうわけで、有衣はまた制服着用でいるのだが、先ほどから通りかかる看護士たちの視線をいちいち感じる。

有衣自身は昨日は具合が悪かつたせいもあり、あまりよくわかつていなかつたが、実はかなり注目を浴びていたのである。

客観的に見ても、直輝は人から好かれやすいタイプであり、実際病院内でも密かに人気があつた。

これまで女性を寄せ付けなかつた直輝が、しかもお姫様だつこで連れてきた人物ということで、既に噂も広まつていて。

そんなことは露ほども知らない有衣は、控え目ながらも値踏みされているような視線に、かなり居心地の悪い思いをしていた。

直輝絡みで見られているのだろうと予想はついたものの、どうにもできない。

看護士は、どういうわけか綺麗なひとが多いし……と、だんだんネガティブな考えが頭の中に渦巻く。

制服なんて着ないでいたほうが、よかつただろうか。そんなことを思つていると、自然と視線も下がつてしまい、膝の上の自分の手だけが見える。

「ゆいちゃん。だいじょうぶ?」

下を向いてしまつた有衣を、晴基は心配そうに見上げる。

「大丈夫。ありがとうございます。心配させちゃって、『めんね

「うん」

返事はするものの、晴基はまだ心配そうな顔のままだ。

安心させるよつて、手を繋いで笑いかけてあげると、よつやく晴基も笑顔を見せた。

出口まで見送ってくれた慧にお礼を言つと、駐車場へ向かつて歩き出す。

荷物は直輝が持つており、有衣は右手に晴基の左手を繋いでいる。本当は、晴基は直輝が抱つこじようとしたのだが、晴基が有衣から離れようとしなかつたため、晴基を挟む形になつた。

有衣はこの歩き方がなんとなく本当の親子のように感じられて内心嬉しかつた。

しかしやはり、制服がアンバランスでいけない。

有衣は、直輝もこんなふうに感じていたのかな、と思いつらりと直輝を見上げた。

有衣の視線に気づいた直輝が柔らかな視線を返し、有衣はそれだけでも再び幸せな気分に浸れるよつた気がした。

朝の保育園に行くのは、有衣は初めてだ。

門のところには、何人かの先生方がお迎えに出でている。

その中に、譲の姿を見つけた有衣は、昨日のお礼を言おうと手を振つた。

譲は手を振る有衣に気づいたが、同時にその横で撫然とした直輝にも気づき、内心苦笑した。

まず最初に園児に挨拶をして引き受ける決まりであるため、譲は晴基と挨拶をして中に入れてから次に直輝に挨拶をする。

「おはよつじやこます」

「…おはよつじやこます。今日も一日よろしくお願ひします」

むつりと挨拶を返し、棒読みじみたお願いの言葉を言つた直輝を、

有衣は不思議そうに見る。

ここまで不機嫌さを顕著に出しながら誰かに応対している直輝は見たことがない。

だがその理由がよくわからないまま、有衣はいつも通り譲に接する。

「譲くん、おはよう。昨日はありがとうございましたね」

「おはよ。もう大丈夫?」

「うん。大丈、…」

言いかけた有衣は、途中で言葉を切つた。

今まで晴基と繋いでいたその空いている手に、直輝の手がするりと絡められ、驚いたからだ。

心なしか、もう帰ろう、と後ろに引かれている氣もする。

直輝の様子を窺いながら有衣と話していた譲もそれに気づき、笑ってしまうになりながら有衣を帰らせる。

「じゃ、また学校でな」

「え? あ、うん。後でね」

有衣はよくわからないまま、直輝に連れられて車へ戻る。

そんなふたりの後ろ姿を見ながら、鈍すぎる似た者同士だな、と譲は笑いをかみ殺した。

直輝はしばらく無言で車を走らせた後、広めの道路の路上に駐車した。

有衣が譲に手を振り、笑顔を向けたのを見て、胸の中にもやもやとしたものを感じていた。

昨日マンションの下で譲と会つたことを思い出し、ついでに運動会の日楽しそうに話していた有衣まで思い出し、不機嫌が深まつてしまつ。

しかも、有衣は直輝が不機嫌になつた理由に全く気付いていないといつのがもどかしい。

「…武先生と、仲いいよね」

「え?」

自分でも、陳腐な言葉を吐いてしまった、と思つた。

一回りも年下の子を好きになつて、それよりももう一回り年下の男に嫉妬するなんて、情けない。

しかも、その相手にはそれを知られているらしく、いつのも、なんとなく腹立たしい。

そして案の定意味のわかつていなさうな有衣の表情に、直輝は小さくため息をつく。

「ごめん、なんでもないんだ」

有衣は、よくわからないまま直輝が言葉を收めようとしたことが不満だった。

昨日直輝が言つたのと同じように、有衣だって直輝に何でも話してほしいと思っているのだ。

「…ずるいです」

「え？」

「私には全部言わせて、自分が言わないのはざるいです」

有衣の言葉で、直輝は自分が昨日有衣に言つたことを思い出した。確かに、有衣には何でも話してほしいと言つたのだから、自分もそうしなければ不公平であり発展性も限られる。

情けないとか、かつこ悪いとか、いろいろと思つことはあるが仕方がない、とある意味開き直る。

「武先生と話してる君は、楽しそうだな、って思つて。……腹が立つ」

有衣は、ぽかんと口を半開きにして直輝を見つめた。
まるで、嫉妬されているように聞こえる。

直輝は大人の男性で、高校生の男の子なんて相手にしない、と有衣は思つていた。

もしかして、直輝は讓が自分と同じ高校生だとは知らないのかもしれない、と思いつく。

「あの、讓くんは、私の1コ下で…」

「知つてるよ。後輩なんだつてね」

「え？ 知つてたんですか？」

「まあ…成り行きで」

今まで見たことのない、拗ねているような直輝の表情を、有衣はじ
いと見つめる。

有衣の視線をまともに受けた直輝は、思わず赤面しそうになつて目
を逸らした。

自分は、昔からこんなに独占欲が強く嫉妬深かつただろうか。

30過ぎると男はねちっこになると聞くし、もしやその影響か、と
直輝は居たたまれなくなり窓の外に目をやつた。

ふつ、と空気が動いたような気がして有衣のほうへ向きなあと、
有衣は口元を押さえていたが目元は笑っているのがわかる。

「どうして、笑うの」

少しだけ、むつとしながら聞くと、有衣はますます笑みを深める。

「…嬉しいくて」

「嬉しい？」

「これって、やきもち、なんですよね？ だから、嬉しいです。

直輝さんは大人だから、高校生の男の子なんて氣にもしないと思
つてたし…」

「するよ。君と歳が近いってだけでも、俺には懸念材料だ。

それに、彼相手だと、君がいつも俺に話すときは違う感じで喋
つてるから余計にね」

違いがあるとするならばそれは、好きな人相手とただの友達相手と
の違いだ。

有衣は咄嗟にそう思い、それでもそんな些細と思えることで直輝が
心を割いてくれるのが、またさらに嬉しく思う。

白井や慧に言われた通り、直輝に想われているということだが、現実
として実感できた気がした。

「…また笑ってる。まじめに聞いてる？」

「聞いてます。でもやっぱり嬉しいんです」

直輝は、そんな有衣を見て苦笑を漏らした。

やきもちを妬かれて嬉しい、と笑う有衣もかわいいと思つてしまつ

のだから、もうどうしようもない。

「まあ、あんまり心配させないでもらえるといいかな……」

「心配なんて、いらないですよ。だつて私は、…直輝さんが好きな
んです」

照れたように小さめの声で、それでもきつぱりと言つて切る有衣に、

直輝はいとしくてしようがないという顔をする。

こんな有衣が相手だからこそ、今まで自分ですら知らなかつた自分
を次々と発見してしまつのだ。

直輝は通りをちらりと見て人が少ないのを確認すると、助手席のほうへ体を動かしてシートの端に手をつくと、有衣にキスをした。
車が停まつてもベルトを締めたままだつた有衣は、身動きもできな
いまま覆いかぶさられているよつた体勢に、鼓動を速める。
いつもよりも少しだけ性急に口内を探られて、有衣はくつたりとシ
ートに全体重を預けることになる。

直輝の服に縋りつくよつて添えられていた有衣の手が、力を失くし
てぱたりと落ちたところで、直輝はようやく唇を解放した。
そして、仕上げのように軽く音を立ててキスを落とすと、元の姿勢
に戻つてシートベルトを締め直す。

「じゃ、行こつか」

「う…」「これじゃ、行けないじゃないですか…」

まだふにゃふにゃになつたままの有衣が、ギアに手を伸ばした直輝
の手に、抗議するよつに手をかける。

いつもより、加減せずにキスを仕掛けた自覚のある直輝は、小さく
笑つた。

「学校までもうちょっとあるから、大丈夫でしょ」

「直輝さんばっかり余裕で、ずるいです…」

まだ続く有衣の抗議は聞こえないふりをして、有衣の手を巻き込んでギアを入れる。

手を繋いでドライブなんてあまりしたこと無かつたな、と思ひながらも、学校までのしばらくの時間手は離さなかつた。

門の前まで行くと言つたが、有衣が一本手前の道でいこと言つので、直輝はそれに従つた。

有衣と同じ制服を着た学生がだんだん道に増え、門まで行くのは実は気が引けていたので助かつた。

車を停めて、シートベルトを外す有衣を見ていると、急に有衣が直輝の顔を見た。

「あの、直輝さん、譲くんのことで気にしてくれたじゃないですか。私も実はちょっと気にしてました。病院にいっぱいきれいな看護士さんたちがいたから」

「ああ、でも俺、彼女たちとあんまり付き合い無いんだよ。病院の外で会つたりとか全然しないし。だから、大丈夫」

きれいな看護士、というところを否定しなかつたので、有衣は内心ほんのちょっとびりむつとした。

しかも病院の中なら大丈夫なんて、さきほど感じたあの視線の数々からはとてもそれは思えない。

自分のことは棚に上げ、有衣は直輝の鈍さを嘆いた。

「でも白井さんとか、仲よさそうでした……」

「しろ……、冗談でもそれは無いと思うけど」

直輝は白井の顔を思い出し、げんなりしたように言つた。

それでも、さきほどの有衣と直輝の立場を逆にしたような会話に、不思議と笑みが浮かぶ。

「わ、笑わないでください」

「うん。ごめんね。さつきと逆だから、君もこんな気持ちだつたんだなつて思つてね」

結局のところ年齢の差なのだろうが、有衣は余裕の窺えるように見える直輝を少しだけ複雑な気持ちで見ていた。

少しでも意表を衝いてみたくて、降りる間際、直輝の頬に軽くキス

をしてみた。

驚いたように有衣を見た直輝の表情を一瞬だけ見て満足したが、恥ずかしさであとは見られずそのまま歩きだしてしまった。

呆気に取られその後ろ姿を田で追つた直輝は、だんだん顔に熱が上るのを感じながら、有衣にやきもどり余裕であるいと言われたことを思い出す。

「どこが、余裕だよ…」

制服を着た有衣に路駐した車の中でキスを迫り、やきもちを妬く妬かないで喜んだりして、全然どこも余裕なんてない。有衣の唇が触れた部分を指先でなぞりながら、直輝は完ぺきに赤面した顔を俯けてハンドルに突っ伏した。

24（後書き）

甘つ…。

今回は、譲のことでやきもち妬いちゃいました！な直輝でした。
人通りが少ないと確認する辺りまだ常識人＆小市民な直輝です
が（笑）。

開き直った直輝は、相変わらず大胆です。

でもそれに対する有衣も、ちょびっとずつ大胆になってきました。
こんな感じで、言いたいこと言い合って、らぶらぶしていかせてあげたいかな～と思つてます^ ^

有衣を送った後少し遅れて病院へ戻った直輝は、妙な居心地の悪さを感じた。

というのも、歩く先々で病院スタッフの視線をちらちらと送られていたからだ。

内科のスタッフたちに至っては、ちらちらといけないではなく、じーっと見る者もいた。

師長に小突かれてよつやく仕事に入つていく彼女たちを尻目に診察室へたどり着くと、ようやくほつとする。

昨日は夢中で意識していなかつたが、有衣を運んだときはかなり注目を浴びていたような気がする。

今日の視線は多分それが原因なのだろう、と予想がつき、直輝はやれやれと溜息をついた。

午前の診察が終わつたところで、携帯を握んで席を立つ。外へ行こうとしたが、事務処理をしているスタッフたちの会話が聞こえてきたため、直輝はその手前で立ち止まつた。

「あれは溺愛してると見た」

「だよね。いまどきお姫さま抱つひつて、ないない」

「にしても、高校生かあ……」

「そこまで年下OKだつたなんて、盲点だつた」

「確かにー。でも奥さんは年近かつたはずなんだけどなあ」

「まあ、年は関係なかつたんじやないの」

間違いなく自分の方が話題にされているのがわかり、出るに出づれない。

仕方なく、しばらく彼女たちの会話に不本意ながら耳を傾けるはめになつた。

「でもけつじゅうキレイな子だつたよね」

「うん。先生の子と一緒に座つてた子でしょ？」

「そうそう、私も朝見た」

「制服着てなかつたら、高校生には見えないかもね」

「あーいいなあ、若くてキレイでしかも愛されちゃつててさあ」

この会話で、有衣が看護師たちを気にしていたことの訳がわかる。朝、会計が終わるのを晴基と待つていた時に、自分が病院に戻った時と同じような視線に晒されたのだろう。

この分だとむしろ自分よりもかなりの視線を受けたに違いない、と予想できる。

いくら無我夢中とはいえ、あの運び方はやはり無かつたか…と、直輝は昨日の自分に苦笑した。

「でもさ、年の差かなりない？」

「確かに先生が30で」

「で、高校生だから…3年として、とりあえず一回り？」

「うわー。干支同じ、つてやつ？」

この辺りで、直輝はだんだん頭痛がしてきそうな気分になつてきた。あまり考えていなかつたが、干支が同じとは…と、今更ながら微妙なショックを受ける。

「もうあれだね、紫の上」

「言えてる」

“紫の上”という単語が耳に入った途端、直輝は思わずよろりとしまった。

有衣が紫の上ならば、直輝は源氏である。

気にいつた若い女を勾引かして自分のものにし、理想の女性に仕立て上げた、源氏。

直輝は別段勾引かしたわけではないが、様々な面で有衣を自分好みに作り上げていくことは可能である。

ようやく有衣の年齢のことを克服しかけていたところで、思わず伏兵じみた言葉を聞いてしまい、直輝は深くため息をついた。

その後ろで人の気配を感じ、慌てて振り向くと苦笑を湛えた師長が

いた。

「あ、すみません」

「いえいえ。…先生も、大変ですね」

午前の診察の際フォローに入ってくれたのは、ずっと師長だった。他の看護師だと、おそらく昨日のことが気になってしまっから、師長が気を利かせたに違いない。

「…すみません」

いろいろな意味を含めて、もう一度謝ると、師長はさらに苦笑を深める。

「あの子たちも悪氣があるわけじゃないんですけどね…」

「ええ、まあ…それはわかつてます」

「でも、私としては少し安心しましたよ。先生は…いろいろとご苦労もありましたからね」

師長は、直輝の母親とあまり年が変わらない。唯を亡くした時の直輝も知っているだけに、温かな言葉が直輝の心に染みた。

「…ありがとうございます」

思わずお礼の言葉が口を衝いて出た。

師長は今度は苦笑ではなく、本当の笑みを浮かべる。

「ずいぶん大切にされてると見受けましたけど、『結婚されるのかしら』

まだ考えたこともなかつたことを言われ、直輝は頭が白くなつてしまふ。

「け、…っこん、ですか…。いえ、まだ彼女も未成年なので…」

「あら、未成年でも結婚すれば成年扱いですよ」

「は…それは、まあそうですね」

「年の差なんて、実は大した問題じゃありませんよ。どうせ最後は一緒なんですから」

ふふ、と笑つてから、師長は直輝の前を通り越して先に出て行く。そして無駄話をしていたスタッフたちを窘める師長の声が聞こえて

きた。

そのまますぐ後ろから直輝も出て行くと、聞かれていたかもしけないとぎょっとした顔のスタッフが目に入り、内心苦笑した。

屋上に出ると、もう風がだいぶ冷たい。

陽が射していなければ、羽織るものが必要になるだろう。

それでも、普段車で通勤していない直輝が少しの時間でも携帯を使える場所と思うと、ここしかない。

さつそく携帯の電源を入れると、有衣から短いメールが入っていた。

『今朝は、送つてくれてありがとうございました』

たつたこれだけの文だ。

頬に軽くキスをして、恥ずかしそうにそのまま振り返りもせずに歩いて行つてしまつた有衣を思い出す。

多分まだ照れていて、何と送つてよいかわからなかつたのだろう。

そんな有衣の様子が思い浮かぶようで、直輝は小さく笑つた。

無意識のうちに、有衣に触れられた頬を手で触つていた直輝は、先ほど師長に言われたことを思い出した。

「…結婚、か」

有衣を想つのに必死で、今まで一度も考えたことがなかつた。

しかも、出会つてから、また付き合い始めてからまだたつたの数か月しか経つていない。

だが、それでは結婚する気は無いのか、と問われればそんなことはない。

実際今の生活を考えてみても、朝晩一緒に過ごさないことを除けばほとんど結婚している状態と変わらない。

師長に答えた言葉からして、将来的には結婚すると決めていふのうな考え方だつた。

それに、結婚したときのことを想像してみると、幸せな気分になれることは間違いない。

しかし、実際問題有衣はまだ高校生であり、いくら結婚すれば成年

扱いとは言え、やはり未成年には違いない。

有衣の親のこともある。

そういうえば、清香に改めて『挨拶に伺つ、と約束している。

直輝はそのことを思い出して、少しだけ重い気分になつたが、先延ばしするわけにもいかない。

覚悟を決めると、直輝は清香に連絡を取るため、会社の電話番号をブッショした。

スカートのポケットの中で、メールの着信を知らせる振動を感じ、有衣は手を止めて携帯を慌てて引っ張りだす。

『体調どう? 今日はもう辛くない?』

昼休みが終わって5限目も始まり、今日はお昼のメールは無いかと思っていた有衣は、嬉しさに顔を綻ばせる。

自分から送ったメールも、朝のキスの恥ずかしさが抜けきらず、何の味気も無い短いものしか送れていなかつた。だからいつも通りのメールを送つててくれたことでも、嬉しさが増す。

『大丈夫です。今日は授業もあんまりなくて、学祭の準備なので勉強するより楽ですし』

『学祭? 何するの?』

『うちのクラスは、コスプレ喫茶です。着る服作ってるんですよ~』

『ちなみに何着るの』

有衣は、ナース服を着ることになつていた。
ちなみにみどりはメイド服である。

素直に質問に答えるよかつたのだが、なんとなく恥ずかしい思いもありすぐに返信できない。

それに、高校最後の学園祭に直輝が来てくれたら楽しそうだ、と思いい有衣は答えは送らないことにした。

『まだ内緒です。あの、一般公開は今度の日曜なんですが…直輝さん、来ませんか』

ざきざきしながらお誘いのメールを送った有衣は、携帯を握りしめたまましばらく待つ。

周りで聞こえるシンの音と、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる。

緊張しながら携帯を見つめるが、返事はまだ来ない。

学校に来るのはやはり抵抗があるだろうか、やめておいたほうがよかつたどうか、とだんだん心配になってくる。

やっぱり今の無しにする、と送ろうとしたときに、直輝からの返信がようやく届いた。

『ちょっと、考えさせてね。じゃあ、また夜』

とりあえず、すぐに断られはしなかつたことに安心する。

気持ちが軽くなつたせいか、その後の作業は心なしかすいと進められた気がした。

割当分の最後の一着、自分の衣装を縫い終わった有衣は、ぐっと腕を伸ばし背を反らせた。

周りを見回すと、みんなもだいたい縫い終わつており、まだの子もあともうひと仕上げというところのようだ。

みんなで試しにちょっと着てみようといつ話になり、教室のカーテンを閉め、できあがつている人から順に着替えて行く。

ナース姿になつた有衣と、メイド姿になつたみどりとで、お互いを見てみるとなんだか妙な気分になる。

有衣よりもだいぶ小柄なみどりは、フリルのあしらわれたメイド姿だとまるで人形のようでかわいい。

すらりとした有衣も、ぴったりと体のラインが出るしかも短めのスカートのナース姿だと高校生とは思えないほどセクシーに見える。早い話が、ふたりとも似合ひすぎていた。

「なに、あんたら似合いすぎ!」

「写真撮る。で、ちょっと加工してチラシにするのどう?..」

「あ、それいい!」

「え、ええー？？」

抗議する間も「えられずポーズを取らされて写真を撮られ、チラシに写ることが決定してしまった。

そしてすぐに撮った写真がメールで送られてきて、有衣はみどりとふたり顔を見合わせて苦笑する。

それでも携帯のディスプレイを見ながら、もしも直輝が学園祭に来ないと言つた時はこの写真を送つてみようかな、と思つ有衣だった。

25（後書き）

日常に戻りました。

病院内では噂されています^ ^；

直輝は“結婚”についてちらつと考える機会がありましたね。
清香に連絡も取ったことですし、だんだん考えることも増えるかも
しません。

次回は学園祭です！！

直輝と有衣がうまくまとまつたので、ようやく書けます…^ ^
一般公開日、直輝は来てくれるんでしょうか

制服着用の義務が無い一日間が始まる。

私服で歩く学生たちに混じって、有衣は少しだけ浮かれた気分で学校へと向かった。

今日から学園祭が始まるのだ。

一田田は学校内のみだが、一田田は一般公開もされるため毎年大勢の人々が訪れる。

昨晩ようやく直輝から行くという約束を ほとんど無理矢理取り付けたのだが、とにかく直輝も来てくれることになった。

そのことが有衣の浮かれ気分をいつそう浮き立たせている。教室は既にカフェのようにセッティングが終わっている。

更衣室でナース姿へ着替えを済ませた有衣は、これから始まる非日常への期待でいっぱいだった。

クラスの人員は4分の1ずつ、時間帯によって交替することになっている。

有衣はみどりと同じグループで、最初の2時間の担当だ。

くじ引きによつて決まった時間帯だが、直輝が来ることを考えればかなり都合がよかつた。

担当の時間が終わつた後は、ずっと直輝と一緒に過ごせるのだ。

「有衣3番、みどり5番で指名だよー」

「はーい」

有衣は返事をしながら、またかとみどりと顔を見合わせる。

今サービスを終えて控室に戻ってきたばかりだったといつのに、また指名だ。

入口に写真を貼つたコルクボードを置き、客がウェイターを選べることになっているのだが、先ほどから指名がかなり多い。

有衣が指名された3番テーブルへ行くと、譲が座っていた。

「あれつ、譲くん来てくれたの」「どんなんかな、と思って」

「いらっしゃいませ。『注文は?』

マニコアル通り言つが、譲はじつと有衣を見るばかりでなかなか答えない。

「譲くん?」

「いやあ、なんつーか、チラシとか見た時も思つたけど、実際見た
らマジで…すげえね」

「え、変?」

途端に心配になつてきて、有衣はスカートの裾を軽く握りしめる。
何もわかつていない有衣の反応を見て、譲は軽く苦笑いを浮かべた。
「いや、似合つてるけど。指名かなり多いだろ?」

「あ、うん。そうなの。なんでだらうね?」

「…まあいいや。それで、明日ハルパパは来んの?」

「うん、来てくれるつて」

「あんたがこのカツコしてるつて、知つてる?」

「ううん。当日まで秘密、って言つてあるの。そのほうが楽しみで
しょ?」

「いや、てか…大丈夫なのかよ、それ」

「だつて譲くん今似合つてるつて言つてくれたし」

そういう問題じゃない、と譲は心の中で咳きながらますます苦笑を
深めた。

直輝もかなり鈍いが、それに負けず劣らず有衣も自覚が無くて困る。
譲が心配したのは、似合いすぎている「スプレと、有衣田当てで順
番待ちさえしている男たちの多さだ。

実際、譲も有衣を指名したため整理券を渡されたのである。
直輝の独占欲の強さを身を以て感じ取つている譲としては、直輝が
心配であり、また有衣の無自覚さを思つと哀れでもあった。
好きな子がこんなカツコをしていたら、男としてはイロソナ意味で
ツライだろうに、と。

なんとか忙しい2時間こなすと、今度はみじつと一緒に校内を回る。

だがふたりとも、何度も指名されたためかなり疲れていた。

朝はしゃいでいた気分はかなり落ち着き、なんとなく見ながらぶらぶらと歩く。

「明日は今日よつばしいかもね」

「うーん…ちょっと疲れた」

「有衣はさ、彼が来たら打ち切つてもいいんだ？」

「でも悪いよそれは」

そう言いながら、“彼”という言葉の響きがなんだか新鮮で嬉しいくて、有衣は思わず笑みを浮かべた。

有衣が幸せな気分なのがわかつて居るのか、最近のみじつは直輝のことを悪く言わない。

何といふか、認めてくれたのだと思つと嬉しい。

小さい頃からいつもみどりを頼つてきたし、直輝とのことで何度も頼つて居る。

自分もこれで少しほ、みどりのお荷物から成長できたのではないかと思ひ、有衣はほつとした。

いろいろな食品のにおいて、お腹がすいてきた頃。

中庭に続く道沿いのテントでキムチチャーハンを作つて居る讓に出くわした。

「あ、譲くんたちこでやつてたんだ」

「食つてく？ つか、むしろ食つてけ」

「いいよ~。うちちらのにも来ててくれたもんね

「まいどあり」

何個か作り置きがあつたが、譲が作つてくれるところでのそれを持つ。

「今ね、明日の下見してるんだよ。直輝さん来たら回るとい決めと

「うと思つて」

「へえ。…明日は来るなよ」

「え、なんど?」

「なんでって、多分俺には会いたくないと思つんだけど」「そつ言われて、有衣は直輝に学校へ送つてもうつた日のことを思い出した。

朝一緒に保育園へ行き、そのとせ譲と話してたことに、直輝は嫉妬していたのだ。

楽しそうに話しているのが、腹が立つ、と言つた。

ついでに車から降りるとき自分からキスをした」とまで思つて出しつつまい、有衣は頬が熱くなるのを感じた。

「…ちよつと有衣。何思い出してんの」

「え? う、ううん何でもない」

譲とみどりが訝しげに有衣を見たので、有衣は慌てて首を振る。

「でもあの、ハルくんも来るし。ハルくんは多分譲くんのこうこう姿見たいと思うんだよね」

「ハル?」

「うん。ハルくん、譲くんのこと尊敬しちやつてる」

「いや、そこじやなくて。何、ハルパパはひとりで来るんじやないの?」

「え、子連れデート?」

譲とみどりが口々に尋ねるのを、有衣は不思議そつと見返しながらあつやりと頷く。

「当たり前じゃん」

「当たり前じゃ、ねえし」

がっくりしてしまつた譲は思わず炒めるのに使つていたへらを取り落とす。

子連れの学祭、テーマはどつなの、と譲とみどりはふたりで顔を見合わせた。

「俺、預かってやるうか?」

「なんで？」

「なんで、つて…学祭デートだし」

「ふたりきりじゃなくて、いいの？」

有衣は、直輝を誘った時には既に晴基もセットだと思つていた。

ふたりにそう言われて、初めて考えてみる。

直輝とふたりきりで「デートができるといつのは、実のところかなり魅力的な話ではある。

直輝と付き合い始めてからも、外で「デートらしきもの」をしたことはまだほとんどない。

それに、いつも晴基と一緒にいるため、直輝とふたりきりの時間が過ぎるのは、夜部屋で過ごす少しの間だけだ。

だがそれでも、晴基が傍にいるのはもうすでにほとんど当たり前のことになつていて、べつにそれはそれでいいと思つていた。だから明日も、晴基と一緒にでもいつこうにかまわないのだ。

それに、あの日3人で歩いた時のように、親子手繋ぎをまたできるかもしれない。

そう思うと、有衣は自然に笑顔になる。

「全然大丈夫だよ。ハルくんと一緒にだと、ハルくん真ん中にして手繫いだりして、楽しいよ」

笑つてきつぱりと言い切る有衣に、譲とみどりは仕方ないと呟つようには目を合わせて小さな溜息を零した。

晴基を連れてこようとする直輝も直輝だが、何の抵抗も無くそれを受け入れようとする有衣も有衣だ、と思つたのである。

既に“恋人”を超えてしまつたような雰囲気さえ感じられるような気がした。

「なんか、もう結婚しちゃったみたいだね」

みどりは思わずそう言つたが、有衣はそれを聞いてもただ嬉しそうに笑つっていた。

譲と別れて、道をまっすぐに下つていくと中庭に到着する。

中庭には、都市工学科の3年生が作成した橋がある。

ちょうど学園祭の時期に3年生が作るため、橋の構造はもちろん、色や形状も毎年異なっている。

「うわ、やっぱりカッフルすごいね」「だね」

「明日来るんでしょう?」

「の、つもり」

「アレは子連れでもいいのかね」

「さあ……」

疑わしそうなみどりの言葉に、有衣は少しだけ苦笑した。

この橋には、橋の真ん中でキスをしたカッフルは永遠に幸せになる、というジンクスがある。

みどりがアレと言ったのはここのことだ。

そんなに昔のことではないそうだが、橋の真ん中でキスをしたあるカッフルが、そのまままでたく結婚したというのが始まりらしい。高校生という年代は、とにかくそういうものは崩れるだけ崩りたいものなのだ。

そんなわけで、この橋は学生や卒業生の間で密かにかなりの人気がある。

有衣も明日、もちろん直輝が頷いてくれればの話ではあるが、ここに来るつもりでいた。

確かに、子連れでという話は今まで聞いたことはないが、とにかく直輝と来られればいいのだ。

直輝も、ここではないにしろ、高校へ通っていた頃があつたはずだ。その時代は決して重なり合つことがないが、それでも一緒に学校という特殊なエリアを歩けるだけで嬉しい。

自分の姿を見てから後ろの校舎を振り返り、学校内とはいえ制服ではないから、直輝も少しは気楽だろう、と希望的観測をする。明日を想像して、有衣はほほ笑んだ。

26（後書き）

そんなわけで、学祭一日目でした！
一日目アートの前振りです（笑）。

ちなみに橋は母校での実話です^ ^

授業の一環と一種の出し物と、両方を兼ねて作っていたとのこと（
友人談）。

ジンクスは特にはありませんでしたが、まあ似たような話はちらほ
ら…。

観覧車の一番高いところ…っていうのと似てる感じですかね。

正門をくぐると、いかにも学校という雰囲気が当然なのだがひしひしと伝わってきて、直輝は一瞬硬直した。

だが、有衣に聞いていた通り制服姿の学生は見当たらず、それだけが救いだった。

そんな直輝の様子を、横で見ていた慧は苦笑する。

なぜ慧がいるのかというと、子連れデートを決行しようとしていた直輝に呆れ、晴基のお守りという名目で付いてきたのである。そういうわけで、慧の肩には晴基が乗っかっている。

慧は直輝よりも長身のため、晴基はその肩車を無邪気に楽しんでいる。

門から校舎までたどり着く前に、たくさんの学生たちが渡してくるチケットやチラシで手がいっぱいになってしまった。

律義に1枚1枚見ていると、その中に有衣のクラスの物を見つけ、慧は苦笑した。

載っているのは、イラスト風に加工してあるが明らかに有衣とみどりだとわかるふたりのコスプレ姿。

ちらと直輝を窺うが、直輝の様子だと同じチラシは渡されていないか、渡されていても気づいていない。

多分不機嫌になるだろう、と予想した慧は、直輝の目に触れる前にそのチラシを折りたたんでポケットにしまった。

慧の努力が無駄になつたのは、直輝が入口に置いてある指名用のロルクボードに気づいた時だつた。

貼つてあるのは、今の時間帯にウェイターをしている人の顔写真とコスプレ全身写真である。

“人気NO.1”などという煽り文句の書かれたステッカが貼られているところに、有衣の写真を見つけた。

薄いピンクのナース姿の有衣の写真の下には、語尾にハートが付いた『有衣です』という文字の書かれたシール。

頭に血が上りそうになった。

当日のお楽しみ、と言つて有衣は何を着るのか教えてくれなかつた。予備知識無しで来た直輝にとつては少々刺激が強く、しかも不特定多数に対して公開されていることが不満だつた。

「じゃあ、有衣ちゃんで」

「了解でーす」

ボードを見ながら半ば茫然としていた直輝の横で、有衣を指名する男の声が聞こえる。

これ以上他の人間にこんな姿の有衣を見せたくない、という一心で、直輝は普段からは考えられない行動力を發揮した。

順番待ちもせずに受付へ歩み寄ると、たつた今有衣を指名した男を牽制するように見てから、受付の女子に話す。

「悪いけど、有衣ちゃんは打切りしてくれないかな」

受付の係をしていた女子ふたりは、突然現れた整った顔の大人の男直輝を驚いて見上げる。

そして直輝の差し出したチケットを受け取ると、何かに気づいて顔を見合させた。

実は有衣が直輝に渡したのは、名前入りで、しかも密かに端にハートのシールが貼られたものだつた。

恋人がいる生徒は全員そつすることと、チケットの持ち主が恋人だと受付係にわからせ、順番を最優先に回すことになつていた。

「あの、…有衣、の？」

確認するよう尋ねる女子に、直輝は柔らかな笑顔で頷く。

ひとのものだとわかりつつ、あまりに優しそうな笑顔に頬を染めて、係のうちのひとりが中に入つていつた。

残つたひとりに、直輝はなおも言つ。

「打切り、大丈夫かな」

「え？ あ、あの…でも、もう受けちゃつた人もいて…」

「やう。それは、『めんね。でも、どうしてもお願ひしたいんだけど、どうしてもダメかな』

話を聞いているようで聞かず、押しの強さを本当に困ったような顔で隠して話す直輝に、ついに陥落。

わたわたと慌てたように、また中に入つていった。

その隙に、直輝はコルクボードから有衣の写真を外してしまった。そしてふたりが戻つてくると、後にナース姿の有衣も一緒に出てくる。

直輝の顔を見ると、有衣は嬉しそうに笑つた。

係のふたりに笑顔でお礼を言つと、直輝は有衣の手を取つてとりあえずその場から離れようとする。

そこで慧と晴基と一緒にいたことをよつやく思い出した直輝が周囲を見回せば、ふたりは列に並んで直輝に手を振つていた。

慧の顔を見ると苦笑が浮かんでおり、直輝は少しだけばつの悪い思いをした。

この後は有衣とふたりだと思えば心地好い緊張感を覚えたが、今はそれどころではない。

ぴつたりとしていて胸が強調されるような作りと膝上の 直輝から見れば膝からだいぶ上の丈、それにすれ違う人間の有衣への視線が気になる。

しかも、アップにした髪型とぱっちりめに施されたメイクが、いつもの有衣とは違う雰囲気を醸し出している。

「とりあえず、更衣室どこかな。それ、早く着替えよつ

「え…」

知らずに足早になつっていた直輝だが、有衣が突然立ち止まつたため手が突つ張り、後ろを振り向く。

有衣がどこか哀しそうな寂しそうな顔をしていたので、直輝は驚いてしまつた。

「有衣ちゃん?」

「…今日来るの、ほんとは嫌だったですか

「え？」

「だつて、直輝さんカフェでサーブもさせてくれなかつたし、服も全然見てもないのに着替えるって…」

全く見当違ひな有衣の言葉と、有衣の気持ちを考えてあげられなかつた自分に対して、直輝は苦く笑つた。

ちょうど見えた階段の陰になつてているスペースへ、有衣の手を引いて誘導してから答える。

「違うよ。その逆」

「逆？」

「…似合いすぎ。すゞしくキレイだし、そそられる」

有衣の耳に、ひそやかにそう囁く直輝の声が滑り込む。

直輝が直接的な言葉を使ってそういうことを言つのは珍しい。

そんな直輝の口から“そそられる”という単語が出てきたことが、どこか生々しい感じがして有衣は頬を紅潮させる。

「俺以外の誰にも見せたくない。だから早く着替えてほしいと思つたんだ」

「直輝さんだけだつたら、よかつたですか」

「…そうだね」

ある意味、それも困つたことになりそつだけど、と直輝は内心で付け足した。

「それだつたら、嬉しいです。じゃあ、着替えてきます。更衣室すぐそこなので！」

顔を赤くさせたまま有衣は直輝の手からすり抜けて走つて行く。

その後ろ姿を見ながら、大人げない自分の言動を顧みて、直輝はやれやれと溜息をついた。

だがそれにしたつて、あの姿は反則だろ？。

“高校生”の域を超えて、有衣を“女”に見せるのに十分だつた。もし事前に知らされていたらおそれぐ、いや確実に断固反対していた、と直輝は思つ。

今日約束の時間よりすこし早田に来ていてよかつた。

昨日の一田と今日の1時間半弱、これ以上誰かの田に晒すのは嫌だ。自分の田の届く場所で、自分だけの田が行く場所で、有衣を囲い込んでしまいたい、とさえ思つ。

そんな自分の危険と言えるほど想いに、直輝は苦笑を漏らさずにはいられなかつた。

急いで着替えたいのに、直輝の言葉が耳から離れず、有衣の手はもつたついた。

そそられる、つて。

誰にも見せたくない、つて。

止せばいいのに頭の中で復唱してしまい、真っ赤な顔で有衣はついにしゃがみ込んでしまう。

ペットボトルの水を取り出し、「ぐぐぐ」と飲んで熱を冷ますつとするが、あまり効果はない。

掌で頬を挟むと、頬が熱いせいか掌が冷たく感じる。

この間の入院したときから、直輝は少し変わったと思つ。今までは、優しくて温かくて、包まれているような感じがしていた。今は、それに加えて熱と少しの束縛と、力いっぱい抱きしめられているような感じがする。

でもそれが嫌だとは決して思わない。

むしろ嬉しくて、恥ずかしいながらも心地好い。

想いが通じ合うというのは、じつにうれしいのかな、といつも気がして、有衣は笑みを浮かべた。

着替えだけにしては、ずいぶん時間がかかるな、と直輝は思つた。有衣が走つていつてから、30分近く経とうとしている。

いろいろ支度するにしても、そんなにかかるものだろうか。

誰かに絡まれているとかじやないだろうな、とだんだん心配になつてくる。

有衣が走つていった方向へ歩を出すと、ひょいびドアを開けて出でくる有衣が目に入った。

遠めではあるが、髪も下ろされ、メイクもいつものナチュラルメイクに戻つていいのがわかる。

いつもの有衣に戻つていいのがわかり、直輝はなんとなくほつとしたような気分になつた。

声をかけようとした時、階段から騒がしく降りてきた男子たちが直輝と有衣との間に滑り込む。

「お、川名！」

「もう終わつたんか？」

「うん」

「お疲れー」

「西（にし）ヒヅナはこれからでしょ？」

「ああ、今から着替えるとこ」

会話を聞いていると、どうやら同級生らしいことが窺えた。苗字呼び捨てに、あだなつぽい名前で呼んでいたことからして、親しげに見える。

なんとなく話しかけるタイミングを逸してしまい、仕方なく階段下で待つことにする。

「つか、もう着替えちゃつたんか」

「けつこうつ頼まれたりとかしてて、写真撮りたかつたんだよな」

その声に、直輝はぴくりと反応した。

「写真？」

しかも、けつこうつ頼めた、って誰にだ。

「冗談じゃない。」

「後でもつかい着てくんねー？」

「うーん、…ムリ、かな」

「なんで」

理由を聞かれた有衣は、照れたようにえへへ、と笑つた。

それを見て直輝は、有衣がムリだと言ったその理由が自分なのだと

気が付いて、思わず笑顔になる。

自然と足が動き、有衣の隣に回り込んで有衣の手を取った。

有衣も、有衣の同級生たちも、驚いたように直輝を見る。

「誰？」

「あの、か…彼氏」

ひそひそと交わされたやり取りに、直輝は顔が緩むのがわかつた。
有衣の口から“彼氏”という言葉で紹介されるのは初めてで、言葉の響きと有衣の照れた顔が嬉しい。

「あ、写真NGの理由って…」

ちらと視線が向けられるのを感じて、直輝は小さく笑つた。

「あんまり他に見せたくないんだ。悪いけど、写真は遠慮してもらえるかな」

「あ、はい。すんません」

「そりゃそうっすよね」

あっさりと引き下がつてくれたところを見ると、このふたりも彼女持ちらしい。

少し余裕を取り戻してきた直輝の横で、有衣がひとり顔を赤くして脳内パニックを起こしていた。

そんな様子もいとしくて、たとえ彼女持ちの男相手でもこんな有衣を見せたくなくて、直輝は会釈すると有衣を促して歩き出した。

「川名の彼氏、かなり年上っぽいな」

「でもってベタ惚れ」

「つか、川名も彼氏絡むとあーなんだ」

「意外だつたな」

そんな会話が途中まで聞こえてきたが、距離が離れるにしたがつて声は聞こえなくなつた。

直輝は、まだ隣で顔を赤くさせたままぼんやりとしている有衣を覗きこむ。

「…大丈夫？」

「えつ、…あ、あの、大丈夫です。なんか、ちょっとびっくりしち

やつて

「何に？」

「あの、直輝さんが、あんまり大っぴらだから」

確かに、自分の態度は前と比べるとずいぶん変わった、と直輝は思う。

有衣が入院したあの日からだ。

抑え込んでいたものが爆発し、素直に出せるようになったのだろうが、まあ多少出し過ぎていいような気もしないでもない。

「ごめんな。やだつた？」

「いえ！ あ、う…嬉しかつた、です」

なんて、かわいい。

なんて、いといしい。

有衣を覗きこんでいた、そのついでとばかりに、直輝は小さなキスを浴びせた。

来たばかりの時に感じていた、ここが学校であるというプレッシャーなど、もう欠片も残っていない。

唇を離してほほ笑みを交わすと、午後も楽しみだな、と思つた。

学祭一日目です！

やり過ぎちゃったかな～感も多少あります（笑）。直輝のじぇらしー！&らぶあまで書けたので、楽しかったです。でもまだ前半が終わつたばかり。

次回は、学祭トーク後半戦です！

引き続き、ひぶあまの予定でじやこします

幾分人の少なかつた校舎内に比べ、外に出るとかなりの人だつた。手を繋ぎながらも前後一列で人に押し流されるように歩いていると、すれ違う人と肩がぶつかってしまった。

「痛…」

「大丈夫？」

直輝は握っていた有衣の手を少し強く引き寄せて一瞬離すと、後ろから両手を握りそっと抱きしめるような格好になつた。

ほとんど一体化しているような格好で、こうすればぶつかつても有衣ではなく直輝とぶつかることになる形だ。

直輝は背が低いというわけでは決してないが、有衣もそう低いわけではないうえに若干ヒールを履いている。

そのままだと顔面と後頭部がぶつかつてしまつため、直輝は自分の顔を有衣の頭の斜め後ろにずらした。

急に密着した姿勢と、耳に微かながら感じる直輝の呼吸に、有衣の顔はまた赤くなつてしまつ。

恥ずかしさにしばらく俯き加減で流されるまま歩いていると、有衣は道を間違えたことに気づいた。

このまま行くと、譲がいるテントの前を通りてしまつ。だが本来通ろうとしていた道の分岐点に戻るには、この人の流れはかなりきついものがある。

「ど、どうしよう」

有衣のこの声はかなり小さいものだつたが、直輝は聞き落とさなかつた。

「どうしたの？」

「間違えちゃいました」

「行きたいお店過ぎちゃつた？」

「じゃなくて、このままだと、行けないお店の前を通りちやこます

「…いけないお店？」

意味のわからない直輝の頭にはクエスチョンマークが飛び交う。元来有衣は嘘をついたりごまかしたりすることができない性格だ。言わなくてもいいことをつい正直に言ってしまった。

「この先、譲くんのクラスがお店やつてるんです。でも、今日は来るなつて言われて…」
有衣の言葉に、直輝の手に微妙に力が入った。
自分といふ今日はやめたほうがいいと言われたのだ、と直輝は気づく。

同時に、自分の嫉妬心や敵愾心にもろに気づかれているといつゝとが確定し、情けなさに直輝は深くため息をついた。

「…いいよ、行こう。売上貢献してやればいい」

そう言つと、有衣の表情は途端にぱっと明るくなつた。

その変化に安堵する一方で、譲に気遣われていることに直輝は内心苦りきつてしまつた。

直輝と有衣が前に立つたとき、譲は天を仰ぎたくなつた。
昨日せつかく忠告したのに何も考へてないような顔で笑う有衣をげんなりと見る。

「どうも」

「あ、どうも。ここにちは」

直輝の短い挨拶に、譲も慌てて挨拶を返した。

微妙な空気が流れるが、有衣は相変わらず気づかないでいるのか、気づかないふりをしているのか。

「譲くん、2つね！」

「はいはい」

明るく注文する有衣に、絶対気づいていないと苦笑しながら、例のごとく、作り置きがあるができたてを渡すために作つてやる。
譲は作ることに集中しようと思いつつ、どうしても前のふたりをちらりと見てしまう。

直輝の視線は譲の予想よりもきつくなかったが、それよりも有衣との密着具合がすごい。

あれだけ年齢にこだわって悩んでたとは思えないべつつきっぷりに、譲はこつそりと笑う。

しかも、恋愛初心者のはずの有衣が、そのことを既に普通とじらえている節が見えて、刷り込んだ直輝にある意味感心した。できあがったものをパックに詰め、マウスケアのタブレットを付けてやる。

「橋行くんだろ」

「え、…あっ！…」

内緒話のように譲に言われて、有衣はしまった、という顔をする。橋でキスをしなくてはいけないのに、よりもよってキムチチャーハンを買ってしまった失態に凹んだ。

事情を知らない直輝は、有衣がどんよりするのを不思議そうに見つも、用は済んだとばかりに譲の前から歩き出し、譲の苦笑を誘つた。

その後もお好み焼きだのチョコバナナだのフライドアイスだのを買ひ、中庭のベンチに落ち着いた。

ベンチからは橋が見えるが、やはり何組かのカップルが密やかにキスを交わしているのがわかる。

こんなに見えると言うことはやっぱり目立つかもしれない、と有衣がひとりでどきどきしていると、直輝が顔を覗きこむ。

「何見てるの」

「は、橋、です」

見ていたものが見ていたものだけに、有衣は目を泳がせ吃りながら答えた。

有衣の様子がおかしいので、直輝も橋に視線を移してみて、一瞬固まつた。

「……大胆だねえ」

「で、ですよね…」

有衣と同じ光景を目にした直輝は、若いなあと変なところに感心した。

まさかこの後自分が同じことをする事になるとは、この時点では微塵も思っていないのである。

有衣も直輝の反応が微妙なのでどうやって言いだそつか悩み、とりあえず先に買ったものを食べる事に集中することにした。

結局有衣は言不出せないまま食事の時間を終え、タブレットを舌の上で転がす。

せっかくだから文化系の展示なども見て回りつつ話になり、中庭から校舎内へと向かう。

写真部や美術部、科学部などの作品は、意外と見応えがあり、あれこれと話しながら見て回ると時間が経つのも早い。

ほとんど見終わったときに、一番端にやけに女の子やカップルが集まっているブースを見つけ、興味を惹かれてふたりで近づいてみるとパンフレットには手芸同好会という微妙な名称が印字されていたが、中を覗くと想像以上のものが並んでいた。

ビーズ、レザー、シルバーで作った様々なアクセサリだった。

「わあ…きれい」

「自分たちで作ったなんて、すごいな」

「ほんとですね」

手に取つてみると、普通にお店で売つているのと差がわからないほどだった。

しかも、学園祭仕様だからか、値段もお手頃だ。

せっかく直輝と一緒に過ごせた記念に、何か買おうかなと選ぶことにする。

その中で有衣の目を惹きつけて離せなかつたのは、メビウスの輪のようなデザインのシルバーのピンキーリングだつた。

裏側にほんの小さな石が嵌め込まれているが、表から見るとシンプ

ルそのもの。

じつと見ていると、直輝が有衣の小指をそつとなぞつてから、リングを手にとつて有衣の小指に嵌める。

サイズ違ひの物もあつたのだが、直輝が嵌めたものは有衣の指にぴつたりだつた。

「気に入った？」

「あ、はい。キレイだな、つて…」

「じゃあ、それにしよう

「え？」

驚く有衣をよそに、直輝はそつと会計を済ませてしまった。

慌ててお財布を出す有衣だつたが、直輝は笑顔で柔らかく制してしまわせる。

「今日の記念

そつと囁かれ、有衣はかーと顔に熱を上らせた。

その様子を見ていた今会計をした生徒が、もつ少し上のサイズのものを指差して声をかけてくる。

「ペアでどうですか？」

直輝は、その声に片側の眉を上げた。

アクセサリ類は特別好きというわけでもなく、今まで唯一着けたことがあるのは唯との結婚指輪だけだつた。

自分はいい、と断ろうとしたのだが、有衣の目を見た途端どういうわけか頷いてしまつた。

多分、その中に小さく灯つっていた期待感に、負けたのだ。

直輝はまた自分で会計しようとしたが、有衣の強硬な反対にあり、結局有衣がいそいそと会計をした。

久しぶりの、しかもこれまで嵌めたことのない指に着けた物は、多少の煩わしさを直輝に覚えさせる。

だが、ふたりの小指に嵌つた同じリングを見て、嬉しそうにほほ笑む有衣を見ると、そんな煩わしさも飛んでいく。

有衣と繋いだ右手のほんの一部分に、ひんやりとした感触が伝わり、

直輝は妙に浮かれた。

校舎から外に出ると、だいぶ日が落ちており、中庭はライトアップが始まっていた。

昼間よりも随分とロマンティックな場所に変わり、カップルはさらに増えている。

時計を確認した直輝は、慧との待ち合わせ時間を思い出して慌てた。
「あと10分しかない。急がないと」

「え！？」

歩きだした直輝の腕を、有衣は慌ててぎゅっと引っ張った。

「ま、待って！！…ください」

思つたよりも大きな声が出てしまい、後半は尻すぼみになる。
振り向いた直輝も少し驚いたような顔をしていた。

「どうしたの」

「まだ、橋に行つてないから」

「橋？」

ジンクスを説明し終わる頃には、有衣の顔は本日何度もかの完全なる赤面状態だつた。

捉えようによつては、つまり、キスを強請るといつことになるのだ
と、話しながら気づいてしまつたせいだ。

聞いた直輝は、昼間見た光景に納得がいつたが、自分と置き換えて
みると若干引き気味になる。

それでも、普段あまり自分を出そうとしない有衣が、ここまでお願
いしてくるのを見れば、頷かざるを得ない。

そして、有衣がキムチチャーハンを買った後に一瞬どんよりした理
由に思い当たり、かわいくてしかたなくなつてしまつた。

手を繋いだまま橋の真ん中へ到達すると、軽く唇を触れ合わせる。
その時すぐ隣に来たカップルがキスを始め、有衣は間近で見るそれ
に驚いて気が逸れてしまった。

直輝はそんな有衣に苦笑し、有衣の顎を軽く捕えて視線を戻させる。

「よそ見しないの」

「ごめんなさい、と言いかけた有衣の声は、直輝の唇に吸い込まれた。直輝に身を預けながら、有衣は意識の片隅で思つ。

こんことで、本当に永遠を手に入れられると信じているわけではもちろんない。

だが、絆を意識するという意味では、効果があるだろう。

そして、本当はこんな場所でこんな風にキスをするなんて、多分嫌なはずの直輝が応じてくれたことに感謝した。

唇を離した直輝は、いたずらっぽく有衣を覗きこむ。

「…キムチ味」

「うそつ！？」

「うそ」

「もつつ、直輝さん！」

慌てる有衣をおかしそうに見て笑う直輝に、有衣は顔を赤くして怒る。

他のカップルに場所を譲つて橋を下り、門の外に出ると、非日常は静かに終わつた。

かに見えたのだが。

目聴くペアリングに気づいた慧から散々意味ありげな視線をくらひ、直輝は疲弊してしまつた。

しかも、その夜。

晴基も眠つてしまつた後の、有衣とのふたりの時間帯。

持ち帰つた衣装を着てみせた有衣が、直輝を困らせたとか、困らせなかつたとか。

学祭終了です！

らぶあまーテーントは、やつぱり書いて楽しかったです^_^
シルバーだけど、ペアリングにこぎつけたし。

ちなみに、左の小指に付けさせてみました（特に意味は無し）。

このふたりは両の手、ちゃんととした指輪が別の指を飾ることになるのですが

次回から、その方向に向かつてがんばっていく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8501y/>

Home Sweet Home

2012年1月13日18時46分発行